



校友會雜誌

第參號

明治三十七年七月發行

山口縣立萩中學校校友會

山口縣立 萩中學校 校友會雜誌第參號目次

論說

- 戦争と永久平和 卒業生 厚東 太郎
- 大和振興時代の九州と其制御し難りし所以 卒業生 大賀 幾太郎
- 佛敎と我社會 卒業生 河野 孤舟
- 同窓諸君に告ぐ 和村 潭水
- 死學者と吾人の本分 水田 九郎
- 日露戦争 小倉 誠一
- 成功 渡邊 孤聲

雜錄

- 實験に就て 塚本 又三郎
- 講餘漫録 安藤 三郎
- 警醒私言 島尾 平七
- 歲暮に於ける貧富兩者の状態 伊藤 芳華
- 軍國の花 熊谷 梅月
- 口熱集 横見 莞爾
- 田舎の青年 三浦 棧東
- 夏日雜感 和田 愛劍

詞藻

- 歸帆の一節 阿川 四四
- 秋の露 岡藤 絃浪
- 清少納言 全藤 汀舟
- 雨の一滴 松野 貞人

- 夏の夜 片山 金吾
- 初夏の一夜 古野 指月
- 鬼語 頓野 壽人
- 秋宵 全弘 指人
- 驚眼 頓野 指月
- 眼前口頭 頓野 指月
- 梅雨の窓 増野 鴻村
- 行く路 岡村 峯太郎
- 通信數件 六二
- 數件 八一

彙報

- 時局に對する學生の覺悟 ○春季陸上大運動會 ○篠田大尉の南清視察談 ○ガスタフソン先生の遠逝 ○萩同窓會 ○秋季陸上大運動會 ○生徒父兄保證人談話會 ○第四回卒業式概況 ○舊師を送り新師を迎ふ

本會記事

- 三十六年度の野球 九〇
- 擊劍柔道部記事

附錄

- 山口縣立萩中學校職員表 ○生徒郷關別調査表 ○生徒入學前の成業別調査表 ○生徒年輪調査表 ○生徒宿舎種別表 ○卒業生卒業後の狀況調査表 ○生徒宿舎の學校へ入學を許可せられたる卒業生に對して高

山口縣立 萩中學校 校友會雜誌第參號



戦争と永久平和

私人間に争闘あり。國家間に戦争あり。戦争は、世の文明に貢献するか。將た有害なりや。又戦争は、須らく廢滅せしむべきや。廢滅せしむるを得るや。即ち、永久平和は、果して期すべきものなりや。古來、學者、實際家の間に、議論の絶えざる所なり。

平和論者は曰く、戦争は、非常の罪惡なるを以て、決して、之を行ふべきものにあらず。且、歴史に徴し、統計に據て見るも戦争は、年を追うて、減少せり。從て、將來、戦争は絶無たるに至るべし、蓋し、戦争は、之をなすの必要を見ざるに至るべく、從て、戦争は、絶對的に廢止すべきものなりと。

一八九五年、白耳義の首府ブルュッセルに於て、開きたる國際法協會、第十七回の會議に於て、議長は演説して曰く、一八一五年より、一八七三年に至るまで、五十八年間に於て、仲裁々判によりて、戦争に至らずして、國家間の争議の融解したるものは、單に四十あるのみ。然るに、一八七三年より、一八九五年に至る

まで、二十三年間に、仲裁々判によりて、戦争に至らずして、國家間の争議の落着したるものは、七十餘の多きに及べり。因是觀之、戦争は、年を追うて、漸々減少し、遂に、將來に及んては、絶無となるの傾向を有するものなること明白なり云々と。

彼の有名なる學者カントは、永久平和論を著し、主唱して曰く、一般公衆の平和を圖るためには、個人は其の權利を犠牲に供することを拒むべからざると同様に、國際團體間の平和を維持するがためには、各國は、其の權利を犠牲となすべきことを辭する能はざるものなり。故に、各國は、戦争をなし、以て、國際團體全體の平和を害するは不當なりと。

其他英國の學者ローレンスは、其著平和進化論に於て、戦争の絶對的廢止を主張しプロルトは、平和、及び軍備の解除と題する書に於て、戦争は絶對になすべからざるものなり。從て、現に設置せる常備兵を解散すべきものなり。武装的平和は、戦争と全等なる惡事たるを免れず、且、常備兵を設置するは、全く、不生産的の行爲なり。無用の長物なりとし、常備兵設置より生ずる弊害を列擧せり。

尙、或論者は曰く戦争は暴力なり。決して、善惡正邪を區別する標準となるものにあらず。即ち、戦争は善惡正邪に拘らず、強者必勝を、是れ常とす。故に戦争は、甚だ不正の行爲なりと謂はざるべからずと。

平和論者の所説の大意は、右述ぶる所の如し。然るに、戦争論者は曰く。

各國は、皆、獨立の國家として對立するの結果として、各國の利害は、相異なるものなり。從て相互の利害は、必らず衝突するを免れず。已に、利害の衝突を免れずとせば、其終局は、戦争となるべきこと明かなり。故に、戦争を、絶對的に廢止せんとするは、到底、不可能の業に歸す。是れ、恰も、國家の臣民が、個々獨

立して、生存するの結果、各人の利害異なり、從て、相互の衝突を來し、遂に、争を生ずるを免れざるが如し。

曰く、戦争を、絶對的に止むるものとすれば、國家は、國家たるの性質を失ふに至るべし。

曰く、戦争を、絶對的に止むるものとせば、國家は、其元氣を失ふべし。元來、國家は、他國と、其の利害の衝突を來し、其結果、戦争を開始せざるべからざるに至るべき危險あるが爲、其元氣増進するものなり。

今、若し絶對的に、戦争を行ふことなしとせば、安逸を偷みて、遂に、他國に對抗するの元氣を失ふべきや明かなり。故に、戦争は、國家の元氣を鼓舞する良劑なりといふべし。

曰く、國家間に争議あるに當り、戦争を止めて、之を調停し、和睦するは、決して、眞に絶對的に、和睦したるものにあらずして、單に、一時、其意に反して、和睦したるに過ぎず。故に、後日、再び平和を破壊するの虞あるものなり。然らば、則ち、寧ろ、最初より、戦争を開始し、充分に、鬱憤を晴らし、以て、相互の關係を確定せしむるの可なるに如かず。

曰く、戦争は、各國の文明を發達せしむるものなり。即ち戦争は文明の利器といふべし。現今、各國の文明が、斯の如く進歩したるは、實に、古來戦争行はれたる賜なり、何となれば、各國が、古來、戦争をなしたるがため、武器、火藥の發明を競ひ、或は、鐵道敷設に、或は、軍艦の製造に、或は、電信の架設に、力を盡したるために、文運の發達を來し、平時に於ても、大なる利益を與へたればなり。

曰く、戦争は、國民の愛國心、精力、智力を増進するものなり。若し、戦争を絶對的に止めざるべからずとせば、國民の愛國心は大に減退すべし。精力智力も、亦然りと。

戦争論を主張するものも、亦、頗る多し。オーガスチン、ルーテル、フランシスベーコン、ライブニッツ、

ダンテ、モルトケ、リユードル等、これなり。皆、戦争の必要、廢戦の不能を説けり。然らば、右二説中、孰れを正當とするか。余輩、想ふに、共に、一得一失あるを免れずと雖も、戦争を、絶對的に爲すべからずと論ずるは、到底、不可能の業たるべし。勿論、余輩と雖も、聊かなる争を生じたるべきとて、總て、戦争をなすべしと、極論するものにあらず。平和論者の如く、絶對的に、戦争不可能といふにあらずして、萬一已むを得ざる場合に於ては戦争をなすも可なりと云ふに過ぎざるなり。リユードル曰く、「永久の平和は、二箇の條件を必要とす、(一)世人一般、圓滿なる君子人となりて、争を止むる事。(二)各國文明の平均する事是れなり。而して、此の條件にして、若し不能なれば、永久平和も、亦、不能なり。否、永久平和は、人類の墓地なり」と、論者の言、極端に失すと雖も、亦事に永久なく、物に絶對なし、平和と云はゞ一方に於て、戦争あるを豫想するものなり。ルーテル曰く、「戦争あり。平和あり。斯くの如くにして、文明あり」と、要するに、近來戦争の減少は、事實なり。殊に、一八七一年の普佛戦争以後は各國、年々、軍備を擴張し、巨億の支出は、毎年國庫の負擔となり、財政上の困難尠ならず。人民の重税に泣くに至るは、自然の勢にして、從て戦争の有害にして、全廢すべきことを論ずる者、接踵輩出し、殊に、仲裁裁判を常設して、國際争議を決せんとする平和論者を出せり。私的の平和會議は、年々、歐洲の大都に開かれ、永久平和を以て、其の目的とし、一八八八年以來、年々、又は、隔年を以て、歐洲各國の國會議員は、所謂、國際議員、平和會議を開き、仲裁々判、永久平和の爲に盡力せり。然れども、國家の上に、裁判官なし、國家は、自ら、裁判官となり、自己の判決を以て、自ら、執行するものなり。自ら、自己の權利を主張し、自から満足を求めざるべからず。其の戦争に、是非曲直を訴ふるに先ち先づ、他の手段を盡すべきは力むべき所なりと雖も、戦争を廢滅せしむるは、蓋し難し。否、不能なり。永久の平和は空想なり。

戦争論

大 賀 幾 太

戦争は、野蠻的の動作なれば、世界の人智開け、道德進むに従ひ遂に其の跡を絶つものならんと考ふる者あらん。然れども、是れ、愚者の空想のみ。何ぞ、それ然らんや。戦争は、國民の動勢的活動なり。故に、一國民の發展活動盛なる場合に起るべき現象なり。而して國民の活動發展は、大に、其の國民の智力學識に基因すべきものなること明なり。最近十年間の短時月の間に起れる戦争を列記すれば、日清戦争を始として、土希戦争、米西戦争、英杜戦争、北清事變、日露戦争等あり。之を十年間に平均せば、吾人は、此の地球上には、殆ど、日々戦争の行はれつゝあるを知るべし。而も、此の現象が、文明の極點に達せりとも云ふべき十九世紀の最後より、二十世紀の冒頭にかけて現はれしを見れば、戦争は、世界文明の進むに従ひて、跡を絶つものにあらずして、反りて盛に行はるゝものなることを了解するを得べし。又、右の六戦争中、我が國民の干與せしもの、其の半に及ぶ。さて、一步退きて、我が大和民族の情勢如何を察するに、教育は、山間僻地にまでも普及し、殖産興業の道開け、航海貿易の業務は奨励せられ、百揆、下に協同して、上聖明なる君主を輔翼し奉り、立憲君主政體の實、此に舉り、人民は、翕然として、其の堵に安じ、人口の増殖、年々、五十萬に及び其の發展活動の盛なる宇内、能く、肩を比するものなし。而して、外に於ては、日英同盟、日韓

議定書成り、大に、大和民族の活動を標示するに至れり。此によるも、如何に、戦争と國民の發展活動との間に密接の關係を有するかは明瞭なるべし。以上の如く、戦争は、文明の進むに従ひ、益々、盛に行はれ、國民の發展活動と、密接の關係を有するは、即ち戦争の文明的にして、野蠻的のものたらざる所以なり。人或は曰はん、彼の北清事變の際に於ける露國の行動を見よ。到る所、無辜の民を殘殺し、財物を掠奪し、婦女を辱しめ、可憐なる彼亡國の民をして、嘆息措く能はざらしめしに非ずや。而も、尙、之を文明的のものとすことを得べきかと。吾、將に、之に答へて曰はんとす、其の際に於ける我が皇軍を見よ如何に、土民の歸服と信賴とを受けしか。如何に、彼等土民は、其の塔に安ぜしか。果して然らば、是れ、戦争その者の罪に非ずして、戦争干與者の罪なること明なり。戦争は、何所までも、文明的のものなり。殊に、近世、世界道德の進歩に従ひて、完全なる赤十字社の設ありて、敵の傷者と雖も、丁寧懇篤を旨として、之に、治療を加へ、又、捕虜兵に對する取扱法、武器の改良等によりて、益々、其の面目を一新せり。要するに、戦争は、其の干與者の如何によりては、時には、或は、暴國が、鴟梟の慾を逞しくする爪牙ともなり、時には、或は、世界の公道正義を重んずる文明國が、公道正義を無視し、亂暴極る野蠻國を取控ぐ膺懲の利劍ともなるなり。以上開陳し來りし諸點は、戦争其の者につきての諸説なり。吾人は、戦争其のものの諸性質を論じ終れば、其の、他に及ぼす影響を論ずるは、決して、無用のことには非ざるべし。然らば戦争の、他に及ぼす諸影響は、善か悪か。如何に、戦争が、世の進歩に伴ふものなればとて、其の影響は、必しも善なりとは限るべからざるなり。今、戦争の影響を受くべき範圍内にある者を列舉せば、美術、文學、實業、經濟、學術、國民の敵愾心、及び、國家的事業等は、其の主なるものならんか、戦争の、美術に及ぼす影響は、絶對

的に悪なり。其の故何ぞや。これ、戦争當時は、民間に、勤儉貯蓄の、平時よりも、一層、盛に唱導せらるる結果として、其の需要を減ずると、古金銀の提供等により、時には、千古得難き美術品と雖、其の犠牲に供せらるる事あるが爲なり。

第二に、其の、文學に及ぼす影響は如何にといふに、坪内逍遙博士は、左の如く論ぜられたり。抑文學は、もと一種の遊戲、戦争は、最も嚴格なる實際事業、この極慘なる實際的活動は、人心をして、最も、現在に傾かしむるものなり。故に、文學をあげて、現世的たらしむるは、必然の勢なり。然り、普遍平等なる文學をして、特殊差別の文學たらしめ、三世相通の奧妙を没して、世間一般の好嗜に供す。これ、文學を裨益する所以に非ざるなり。就中、文學の最も、高尚なるもの、即ち、純乎たる客觀の詩、劇詩、小説の類は、暫くは、これが爲に、影をかくさむ。獨、主觀の詩、即ち、抒情、述懷の作は、或は、實感に動されたる多感の詩人の不可思議靈妙なる繡腸よりなり出て、至誠、鬼神を哭せしむることあらん。されども、こは偶然の結果、恐らくは戦争の必然的なる直接影響には非ざるべし。と論じ、戦争當時は、文學は、一般に衰頹するものなることに論及せられたり。さすがは、現代文壇の翹楚、其の言、愈、咀嚼して、其の味、愈、深し。又戦争中なる今日、坊間一般の有様を見るに、先づ、文藝俱樂部を購讀せんよりは戦争記事に縁深き日露戦争實記、乃至、新聞紙を購讀する人多き様子を見受くるなり。これによるも、戦争は、普遍平等なる文學をして、特殊差別の文學たらしむる傾向顯然たり。

第三に、其の、學術に對する影響は如何。夫れ、現今の戦争は、全々學術、殊に、理學、工學の戦争なり。是を以て戦争のために受くる學術の影響は、實に、夥しきものあり。而して其の影響は、全く善にして、今

日、世界の學術の進歩の大半は、戦争の力なりと云ふも、過言には非ざるべし。第四に、其の、實業經濟に及ぼす影響は如何。此の影響たる、吾々門外漢の、能く論ずるを得る所にあらざれども、其の結果たるや、決して善なる能はざるべし。或は、商船は、御用船として、政府に借入れられ、或は、敵國より捕獲撃沈せらるる恐あるを以て、外海を自由に航行する事能はず。其の他、荷物運搬に缺くべからざる馬匹は徴發せられ従ひて、荷物の停滯を生じ、商業をして、不活潑ならしむることもあるべく。或は豫備兵、後備兵の徴集により、諸會社は多數の壯丁を失ふを以て、工業上に、大影響を及すこともあるべし。又、多額の軍費支出の結果として、經濟界に、大打撃を與へ、物價の騰貴を見ることもあるべし。而して此等の被る影響は、前三者の被る影響は、前三者の被る影響に比すれば、實に重大なるものにして、引いては、國家、將來の安危に關する事もあるものなり。之に反して、美術、文學は、戦争の勝敗によりて、勿論、多少は、變化せんも、甚しく左右せらるるものに非らず。然れども、實業、經濟は、戦争の勝敗によりて、關係を有するものにして、其の盛衰、其の變動、一も、二も、皆、其の勝敗に左右せらるるものなり。是を以て、戦争の他に及ぼす諸影響を、國家の成立上より觀察する時は、美術、文學の受くる影響は等閑視するも、敢て、不可なかるべし。さて、戦争に、最も重大の關係を有する實業、經濟は、或は金貨の流出を防ぎ、或は、外國船の使用、國債の募集等により、一定の程度までは、其の危態に陥入するを防遏し得べし。第五に、戦争は、國民の敵愾心を喚起せしむるものなり。彼の、安政五年、浦賀一發の砲聲が、桃源の夢境に彷徨ひ居し我が、三千萬の國民を喚起したると同じく、永く、榮華の懶夢を覺醒すべき清涼劑なり。其の他、國家の事業たる鐵道の敷設、學校の増築等、皆、是が影響を受けて、其の工事の延引中止等となる

ことあるべし。然れども、是等は些々たるのみ。要するに、戦争は、其の國民の元氣を鼓舞し、敵愾心を喚起して、華奢に陥るを防ぎ、學術の進歩を助くるに至りては、大に益あるものなり。實業、經濟界に及ぼす影響は悲むべきものありと云へども、人力を以て、一定の程度までは、之を防遏することを得るのみならず、縱令、一時は、危険に陥るとも、戦争の結果は、大に、之を挽回し得るのみならず、益、之をして、隆盛の域に趣かしめ得べき事、日清戦争以後の我が國の如きものあらん。是を以て戦争の是等に及ぼす影響は戦争の必然的の悪影響たらざる事明なり。以上の諸點より觀察すれば、戦争は、世の多數の人々の思惟せるが如く悲しむべきものに非ざるを知るに足らん。唯、吾人の、氣毒に絶えざるは此がために、數萬の生靈の犠牲に供せらるること是なり。

大和振興時代の九州と其制御し難りし所以

河 野 孤 舟

大和振興時代とは、神武帝の御東征より成務帝に至るまで、即ち、大和朝廷が、大に振興し、尙、進んで、益、其の領地を擴張し、中央集權の實を擧げんとせし時代の稱なり。

抑、當時、九州は、我が大和朝廷の治下に有らずして、對馬、一支、未盧、伊都、不彌、奴、設馬、邪馬臺等の諸國分立し、是等を總じて、大倭國と稱へたるが如し。就中、最、強大なりしは、邪馬舊國にして、世々、女子を以て、王となしたりしが如し。故に、漢人、之れを、女王國、或は、女人國と呼べり。この女王

國は、九州全體の覇者にして、其の九州諸國に對する關係は、恰、普露西亞の獨乙聯邦に對する如きものあらざりしが、こは、彼の史に、「國々に市あり、有無を交易し、大倭、之を監す。女王國以北は、特に、一大師を置きて、諸國を檢察し、諸國、之を畏憚す。常に、伊都國に治す云々」とある文、及び「倭は、韓東南大海中にあり。山島に依り居をなすもの、凡、百餘國、皆、王と稱し、武帝の、朝鮮を亡ぼして、使驛を、漢に通ずるもの三十餘國、皆、王と稱す。世々、統を傳へ、其大倭王は、邪馬臺國に居る云々」とある文に徴して、知ることを得べし。

然らば、九州聯邦の牛耳を握りし邪馬臺國とは、何處なるぞ。或は、肥後とし、或は、筑後となす説ありといへども、余は、大隅噲噠郡となす説を、正確と認む。噲噠郡は、即ち、景行帝をして、御西征の已むを得ざるに至らしめ熊襲の巢窟地なり。故に、邪馬臺國を、噲噠郡となす説は、即ち、邪馬臺國、即ち、熊襲となす説にして、余は、この説に依りて、本題を述べんとす。校友諸君、これを諒せられよ。

吾人は、是等諸國の動靜を述べべき順序に來れり。請ふ、暫く、之れにつきて記さしめよ。
九州諸國と、諸韓國とは、地勢上、又、人種上の關係に於て、相往來し、有無を交易して、交通頻繁なりしが、漢武帝の古、朝鮮（遼東半島、及び、朝鮮平安道以北の地）を亡ぼし、眞番、臨屯、樂浪、玄菟、の四郡を置くや威、諸韓國を壓し、九州諸國も、遂に、使聘を漢に通ずるに至れり、是れ、實に、孝昭天皇の即位八十三年とす。後、我が孝靈天皇の六十一年、東漢光武皇帝の建武中元二年に、奴の國王は、使を、漢に使はしたりしを以て、光武は、之れに授くるに、倭の奴の國王の印綬を以てしたり。其の奴國は、今の筑前那珂郡にして、其印綬は、今、尚、黒田侯爵家に蔵すと云ふ。又、倭國王主師升なるもの、使を、漢に使はしたる

ことあり。是等の事實は、又、以て、所謂、大倭國と、漢土との交通が、如何に盛なりしかを、想見するに足るべし。開化帝の即位二十九年頃に至り、大倭國、大に紊亂し、連年、攻伐絶えざりしが、女傑卑彌呼の立て、國王となるに及び、國內、漸く、靜穩に歸するに至れり。是れ、實に、東漢の末、三國鼎立の世とす。卑彌呼は、魏明帝の景初二年、其臣難斗米等々を、魏に使はして、天子に謁し、生口班布を獻せしめたりしかば、明帝も、建中校尉梯儁を使し、親類倭王卑彌呼と詔し、金印紫綬を贈りたり。（崇神崩御の年を去る十九年前）其後、卑彌呼、使を、魏に發すること、二度に及び。卑彌呼の治世は、實に、大倭國全盛時代なりしが、之を、漢史に傳へて、曰く、「卑彌呼、年長じて嫁せず、鬼神道を事とし、能く、妖を以て、衆を惑はす。是に於て、共に立て、主となす、侍婢千人、見るもの少れなり。唯、男子一人有りて、飲食を給し、辭語を傳ふ、居處、宮室、樓觀、城柵、皆、兵を持し守衛す」と、これに依て、これを見れば、卑彌呼は、一方に、君臨せし堂々たる元首たりしことも明かなり。大倭國は、此の如き盛なりし時、千餘人に及び卑彌呼の、崇神天皇の五十七年に死するや、大倭國、再び、大に騷亂し、人を誅殺すること、千餘人に及びしが、卑彌呼の宗女壹與と稱する十三才の女兒の位に登るや、漸く、其秩序を回復するを得たり。されど、既に、邪馬臺國の黄金時代は去り、九州諸國は、漸く、分立の傾向を表はし、邪馬臺國は、只、九州の一強國として、南九州に雄視せしのみ。こは、景行天皇の親征當時の九州有様にも察することを得べし。殊に、景行帝が、熊襲本國たる大隅に入り給はずして、日向より、肥後に轉じ、歸京遊ばされしを見れば、尙熊襲、即ち、邪馬臺國の勢侮るべからざるものありしが如し。かくの如きを以て、帝の親征、日本武尊の西征、仲哀帝の熊襲征伐あり、遂に、神功皇后の三韓征伐となれり。これによりて、彼れは、有力なる後援を

失ひて、漸く、我に屈伏したり。こゝに於て、九州は、我が天孫人種の領土となりしなり。然れども、紀の磐井の叛、又は時に、九州には、大宰府を置かれしによりて考ふれば、西海の、如何に治し難たかりしかを察するに足らん。

右は、九州諸國動靜の大略とす。請ふ、尙、進んで、其の制御の困難なる理由につき、余の見る所を述べしめよ。

我が天孫人種が、青山四周の大和に蟄居して、安逸を貪りし時に當り、人種文明競争の波濤澎湃として、我邊境を犯し、海外新人種の到來するもの續々として、絶えず、其の文化を傳へ、其の風俗を傳へたり。これと同時に、邊境の人民は、進んで、海外諸國に往來し、支那大陸の如き完備せる制度、文物、典章に接せしを以て、彼等の智識は、大に發達して、彼に非常なる崇敬を拂ひしなるべし。之れに反して、文學、典章、一の見るべきものなく、一丁の文字をも有せず、只、漸く、穴居の俗を脱せし大和朝廷、何故に、尊敬せざるべからざるかを解し得ず。且又、性雄悍、豪強なる彼等は、之に臣事するを潔とせざりしのみならず、常に輕侮せしや必せり。況んや、強大なる後援を、海外に有するに在りてをや。蓋し、彼等が、屢、使を、漢國に使はせしは、三韓の王等が、封冊を受けて、各、武威を張りしを見て、彼等も、之に倣ひて、武威を張らんとせしなり。

上述の如き情實の存在するありしを以て、朝廷にては、之が制御に困難したりしなり。

注意、國史と漢史と比較するときは、著しき年代の差違あり。例へば、神功皇后攝政五年、新羅王が徵叱智を質として、使はすとあり。然るに、彼の史には、新羅王は、位を承きて、その弟ト好と、高句麗

に質とし、又、未斯欣を、我が日本國に質とせし事を記す。未斯欣は、即、徵叱智なり。而して、新羅王の即位は、晋の義熙十三年にて、我が反正帝の朝なり。故に、代に於ても、已に、三代の差違あるが如し。此の如く年代の差あるを以て、我が史と、彼の史と對照する時に、人々の意見によりて、同じ事實も、其の起りし年月を異するなり。故に、之を諒して、本文を讀まれんことを望む。

佛教と我社會

村 井 潭 水

維新以來、我社會は、物質的文明の、著しく進歩せしに反し、道德的文明の、進歩せざるのみか、却て、退歩せるが如き感あるは、痛嘆に堪へざる所なり。社會は今や、悲鳴を擧げて、此れが濟を救要めつゝあるなり。國民の品質は、地に落ち、昨日は口に倫理道德を説きし教育家も、今日は罪人となれり。實業社會に於て不信用、不正直は敢て奇とするに足らず。官吏間には、賄賂行はれ、政治家は己の腹を肥さんとし、文人學者は、徒に、營利を貪るにあらざや。教科書事件、分捕事件の聲も未だ、吾人の耳底を去らず、我貿易家が外國に對して、信用を失ひ、失敗せし事も、吾人が、屢、耳にする所なり。今日市巷に見る小説類に、文學の價値ありて、世人を益するものは曉星も只ならざるなり。其他、青年立身訓、處世訓、成功策の名目の下に書かれたる寸毫も吾人を指導する價値なき書籍、其數を知らず究竟、此等は、徒に、利益を得んとしてなせる

ものに過ぎざるなり、此等は、只、其一斑に過ぎざると雖も、我社會は、概して、かくの如し。然るに、近來、此を救はんとする仁者らしきもの見え、大に盡力するが如しと雖も、未だ一として、其實果を見ざるなり。蓋し、彼等は、深く、其腐敗の原因を尋ねずして、徒に、此を救はんとするが爲めなり。何故に、我社會は、かく腐敗せしものなるか、此れ、容易に知るべからずと雖も、主として、我社會に、宗教なきが爲めなり、凡そ、宗教は社會の道德的文明に密接なる關係を有するものなればなり。論者、或は云はん、我が社會には、世界の最大宗教たる佛教、古より行はれ、又、漸く、基督教も行はるに至りたるにあらずやと、然り、我社會には、佛教行はれ、又、基督教あり、されど今日の佛教は宗教にあらざるなり。又、基督教が果して眞の基督教なるか、吾人、此を知らず。されど、吾人は茲に、基督教に就きて、暫く、此を問はず。

凡そ、宗教の目的は、佛教に、所謂、衆生濟度なり。されば、此目的にかなはざるものは、宗教にして、宗教にあらざるなり。例へば、小刀は、物を切るが目的なり、其善悪は暫く措き、少しも、物を切る能はざるものは、小刀にして、小刀にあらざるにあらずや。今日の佛教は、果して、衆生濟度なるか、一見する時は、彼の僧侶は、常に其信徒を寺院にあつめ、説教するを以て、恰も、彼等に教を説くが如しと雖も、此れ、決して、衆生濟度を目的に出でたるものにあらず。

吾人は、常に、日蓮宗の寺院に、病者、不具者のみ、數多、參詣するを見る、日蓮宗の僧徒は、醫者なるか、日蓮は、醫者の開祖なるか、日蓮は精神を濟度せずして、肉體を濟度せよと教へたるか。彼の眞言の寺院に、屢々説教をなすは、信徒の爲めに、教ふるにあらずして、資錢の催促なり、御布施の御願なり。觀望は、金儲

の方便たるが爲めに、一向宗を開きたるか、彼の本願寺の財政整理とは、何たる醜態なるぞ。其他、禪宗と云ひ、淨土宗と云ひ、皆、かくの如し。此等の僧侶の唯一の務は、人の死せる時、葬式の行列に連り、靈前に經を讀み、其死骸を埋むる手傳をなすと、死後の法忌に讀經する事のみにして、常に、酒色に耽りて、肉慾を逞しくせり。大町桂月子、曾て、曰く、「男子、生れて地に落つ、よしや、餓死て死すとも、坊主と、神主とは、なるまじきものなり」とかゝる宗教家ならば、我社會に必要なく、却て、米虫にして害あるなり。桂月子、又、曰く、「一言すれば、日本には宗教なし。隨て、宗教家と云ふべきものなし。唯、葬式の世話をする圓顯あるのみ。破戒の僧あるのみ。惰落の僧あるのみ」と、然り、我社會には、宗教なし。而して現時の佛教は、衆生濟度にあらずして、死人濟度なり、即ち、佛教は宗教にして、宗教にあらざるなり。此に至て、佛教は實に腐敗の極度に達せりと云ふべし。されば我社會の腐敗は、全然、佛教の罪なりと云ふも、敢て、憚る所なきなり。

佛教腐敗の原因たるや、又、種々あるべしと雖も、彼の徳川時代において、基督教抑壓の爲め、佛教は國教となり、幕府の保護を受けたるが爲め、僧侶等は、寺院保存維持の困難は勿論、布教の必要を認めず、彼等は、己の本職を忘れ、酒色に耽りて、恥づる所なかりき。然るに其餘勢、今日に及び、終に、かく腐敗せしものなり。

夫れ、宗教の、社會に必要なは、今更、吾人の喋々を要せざるなり。地球上に、曾て、生存せし人類にして、一の宗教を有せざるなく、彼の殆ど、獸類に近き野蠻未開の民と雖も、尙、一の宗教を有せしなり、其信する所は、或は太陽、或は獸類等にて、種々異なりしも、同じく宗教たるを失はざるなり。此れ、歴史的

に宗教の必要を證明する所と云ふべし。宗教は、しかく、社會に必要なものと雖も、一旦、腐敗するに至りては、其害毒を社會に流す事も、亦、甚しきなり。蓋し宗教は、精神界を支配して偉大なる勢力を有するものなればなり。

凡そ、宗教は、其の何れを問はず、總て、未來を説かざるものなしと雖も、佛教程、未來を説くものも、亦、あらざるべし。此に加ふるに、腐敗の結果、死人濟度となれる佛教は、我社會に、宗教に對する誤の觀念を抱かしめたり。今、我社會を通して、宗教に對する觀念を見よ。宗教は、人に生命あるが爲めに、必要なるにあらずして、死あるが爲めに必要なりとは、大部分の人の懐ける誤れる觀念にあらずや、されば、彼の寺院に參詣する人々を見るに、其多くは、頭に銀髪を頂ける老人のみなり。彼等は、唯、死に近づき、從て來世の恐しき爲め、寺院に參詣するなり。佛を拜むものなり。又現時の青年は、一般に、宗教に對する觀念淺く、彼等は、死に遠く、從て、來世に就きて、深く、考へざれば、寺院に參詣し佛を拜する必要を認めず。彼等は、宗教は、唯、死に近き老人の爲めに存するものにして、年少者の爲めにあるにあらず、又、必要なきものなりと誤想せり。

此等は、實に、佛教の、我社會に及ぼせる影響にして、其結果、終に、今日の如き社會の腐敗となりしなり。されば、我社會の腐敗を救はんとするものは、宣しく、宗教を改革すべし。佛教を改革せずして、社會の腐敗を救はんとするは、猶木によりて、魚を求むるが如しと云ふべし。

同窓諸君に告ぐ

和田春九郎

都門偉人を生ずるか、地方偉人を生ずるか、驚天動地の大偉業は、曾て、都門人の手に於て成されしか、否否、決して、都門、驕奢浮華の士の爲しに非ず。地方朴訥正直の士の爲しなり。見よ、彼の西郷南洲を彼は、實に、薩の一隅より起りしに非ずや、又、見よ、彼のナポレオンを。彼は、ホルシカの一孤島の絶險に、志を養ひたるものに非ずや、嗚呼、地方は、實に偉人を生ず。然れども、單に、地方たる故を以て、偉人を生ずる能はざるなり。山水明媚の地方に於て、始めて、之を生ずるを得、省みて我郷は如何。北は、渺茫たる日本海に臨み、彼の世界人民の活眼を以て注目する浦鹽斯德を望み、町の西北隅の海岸には、指月の山巒峨として、遠く、雲際に聳え、山麓は、櫻花の公園にして、阿武川の清流は、町の周圍を流通し、空氣清淨に、水清く真に、浩然の氣を養ふに足る此の山紫水明の地、豈、偉人の輩出するなくして可ならんや。

幕末維新の當時、幾多の俊傑を出せし事、然りと雖、我が同窓諸君よ、彼佳美なる風景を眺めて、以て、悠々として、自ら得たりとする今日に非らざるなり。此の好地に生れ此の聖代に遇ひ、徒に無爲の人となり、以て、一生を徒過す可けんや。活眼を放つて、現時の時勢を省みよ、我國征清の役に、大勝を得てより我國の武威、萬國に赫灼燦爛たるや、條約改正に依て、歐洲列國の對當の地位を認識せらるゝに至れり。從て、彼等は、眼を我が一舉一動に注ぎ機を臨みて、戰を挑み、以て、東洋を蹂躪せんとす。而して、我國經濟に、軍備に、多忙なるのみならず、朝鮮は、未だ醒めず、支那は、未だ覺らず、東洋の安危、實に、我國

の双肩にかかる。嗚呼、東洋を安全たらしむるは、我國の一大責任なり。然るに、未だ、此の目的を達せざるに、露西亞は、大兵を、滿洲に集め、清韓の地を侵略せんと欲し、支那朝鮮は、大蛇に狙はれたる如き有様に陥れり。是に於て、我が政府は露國に交渉を開き、爲めに、滿洲問題、愈々複雑紛亂をきたし、遂に、兩國の主張は、砲火を以て、決せらるゝに至れり。爾來、我が精兵勇悍なる陸海軍は陸に、海に、連戦連勝の快報ありて、都鄙一齊に、戦勝を祝す。然れども、徒に祝賀し、徒に謳歌するを止めよ。這般の快事に遭遇せる我國民たるものは、此處に、大に考ふる所なかる可からず。果して然らば如何にして可ならんか、大に、我が國民の一層勇大なることを自覺せざる可からず。嗚呼、東洋の天地、此の如きに非ずや、活眼を開て卿等青年の前途を一考せよ、卿等少年は、明治第二の繼續者なり。將來の我日本國の運命を維持すべき重大の重任を負へる者なり。視よ、方今の人士が、重を、第二の國民、即ち、我々青年に置く事を。泰西の文化は駸々として、全國に普及し、廿世紀の社會は、着々進歩せるに非ずや。是時に當り、苟、大日本帝國の男子たる者如何ぞ、黙々蠢爾たるべけんや。

來れ、苟も、我が大和魂を有する我同志諸君よ。今や悠々として、遊惰安逸、之れ事とし、逸樂に耽るの時に非らざるなり。我々が、共に、黽勉すべきは文學なり。技藝なり。實業なり。以て、我が國を富饒ならしむるにあり。以て、我國を強大ならしむるにあり。以て、國威を輝かすにあり。國力果して、富強ならんか。鯢鰐、何ぞ、意とするに足らむ。豺狼、何ぞ、恐るゝに足らん。何ぞ、彼れ、碧眼紅毛の赤鬚奴をして、金甌無缺の我國を潰さしむる事あらむや。奮へ、我が同志諸君。小なりと雖も、成さざれば成らず。他日、吾人青年が、國家の干城たらむ事、決して難きに非らざるなり。只、吾人青年が、勉否如何にあるのみ。

み。記憶せよ、今後二十世紀の活臺舞上に跳り出て、我が國の新面目を、世界に現はさんとするものは、現今の、青年の責任なる事を。

殊に、我が防長二國は、明治維新の時に、偉功を奏したり。而して、我が萩の地たるや、正道正義の尊王を持つて起ちたりし吉田松陰先生の出生地にして、將た、明治の柱石たりし元勳諸氏の出生地なり。されば、此地に生れたる防長青年の責任は、更に、遠大にして萩青年の責務、愈々遠大なる事、亦、言を待たず。若し、一朝、不幸にして、墮落の中に沈まば、吾人は、上は、一天萬乘の大君に不忠なるのみならず、下は、地下に瞑する萩無數の先輩に對して、何の詫言かあらむ。豈、徒過すべき時期にあらんや。日露交戦の今日、諸君、夫れ、奮發勉勵、飽くまでも、學生の本分を盡し、他日、戦捷の結果平和克復の際は、國を富まし、實利實權を得ることを勉めざるべからず。嗚呼、此の山紫水明の地に生れながら、明治の元勳諸氏に次ぐ人材輩出せざるか、百事開明の今日、文に、武に、或は、農商工に、各、希望を立て、干挫屈せず、百折撓まず、以て、目的を全うし、神州男子の名譽を發揮せよ。萩男子の本領を宣揚せよ。

死學者と吾人の本分

水 間 義 繼

吉田松陰、嘗て、人の本分を叙して、曰く、不掬糞水不能成善農。不斷筋脈不能成善工。不傷肩背不能成善賈。不踏死地不能成善士。是れ、誠に、至論といふべし。而して、吾等、學生の本分、彼の善士、死地に入ると、

何れか易く、何れか難き。夫れ、學は、古にありては、氣を養ふにあり。然るを、今の人、一度、儒衣を服すれば、反て、奄々として、將に、絶えんとす。是れ、何の象ぞや。人の爲めに、學あり。學の爲めに、人あるに非らざるなり。専心攻苦、學に勉む、名は、則ち、嘉すべしと雖、然も、翻て、人生の目的を却するあらば、是の如き學は、將た、これ、何爲るものぞ。夫れ士は、戰に望みて、死すること、其身の本分なれ。さるを、學を修め、宇宙の眞理を解せんとするものにして、徒に、死を、名譽とするの風ある、是れ、何ぞ。嘉するに足らむや。吾人は、夫の、吝嗇にして、錢を蓄ふるもの、是れを、守錢奴と呼ぶ。錢なるもの、素と、是れ、人の爲めに、存す。人、豈、錢の爲めに存するものならんや。苟も、人に益なくば、陶朱の富も、それ、半錢の功だになし。然らば、則ち、何ぞ、夫の守錢奴を嘲りたる所以を以て、夫の、死學者を、罵らざる。即ち、所謂、死學者は、其の無益なる、守錢の奴に比して、相去ること、それ、幾何ぞ。形あるが爲めに、錢の、殊に、賤む可きか。形、無きがために、學の、獨り、貴むべきか。其の本分と、方便とを混同するの、誤謬に就いては、兩者、些の徑庭あることなし。夫の死學者は、罵るべき文學界の守錢の奴のみ。見よ、彼のジユムス、ワットは、何が爲めに、かかる大發明をなし得たるか。かの十九世紀の文明は、豈、彼が力ならずとせんや。而して。ワット氏、又、何が爲めに、斯る學識を得たる。若し、ワットにして、よく、八十有餘の壽を保ちしにあらざれば、何ぞ、一世の活學者となり、萬世不滅の芳名を、後世に遺すことを得むや。然らば、吾人、否、學生たる本分、又、那邊に存するか。如何に、大家、英雄、の士とならんと欲するも、其の基礎、其の本體たる身軀、虚弱にして、何事か、よくなし得らるべき。語に曰く、基礎なくしては、高樓を建つる事能はず。又、曰く、大器は晚成すと。然り、而して、吾人の、今日、收々汲々とし

て、學べる中學校は、又、それ、何爲るものを、余は信ず、中學は、大國民を、養成する家庭なり。國家の運命をして、益、安寧に、鞏固に、この軍國多事の二十世紀の大日本帝國を、繼續すべき、國家の干城を出すの門なるを。嗚呼、是の重大なる大任を負擔する學窓に、遊ぶ同窓の諸君よ。諸君の、本校に盡すべき本分は、又、重大に重大を重ねるに非らむや。此の時に際し、徒に、父母の財を浪費する、死學者たらんか。かの半錢の効だに無き守錢奴、何ぞ、此の多事なる國家の國民たる價值あらむや。諸君、諸君の中學時代に於ける本分は、益、身軀の健全を計り、人道を明にし、以て、堅忍不拔の精神を養成し、他日、國家の用に當らんとする基礎たらんを欲するに非ずや。嗟乎、諸君、かかる大任ある身なるを、思はずや。希はくは、夫れ、宜しく、各自、其の本分を全くし、其の志を成就し、是の二十世紀の大舞臺に於て、歩武肅々、益、堂々たる日本主義の本領を、宇内に、發揮し、以て、千歲不朽の、國家經營者たらむことを期せざるべからず。

日 露 戰 争

回顧すれば、日清の變後は、戰風、稍靜まりて、人心も、亦、漸く、戰爭を離れしが、再び、彼の風の衝に當り、我が大和敷島をして、銳戈を取らしむる時とはなりぬ。夫れ、一度、開戰の詔勅の出づるや、我が國民の報國心義勇心は、早くも、滿洲旅順の空に至り、未だ、兩

軍の出兵を見ざるも、人心は、干戈を交へ、火花を散らして、勝利を期せり。

既にして、愈、動員令の下るや、我が國民の報國義勇の心は、烈火の如く、甚だしく、義に勇み、勇に耽りて、身を、軍籍に置く者の奮躍、如何ばかりなりけん。されば、出陣後の氣概は如何に、或は、自ら進みて血書を提し、以て、七十七士の決死隊編入を乞ふもあれば、或は、自ら、死を以て危険なる義務を盡さんとするもあり。其の忠勇義烈、實に、大和民族たるに恥ぢずといふべし。

夫れ、海軍の一度、佐世保の阜頭を離れしより、殆んど、日として、捷報の至らざるはなく、或は、敵艦を砲撃轟沈せしめ、或は、設置水雷に罹らしめしなど、我が平素練磨せし所は、遠く旅順の海上に表はれ、今や、海上權を掌握せり。豈に、快心の事にあらずや。

斯の如く、海軍の大捷と共に、陸軍の殊功は如何に、一度、宇品の港を發せしより、時日、尙淺きも、勝報は、續々として達し、彼の要害險固を以て知らるゝ九連、鳳凰、金州等の諸城は、我が五千餘萬同胞にして、且、國家の干城たる軍人の命を、砲煙彈雨の間に奪はれ、海なす血潮、山なす屍を以て、我が武功は、高く、城壁の上に輝きしなり。今や、我が軍の向ふ所、敵なく、到る所、草木風靡す。されば、旅順は陥落し、シベリア平野は、我が所有となり、露人をして、ウラルの山頂を目標に、西方さして遁逃せしむるは、早や、近きにあるべし。且又、露の國都をして、我が忠勇なる軍士の占領する所とならしめ、露土をして、我が義烈なる將士の蹂躪する所とならしむるは、遠きにあらざるべし。嗚呼、實に、古今未曾有の大快事にして、且、我が國光の宣揚は、これより、大なるはなし。

斯の如く、我が國の今日は、實に、多事多忙なる時局ならずや。此の時に際し、學生たる者の覺悟は如何に。其の活動すべき、範圍は、日月を逐うて、漸く廣く、年月を重ねて、漸く増加せり。豈に、此の時に當りて、安逸に、時日を送り、怠惰に、年月を過して可ならむや。

成 功

渡 邊 孤 聲

可憐なる野夫は、徒に、晴着の美なるを好み、美食を得むと欲す。されど、彼等の成功は、微々たるものなり。而して、野夫の妄想は、よく、可憐なる自稱紳士を望むなり。

さて、成功は、妄想の母なり。故に、妄想は、轉じて、志望を抱き。競争心は、名譽より起りて、進取の志を生ずるにあり。進取の覺悟なくば、決して成功せず。初めより志望を起さざるに如かず。故に、妄想は、よろしく駈るべし。されど、強固ならざる自信が、之を實行する能はざらしむるは、寧ろ、愚人の夢想とも云ふべからむ。又、大なる成功を抱く者は、胸に、遠大の志を宿すべし。唯、漠然、その目的に従事する者は、その事業、小成功に終るなり。而して、吾人は、今將に、生涯の旅行中なり。各自の目的に向つて、歩

一步を運びつゝあるなり。

櫛風沐雨、具さに、人生の慘味を嘗めざるべからず。逆境の悲雨に、消然、勇氣を挫ききて、又、起つ能はざれば、彼は、決して、成功せず。忍耐の覺悟なくば、初めより志望を起さざるに、如かず。岩を踏で、又岩。水を涉りて。又、水、遠く見ゆるは、之、吾人の着目する源泉に非ずや。近く見ゆるは、之、希望の仙界に

非ずや。

時に成功を急ぐべからず。時に、油断すべからず。油断は、よく、悲哀痛の苦を、招くものなり。或は、賢者は、愚者を抜きて、益、かすかなり。愚者は、道を失ひて、花間に憩ひ、日の傾くを知らず。立ちて、夢さむれば、前者既に、見えす。徒に、光陰の速なるを悲み、又、再び歸ること能はず。彼は、終身、枯木の月を見て暮す人なり。

或は、事に當りて、退く勿れ。恐る、勿れ。眞の勇氣は、よく、不幸に勝つと、あゝ。成功の行路は、冒険なりと、愚人は聞きて、幽趣の山に入るも、飄然、手を空うして、歸る人なり。彼が手折らざる香花は、如何に、愚をして賢ならしめ、頑を慰めて、樂園に入らむことを知らむや。



實驗に就いて

塚本又三郎

此問題は、至極、漠然として居るが、爰に、述べようと思ふのは、理化學に關した實驗である。引き續き、理化教員として、私が、平生感じた所を述べるのである。

全躰、何の學問でも、其學問を學ぶに、必要な心得は、色々あるが、中にも、最も、先にすべき、最も、必要な心得は、事實の眞を知ると云ふ事である。苟にも、確かな事實がないと、明論卓説と稱するものも、少しも當にならず。又、幾度聞いても、半信半疑で腑に落付かぬ。例へば、宗教に云ふ三世因果説などは、どうしても、一點の疑ひない様に、飲み込めぬ。然し、無線電信はどうであるか。不可思議とは、

思ふても疑ふ事ができぬ。斯様に、同じ不可思議の中に、一は半信半疑で、飲み込めぬ。一は、疑なく、信ぜざるを得ない」と、云ふ差別は、何故かと云へば、三世因果説は、事實で示されない。無線電信は、論より證據で、事實で示されるからである。故に、學問の研究には、事實の詮索は、極めて必要である。

殊に、理化學では、確かな事實が、本である。理論は、此確かな事實から生れ出たのである。然し、理論も、又、必要には違ひない。元來、事實は、無数にある。之を、一つ一つ別々に記憶する事は、到底できない。其處で、此數多の事實を綜合して、理論を作る。此くすれば、大に、骨折を減じ、又、時間の經濟にもなる。加之、此理論より推察して、新發見の出来る事もある。斯様に、事實と、理論とは、相須で、完全な働をするので有るが。然し、理化學を學ぶ順序は、矢張り、事實を、先づ知り、後ち、理論に及ぼすべきものと思ふ。

夫れて、中學校では、理化學の講義に、實驗を行ふ。即ち、理論の本になる事實を、明確にする目的であ

る。然るに、其實験を見るもの、内に、或者は、實驗を、左程、大切と考へない様に思はれる事が、往往ある。爲めに、理論問題は、割合、よく答へるが、事實問題になると、成績が、一般にわるい。中には、抱腹絶倒の答がある。前任地で、試験に「鹽素の性質」を問ふた。すると「鹹味のもので、形は四角」と云ふ答案があつた。之は、平素缺齋したか、又は、實驗を、面白半分に見逃がした結果と思はれる。生徒諸氏よ、理化學は、文學の講釋でない事を考へられたい。

然し、實驗の数が重なり、増して來ると、なか／＼記憶し難い。之を覺えて居るのは、如何にするかと思ふ問題は難かしいが、兎に角、實驗を見る時、注意と、興味と云ふ二つが必要と思ふ。例へば、甲は、虹を見て、只、奇麗と思ふ許であるが、乙は、其外に、虹の形より色の順まで見届けて、其美を味ふ。又、甲は、萩焼を見て、只、其立派さを見るのみであるが、乙は、其形から、焼上りの工合まで見て、賞讃する。斯様に、觀察の仕方に、粗密が有るのは、注意の深淺と、興味の厚薄から來るので有る。此觀

係を、能く心得へて、實驗を忽かせに爲さぬ様に望む。

講餘漫錄

安藤 主 靜

講説の序をもて、諸生に、必示さむ、必言はんと期せし事の、時間に限ありて、提示詳説することを得ざりしものあるを、その儘に措かむも、心安からねば、思ひ出づるに隨ひて、書き列ねたる、これの漫録よ、ゆめ／＼、識者の覽たまふものにはあらず。

一日本

我國號は、「やまと」といふが、神代よりの古稱なるを、漢字を使用する頃より、文筆の事を掌る人等が、皆支那朝鮮の地より來れるなるにより、その故國の人の慣例が、自己の創意かによりて、日出の方の國、東方の國といふ意にて、日本の字を用ゐる始めたるにて、これより、「やまと」といふに、日本と充て、日本といふ字を「やまと」と訓ずるに至りしなり。かくて、日本の字を用ゐる來れるより、これを直譯して、

察の粗と、密とは、大に記憶に關係する事と思ふ。此觀察力は、平素より慣らす事が必要である。有名な化學家のオストワルド氏は、日々使用する筆紙墨に至る迄、綿密な觀察を怠られぬと云ふ事を聞いた。氏は、紙を買ふ時、數種類の紙を、少し宛、買ひ來りて、其各種の紙に就いて、總ての方面より、色々の吟味をなし、其内で、最良と認められた紙を、常に使用せらるゝと云ふ風で有る。此く、其觀察の綿密と、自信力の強い事とは、氏にして、初めて、爲し得られるので有る。學校でも、生徒諸氏に、實驗を行はせると、否でも、應でも、注意せねばならぬ。又、興味も就いて來て良いが、學校の設備、并に、經費が許さぬから、止むを得ない。因て、諸氏は、日曜などに、草鞋掛にて、旅行し、各種の岩や、礦物、或は、動植物の採集を爲すならば、一つは、運動にもなり、又、觀察力の養成に、必要の事と思ふ。此の如くして、觀察力ができた以上は、理化の實驗を見る丈でも、注意と、興味とが、自然と起り、數多の實驗も、面白く記憶し得る様になる事と思ふ。多少、話が、横路になつたが、事實と、理論との關

「ひのものと」といふ名稱も出來、また、この日出の方の國東方の國といふ意が、もとより美はしき稱へともなれば、日本紀を撰ばれし頃より、ことに、日本の字を、國號に定め用ゐられ、萬葉集の歌などにも、枕詞に用ひて、「ひのものとをやまと」と續くること、なれるなり。

二帝號年號の語記

伊勢の足代弘訓翁の家塾にては、幼童の目課として、歷代帝號、年號、また、詞の活用表などの語誦をなさしめけるよしなり。凡て、土地の東西南北、時代の前後の大要は、書籍を、毎度見ずとも、知らるゝ様に覺え置くべし。土地の方は、地圖をもて、記憶の助とすべく、時代の方は、直線、或は、表によりて記憶せば、便なるべし。然るに、地圖によれる記憶よりも、割合に、時代の觀念に乏しきが、學生の通態なり。弘安と明應と、孰れか先なるか、一條天皇と順德天皇と、孰れか後なるかを知らざるときは、その一時代の談を聞きて、その前後の關係を想ふことを得ざるが爲に、記憶を助くるものなく、興味を催すことなくして、重要な事も、徒に聞過すか、

或は、誤認するに至るべし。ことに、歷代帝號、年號、時代を認め知る標準たるものなれば、他事は措きても、こればかりは、必記憶し、その記憶によりて、その次の記憶を助け、細事の識得に及ぶこと、網の大綱擧りて、細目、これに従ふがごとくなるべし。また、日本歴史のうち、將軍ある時代は、その將軍の名を、順序正しく諸記すること必要なり。これらの事は、中學ならば、初年級の人々に望まじきなり。

(三) 軍國

軍國とは、戰爭をする國といふことにはあらず。按ずるに、これには二様の意義あるがごとし。戰時に、軍といひ、平時に國といふ解釋、これ一義。唐書列傳五十一李元紘傳に、比是時。廢京師職田。議者欲置屯田。元紘曰。軍國不同。外異制。とある軍國は、中外の文字と對して、この例に當るべし。又、軍備を主要とする國を、軍國といひて、必しも、平時、戰時の別によらざる、これ一義。徐寅が憶潼關詩に、天開白日臨軍國。山夾黃河護帝居。とある軍國は、帝居の文字に對して、この例に當るべし。

章にあるごとく、熾仁親王の御手跡なり。親王は、有栖川家の第九世に當り、即、故大將熾仁親王の御父に當りたまへり。有栖川家には、一流の書法代々傳はりけるが、この親王に至りて、最、其妙を極めたまへりとぞ。さて、この額は、舊長藩明倫館の聖壇に掲げたりしものにて、仰止は、詩經の、車牽の篇の、高山仰止といふ句より出でたるものなり。これは、「高山をば仰がんと訓むものにて、止の字は助辭なり。聖人の道を仰ぐこと、高山を仰ぐがごとし。」といふ義に取りて、書きたまひしなり。また、中書王府といふ印あるは、この親王は、弘化四年八月に、中務卿となりたまひ、その中務の省は、唐の中書省に當るをもて、古の兼明、具平兩親王など、中書王と稱し奉りし例により。中務卿の宮といふを修辭して、かくなせるなり。引首の印に、見賢思齊とあるは、「賢を見ては、齊しからむことを思ふ。」と訓む。論語にある語なり。

六 講學の道

講學の道は、多く、人の爲に難詰せられ、屈折せられ、赤面すること屢なれば、自然に感憤激昂して、

(四) 運命

何事を論ぜず、筋骨を勞し、心志を苦め、あらゆる時機を求め、あらゆる方面に向ひ、あらゆる手段を盡して、さて、その結果を待て。志すところ、十分には成らずとも、八九分は成功すべし。縱令、失敗ありても、救済の道は、速に立つべし。然るを、尋常の苦勞をなしたるのみにて、猶、更に進みて、大に盡すべき餘地の存するを棄て、事の、遂に成功せざるを、自己の熱心の至らずとはいはて、「時の運なり。天の命なり。」といふは、それ、即、薄志弱行の徒なり。それ。天は、自助くる人を助け、自傾くる人を覆す。否、天の命といふも、天の命するにあらずして、人の、自らなせるなり。時の運といふも、時の所爲にあらずして、人の、自ら作れるなり。故に、人は、唯、人事を盡して、天命を待つべし。皆人が、心の底も、盡してし、

後こそ吹かめ、伊勢の神風。

と伴信友が歌ひしは、不磨の大訓言なるかな。

五 明倫館聖壇の額

本校の講堂に掲げある額の、仰止の文字は、その印學業長進するなり。また、人に問はれしことは、その時に對ふること能はざるも、後に、多く、讀書の間に、偶然見當るものなり。問はれざることは、泛然看過すれども、問はれし事は、心に留り、見當りて、精密になるものなり。故に、朋友講論の益は、最大なり。然るに、人は、耻を受くるを嫌ひ、我に如かざるものを友とし、自是とするゆる、長進せず。獨、講學のみならず、萬事、屈折に遇ひ、恥辱を受くること多ければ、事理純熟し、世故事變に通すべし。いかほども、屈辱に遇はば、忍耐も強きなり。精神も練磨し、事理にも通し、徳義を増益するなり。新井白石の言に、「總身に、恥いぼ出来るやうに修業いたせば、長進す。」とあり。白石も、少年より、學業には多く屈折せらしことありと見えたり。それゆえに、博聞強記の碩儒となれり。(良齊閒話續)

七 御諱の訓

○定省(宇多天皇の御諱サダカミ) ○寛明(朱雀天皇の御諱ユタアキラ) ○懷仁(一條天皇の御諱カチヒト) ○居貞(二條天皇の御諱イヤサダ) ○敦成(後一條天皇の御諱アツヒラ) ○敦良(後朱雀天皇の御諱アツナ

ガ)○體仁(近衛天皇の御諱ナリヒト)○順仁(六條天皇の御諱ノブヒト)○懷成(仲恭天皇の御諱カチヒラ)○茂仁(後堀河天皇の御諱トヨヒト)○秀仁(四條天皇の御諱ミツヒト)○豐仁(光明天皇の御諱ユタヒト)○幹仁(後小松天皇の御諱モトヒト)○實仁(稱光天皇の御諱ミヒト)○成仁(後土御門天皇の御諱フサヒト)○方仁(正親町天皇の御諱ミチヒト)○和仁(後陽成天皇の御諱マサヒト)○政仁(後水尾天皇の御諱ヨトヒト)○良仁(後西院天皇の御諱ナガヒト)○識仁(靈元天皇の御諱サトヒト)○朝仁(東山天皇の御諱トモヒト)○慶仁(中御門天皇の御諱ヤスヒト)○兼仁(光格天皇の御諱トモヒト)○惠仁(仁孝天皇の御諱アマヒト)○統仁(孝明天皇の御諱ヲサヒト)○舍人親王(トナリ)○阿保親王(アホ)○人儒親王(サチヤス)○敦實親王(アツミ)○代明親王(ヨアキラ)○常明親王(トコアキラ)○他戸親王(ヲサベ)

八感吟のあまり
等閑に、書きすさめを、鳥の跡は、人の心も、見ゆといふなり。(村田春海)
形正しければ、影曲らず。文字は人の心畫なり。

故に、文字によりて、心の状態をト知せらる。晴の業ならずや、慎むべきの至ならずや。早き瀬の、水の上には、降りきえて、氷るかたより、積もる白雪。(前大僧正道潤)

一生の大目的の前には、許多の小目的あり。一步又一步、その踏臺をたしかにして、然るのちに、上り進むことを得べし。是故に、かの躁進者を惡む。

なりはひを、いそしむ道の、奥にこそ、黄金花さく、山はありけれ。(千家尊福)

辛抱は金なり、金は富なり、富は國の力あり。故に、國の力は、唯、人の力を惜まざるより始る。見わたせば、天のかく山、うねひ山、争ひたてる、春霞かな。(加茂真淵)

天空海濶の詞氣、一讀して、妄念を掃ひ、再讀して、吾氣の浩然たるを覺ゆ。

いくそたび、かき濁しても、清みかへる、水や、御國の、姿なるらむ。(八田知紀)

世に汗隆なきにあらず。その機に臨みて、正氣の、光を放ち、これを反撥するもの、これ、我國

體なり。あゝ、一家同胞の實ある國は、社會の制裁の大なること、かくのごときものあり。

御民われ、いけるしるしあり、天地の、榮ゆる時に、遣へらく思へば。(海犬養宿禰岡麻呂)

聖天子の恩澤に沐する臣民として、千秋有望の國民として、世界の大競争場に立ち、學問事業の偉績を自由に發揚することを得べき、今日の大日本人こそ、愈、生ける甲斐あれば、岡麻呂、また出づとも、その言を易へじ。

あり。頼山陽は、時宗一世之功。足以償祖先之罪。と贊し、肝付兼武氏は、その殲蒙古寇碑記に、抑此役也。名義明。盛功偉勳。二千年之所無。民至今受其賜。詩曰。共武之載。以定王國。若時宗。可謂社禮之大臣也。といひまた、幸今天皇聖明也。追贈官位之盛典可期也。といひたることありしが、六百年後の今日、果して従一位を贈らる、盛典あり。あはれ、圓覺寺墓門の苔も、まだ、一段の生色を添へたるるべし (未完)

九北條時宗

文永五年、元主の、始めて、我國に、使を遣はし、悖慢の書を贈りしとき、鎌倉執權職として、斷然、強硬の處置を取り初めたる北條時宗の年齢は、方に十八歳にてありき。それより、弘安四年閏七月一日の大捷まで、十四年の間は、一に國內の士氣を鼓舞して、外患に當るべき經營をなしたること、いかに大膽なりけん、想ひやらる。しかして、時宗は、その後三年にして、身を終へたり。さては、その一生は、殆、元寇の變亂と相終始すともいふべく、いはば、唯、國難の措置のために生れ出でしがごとき觀

警醒私言

卒業生 鳥尾平七

回顧すれば、こぞの春、われ、遊學を止めてより、郷里にあること、茲に一周年、略、田舎の人情を知ることを得たり。彼等は、概して、木強、勤勉にして、節儉家なり。故に、遊學生徒が、休暇を得て、郷里に歸り、書生風とにや、一種ある姿にて、さも心なげに、遊びあるくを快からずや思ふらん。余に問ひて、曰く、「中學生徒が、否、中學生徒には限らず、多くの書生連が、郷里に、歸られると、家事の

手傳には、顔も向けず、さりとて、格別、書籍を見る様子もなく、たゞ、悠々閑々、遊んでばかり居られませんが、あれは、ど一てすが、なんぼ、休暇とても、一ヶ月以上もある夏休みなれば、かく、遊んで斗り居らずに、折々は、書籍も繙き、時には、家事の手傳などしたら、遊ぶ時にも、一層、面白く、親達も喜ばれまして、眞に書籍を讀んだ人とも見えませうに、何と、遊び好きの學生ですか、あれでは、落第も多い筈」と、あら／＼しく、片腹いたき言葉

を、余は、柳と受けて、「はいでも、御承知かは知りませんが、中學校にても、師範學校にても、休暇のある前には、試験がありまして、夜の目も寝ぬ様に、勉強しますから、少々は休まねば、身躰が持てませぬ」と、答へしに、「それゆゑ、いけません、そんなに、試験の眞際に斗り、勉強せずに、平素から、勉強して置いては、如何ですか」と、「はい、それは、復習から、豫習から、一日も、休んで居るといふわけではありませんが、何分、競争心の強い學校で、我劣らしと勉強しますから、覺えた上も、よく覚えてねばなりません、それには、運動もせねば、五

躰が持てず、學生の事情は、實際學校に居た人てな

くは、わかりませぬ」と、其場は、よき加減に、つくろいたるつもりなれど、余が、中學時代を回想して、殆ど名狀すべからざる恥辱を覺えたりき。請ふ、今より、此老翁の言の當否を論ぜんとす。

在來、我國學生の弊風として、先づ矯正せざるべからざるは、遊び好きなることなり。身、未だ立たざるに、早くも、紳士のばけそこなひを學び、朝に、花を見るも、なほ飽かず、夕に、芝居を見るも、なほ飽かず、歌舞に、菓子に、浮かれ浮かれて、その窮る所を知らず。日、又一日、流連して、其樂、愈、満足せず。勉學の爲とて、二三人集れば、忽ち書籍をば、餘所にして、快樂を求むる方法に話を移す。しかも修學の餘暇を以て、するに非ずして、學校より持ち歸りたる風呂敷包は、そのまゝにて、翌朝に至り、始めて、其の日の書籍と包み換ふるが如きに、至りては、其、本分を誤ることも、また、甚し

と言はざるべからず。學生は、素より活氣なくして、よく學業の進むものにはあらねど、自信の範圍を、外るゝに至りては、骨は、海月よりも、柔しと

いふべし。彼等は、快樂を得るに、汲々として、眞の快樂を、得ることなし。否、快樂を得んとして、常に、最大の苦痛を受けつゝあるなり。左に、之を説かん。

人生、最大の苦痛は、病乎、死乎、老乎、貧乎、抑、失意乎、これらのもの、何れも、皆、苦からざるにあらねど、生死の外に、濶歩する迄に、修養を積み、老病死もさまで苦しからず。足るを知れば、貧も苦しからず。飽くまでも、希望あれば、失意も、苦しからず。若し、世に、眞に、苦しきものありとせば、それ唯身に負へる本分を盡さずして、責任を果さざるの一事か、浮世に、生存する間、苟も、良心ある以上は、我身の責に關して、苦痛なきを得ず。一日の責を果さずんば、其夜は、苦痛の夜なり。一生の責を果さずんば、其身は、苦痛の身なり。子となりて、其の責を果さず、國民として、國民の本分を盡さず、金を借りて、返さず、學生にして、遊意に耽り、勤勉ならざるの類、皆これ、身に負へる責任を、果さざるものなり。而して、われ、その何故に、苦しきかを知らず。唯、良心の呵責、あれ

ばなり。余は信ず、世に、良心の呵責ほど苦るしきものはなしと。而して、普通の人において、責任を果さるゝ一事、最も、深く、良心に呵責せらる。彼の、遊意に耽る學生、外部に、一點の苦痛だも、なきが如きも、豈、この良心の呵責なしとせんや。是、余が、前に、言ふ、所の彼等は、却て、最大の痛苦を受けつゝありとの謂なり、敢て問ふ、彼の氣なく、骨なき一部分の學生諸君、果して、良心の呵責なきか。この苦痛はなきか。彼の老翁に耻ぢざるか、陋なる哉、樂を得んとして、最大の苦痛を受けつゝあり。嗚呼、これ、何を以て然るか。抑も、如何にして矯正すべきか。

遊び好きの學生といふことを、言ひ換ふれば、勤勉ならざる學生なり。活動なき學生なり。水、動かざれば、則ち、腐敗す、人、活動せざれば、則ち柔化す。勉勵だにせば、邪道に陥る暇はなし。出精せば、凍る間もなし水車。念一念せよ、我等は、何の爲に、世に生れ、いかなる天職を有するか。天意、茫々、測るべからず。たゞ、人には、活動力あり。血は涌き、情は熱す。人は、一生、黙座して、枯死

する能はず。必や、起て、其力と、才とを試みざるを得ず。其活動力は、知らず知らず人に、活動を命ず。而して、何等の聲、起て働けとささやく。分に應じ、力に應じ一日、働けば、一日の務を盡し、一生働けば、一生の職を。終へたる心地す。人世觀などと、名を附けて、考へ込めば、果もなければ、簡単に解釋すれば、人世は、畢竟、勞働の謂に外ならず。飢ゑて、食物の味を知り、疲れて、休息の味を知る。終日、額に汗して、隴畝の間に、鋤を執りたるものにして、初めて、夕顔棚の下涼の樂あり。血を流し、涙を流して、一日の勤を盡したりと、自覺するものにして、始めて、眠の神の寵あり。眞に、よく勉め、よく苦めるものは、僅の時の、何事もなき時間に、無量の快樂を感ず。諸君、眞の快樂を得んと欲せば、勤苦の學生たるべし。勤苦の裏面、既に、自ら、快樂を有す。必しも、美酒あるを要せざるなり。佳肴あるを要せざるなり。羨む勿れ、彼の、金殿、玉樓に、醉生夢死するもの、安ぞ、眞の快樂を知らんや。刻苦せよ、學校は、ただ、平穩、無事に過し、末席にあるも、落第だにせ

ずば、此上なしと、すまし込むの學生安ぞ、將來、競争場裡に立つを得んや。飽くまでも、慾心あれ。慾は、實に、人をして、活動せしむる原動力なり。教科書内の事を諳記して、足れりとすべからず。曠漠、深遠なる學海は、五年、十年の僅少時間を以て、遊泳すべきに非らず。いよく進みて、いよいよ深きは、學界の眞相ならずや。宜しく、參考書を繙くべし、質問を起すべし。以て、純粹の樂を求めよ。

余は、更に、彼の老翁がいへる家事の手傳に、及ばんとす。在來、我國學生は、勞働を賤むの風あり。身體練磨の爲めとて、機械體操は好み、ベースボールは熱心に、擊劍、柔道は、好きなるにも拘らず。一舉、兩得なる家事手傳の勞を、厭ふは何ぞや。吾人は、殆ど、了解し能はざるなり。是れ、前の老翁が、余に、かゝる質問をなしたる所以、世人が、動もすれば、學生は不生産的人物と誹る所以、學問が、實業と離るゝの端緒、學生と、勞働者流と、時に衝突する遠因なり。學生は、書籍のみを見るとき云ふ規則はなし。家事の手傳や、生産的の勞働は、身

體の練磨にならずといふ道理はなし。家に、歸りては、家に從へ。郷に入ては、郷に從へ。古人曰く「學んで當世に用なくんば、不學にして、田畝に耕すの賢なるに如かず」と。彼の老翁の一言、強ちに恨むべきや、否や。兼行法師が、徒然草にも、「心なしと見ゆるものも、よき一言は、いふなり」とあり。願くは、親愛なる同窓學友諸君、今より、益、切瑳、勉勵し、余をして、彼の老翁に、食言せしむる勿れ。今や、國事多端、出征軍人が、一命を、鴻毛に比して、骨を滿洲の野に晒して、厭はざるの勇氣に思ひ到らば、一起、奮發、以て、大活動せざるべけんや。

歲暮に於ける貧富兩者の
状態

熊谷 芳華

三百有餘日も、いつしか、立ち去りて、回顧すれば、凡て夢の如く、今、新たなる年を迎へんとす、世の中は、何となく、事繁く見え、人の心も亂れたる系の如し。此の時に當り、少しく、世の狀態に觸

目すれば種々の現象は、忽ち、來り映ぜん。就中、最も烈しく、視覺を刺激するものは、必ずや、貧富兩者に於ける狀態の差異ならん。

我れ去年の暮、冬期休業の閑暇を得て、我家にあり。一夜、飄然として、家を出て、街道に散歩して、偶、一呉服店の前を過ぎしに、歳晚なれば、殊に、買客多く、甚だ、賑はしかりしかば、何心なく打ち見やりしに、吾妻コートを着け、縮緬の御高祖頭巾を被ふれる富家の人とおぼしき、一人の、年猶ほ若き女の、そが婢とおぼしきを伴ひて、餘念なく、綺羅、錦繡の美なるを、求むるありき。其の傍に、一人の、婦人の頭髮も理めず、衣裳も繕はざるが、脊に小さき首、傾けて母の温りに、いと安らげく眠むれる稚兒を負ひ、十歳餘の女の、足袋も穿たず、いと寒げに見ゆるを携へて、店さきに、釣られたる布の小片を連りに擇びて、何れかを、少女の爲めに、求めんとするもの、如きあり。然るに、此少女は、常に、先きの女の求むる綺羅を、餘念なく守りて、恍惚たりしが、何に思ひけん、急に、母の袖を引き、て何事をか求むる様なりしが、母は、忽ち、目を瞑

して、顔に、紅を漂し、何事をかいひて、いたく叱せり。少女は、怨めしげに俯して、徒に、指もて、膝をなづるのみなりき。事は、極めて些細なりと雖も、此の貧富兩者の境遇、及び、心中を熱慮すれば、誰か、何等の感か起らざるものあらんや、我は、哀憐の感忽ち生じて、種々の聯想、縷々として絶えず、今は己れの歩める處をも忘れ、身は、空想世界の者となりし時、悲哀なる一聲は、急に、我が耳を衝けり、己は、忽ち、空想の境より歸れり。此時、聲の主人は、恰も、我が側を過ぎぬ。見れば、一人の辻占賣の小兒なりき。頭髮は延びて、耳を蔽ひ、滋養分の足らざるならん、顔色蒼白にして、頬骨立ち、小兒の、かの一種得難き受矯は失せて、却て、物憐く、小さき足には、半ば破れたる草履を穿ちて、さも、重げに、歩を運ばせり。其瘦せ衰へたる身には、只、形ばかりの衣服着けて、到底、寒氣に堪ふべしとも見えざりき。我は、この状を見るや悲痛の念は、いや増しに増して、聯想、益甚しく、腦中は、全く、秩序なく亂れぬ。

思へ、富者の女も、貧者の女も、又、此の小さき小

る負債の増加して、歳晩に至りて、遂に、返濟の道なく、而して、人情を解するを得ざる貸主は、苛酷なる督責を行ひ、遂に、家財道具をも悉く奪はれ、さらぬだに貧しき家産、今は、全く、他人に歸して、家族と共に、益、貧苦に泣かざるべからざる者あり。或は、道を守るの寡婦、孤子を率ゐて、糊口に苦むものあり。孤子は、母の心中を察するに由なく、隣の富みたる家の風を見ては、之れ羨み、直ちに歸りて、或は、餅を搗かん事を求め、或は、紙鳶を買はん事を迫り、何にくれとなく、悉く、母に訴ふ。之を聞く時の胸中は、果して如何ならん。實に察するに餘あり。或は夫の家族を遺して、身を匿し、或は、愛女を賣りて、債を償ひ、其の甚だしきに至りては、自滅して此の苦痛を免れんとするものあり。嗚呼、何ぞ、歳晩の悲惨なる。恰も、終年の悲哀を、一時に集めたるが如し。夫の盜賊の、歳晩に多きは、全く、之に因るか。其所業は惡むべきも、其の哀情を察すれば、亦憐むべきものあるなり。

是れに反して、富者を見よ。深室に、火爐を擁して、冬の寒冷の如何なるさへ知らざるが如し。まして、

兒も、等しく、是れ、人なり、然るに、富者の女を見よ、己れの嗜好は、悉く、之れを圓滿ならしむるを得て、心中、私に雍々たるに、貧者の女は、僅に、母の切なる愛情によりて、漸く、可憐なる欲望の少許を充し得、以て、満足せざるべからず。何ぞ、其の哀れなる。又、此の小兒を見よ、世の小兒は、指折りて、只管、元旦の一刻も、早く來らん事を待ち、男童は、年の樂みを増さん爲めに、玩具の数の多きを望み、少女は、年賀に、美服を着けんと、母を強ふ。然るに、これは、一箇の玩具、一片の布をも買ふ事を、得ざるのみならず、凍えたる足を、重げに運び可憐の聲を振はせて、辻占を商ひ、以て、歳晩、家計の困難を救ふの一助となさんとす。その前者と距たる事、雷ならず。誰か、一掬の涙を惜まんや。それ、世の中には、此の兒のみに止まらず、貧に泣くの同胞は、其の數、枚擧に遑あらざるに、或は、兒女をして、其の朋友と、共に樂しく、新年を迎へしめ、己等も債鬼の追求を免れて、愉快に、雜煮餅を味はんと欲し、夫婦相助けて、粉骨碎身の苦を嘗むるものあり。或は、力の及ばざるため、自然に生ず

貧民の窮狀を察せんや。只管、自家歳入の、年々増加するを喜べるのみ。其の少しく、眉を蹙むる事あるは、只、利子拂込み、地料納付の、少しく遅れたるを煩ふのみ。何ぞ、貧者の困苦に比するを得んや。今日は忘年會、明日は某會と、美酒、珍饈に飽き、放吟高歌に聳せるの豪奢、貧民をして、之れを見れば、必らず羨怨の涙を拭はん。又、其婦人を見よ。孜孜汲々として縫ふ所のものは、何するものぞ、賃銀を得んとするにはあらず、只、年頭に、衣服の美を爭はんとする準備のみ。其心中の長閑なる、已に、新年の瑞氣を集め盡したりと云ふべし。嗚呼、思へ、貧者苦痛の歳晩は、富者喜悅の時なり。若し、世の中に、貧富の別なかりせば、吾人同胞は、此の歳晩を、平等に感ずる事を得て、如何ばかり樂しからん。いかばかりか喜ばしからん。

抑も、貧富とは、何者ぞ、深き學理は措き、通俗の言を以てせば、即ち、金の多少なり。嗚呼、夫れ、金、何の權かある。何の力かある。只、これ、一片の紙、一塊の礦のみ。然るに、其の魔力は、能く、人の喜悅、悲哀を自在にするのみならず、實に生殺

與奪の權をも有するに至る事、實に此の如し、嗚呼、人生は、實に果敢なく、世界は畢竟、夢の如きものなるか。

軍國の花

伊藤 梅月

時は、明治卅七、龍年の春二月、神武天皇即位ましましてより、二千五百六十四回の紀元佳節、十一日の曉天に、さし昇る旭と共に、暴虐殘忍なる露國に對する宣戰の大詔は、燠乎として、九重の雲上より降り、渺茫限りなき滿洲の野に、いや繁れる草葉の、末に、數知れず、おく露も、赫々たる五色の日光に照らされて、ひと度は映じて輝くも勇しく、やがては消え失せてあとなきも哀なり。

爾來、渤海の濤狂ひ、幾十百の艦艦は、決死勇武の益荒男を乗せて、打ち進み、滿洲の天亦、震轉し、百萬の貔貅、既に、敵軍を呑みて立てり。見よ、彼が、詐謀を逞うして、奪ひてし旅順の要鎮を、これ、露國東洋艦隊の根據地なりき。極東總督アレキシエフが、據りて、以て死守し、絶東の陸軍なりと叫び

つる、激戰奮闘の功にあらずとせんや。その忠勇、その義烈、嗚呼、眞に、帝國軍人の精華を發揮し、軍國の美花を開けるものといひつべし。

實にや、思へ、萬花の王と謠はる、櫻花も、そが營養を缺く時は、爛熳たる美を飾る能はず。三軍の士、如何に籌畫の妙あるも、如何に、決死の勇あるも、もし、その國民の、強固なる應援なかりせば、到底其の大功は、得て期すべきに非ざるを。こゝに、我が國人を顧れば、義戰宣布の天命、一度降りて以來、累年の宿憤、一時に發しつるにか、面に、文明の假面を被り、心裡、野獸にも劣れる暴露の民、不俱戴天の仇敵たり、世界の平和をかき亂す無道の露人、他は知らず、我が皇國の快男兒は、こを、一日として、見逃がす事を得んや、などか、打ち懲らさずてやとの念、いよ／＼昂く、少しも、財寶を惜むとなく、又、更に、勞苦を厭はず只管、外征將士の應援に勤め、遺族保護も勵行するなり。知るや、前に、國債募集の事ありし時、國民の應募額が、其の募集額に幾倍せしかを。又、知るや、恤兵部、其他の醜金、無慮巨萬の多額に達せるを。されば、遠征百萬

つる地なりしに、戰端開けてより、未だ、幾句をか經たる今日、そも、其の有様如何なるぞ。思ふに、我が海軍々人は、今や、忠あるを知りて、他を見ざるなるか、手を失ひ、足に傷き、骨折れ、肉破る、も、自ら知らざるもの、如く、同胞戰友幾百の死傷も顧るに暇なく、吾が船沈まんとするも驚かず直進、敵を打ち、奮戰、敵を破るをもて、本務となす、その忠勇、その義烈、嗚呼、眞に、帝國軍人の精華を發揮し、軍國の美花を開けるものといひつべし。精銳、萬國に冠たりと、自ら誇る敵の陸軍が、アリナレの江畔、九連城の天險に陣し、旅順の咽喉、金州城の鐵壁により、あらゆる防禦の計策を施し、一步も退かじと備へたりしも、勇猛の名を、世界に振ひし克薩苦騎兵が、脊より側より衝き來りしも、正氣、天を衝くてふ神州男子の鋒先に、いかてか敵すべき、互に、幾千百の死傷を出しつれど、邪は、夫れ、正に勝たずして、遂に、我が軍の全勝に歸せしは、もとより、いとも尊き陛下の御威稜による所なりと雖も、豈、又、我が陸軍將士の、砲火を犯して、死を惜まず、淋漓、秋水に奮し、慘然皮肉を飛ばし

の節は、心、郷關に、憂慮を挟まず、身に、需用の缺乏なければ、専心一意、進みに進みて、赫赫の偉功を奏し、終には、克く、最後の大勝を博するに至らむ事、もとより、我等小輩の、いふを待たざるなり。

これを以て、これを思へば、子をおき、妻を残し、父母を捨て、家を去り、決然、莞爾として、國難に趨き、戰氣深き異域の野に、輝きわたる旭の御旗に、匂ふ敷島の櫻木、武士の屍は、實に香しくして、さても、美しとも美しく、勞苦財物を犠牲とし、一に、御國の花を咲かせんとに餘念なき軍士の、頼もしきことになむ。

嗚呼、この尊き日本魂に、こり固れる武人の矢先、向ふ所敵なきのみか、堅忍不拔の國民が、意到るところ貫かざるなき梓弓の精神、この營養ありて、この花開く、抑、此の花結びて、如何なる果實をかなし出さむ、吾人は、鶴首して、此の大効果を待つと共に、益勉め、益勵みて、この花の要素をば、益、充實して、盡くる事あらしめざるを望みて止まざるなり、起て、軍國の大男兒。奮へ、神州の健男兒。

口熱集

横見 莞爾

○男子、苟も、眞の冷味をなめんとせば、須らく、單身北極に入り、神銷し、軀凍りて、生きながら、石像と化すべし。氷底千載、其骨朽ちることなげん。

○男子、志を得ずんば、よろしく、滿洲馬賊の群に入り、浦港ロシヤ、ガロンホイ號を捕拿し、日本海中の鯨を擒にし、其油をのみ、其肉を食ひ、其盡くるに及び、大陸に涉り、縦に、肥豚と、老鷲とを狩らん。

○素面では恐し、木刀では痛し、面、胴、竹刀は、この必要に喚起されて出づ、最早腹を裂かるゝの氣遣もなく、頭を割らるゝの心配もなく、やるべしと、臆病もの、翻々として、跳り行ふ。行ふものは宥すべし、之れを恐れて行はざるものに至りては、言語に絶ず。櫻花國男子、宜しく、自刎せよ。
○劍術、柔道、其絶する所精神のみ、棒を振り、軀

田舎の青年

三浦 襟 東

巍峩たる南山の巔、雲は、無心にして、岫を出て、鳥は飛ぶに倦んで、歸を忘る。涓々たる清流に、牛を驅りて、吼ゆる聲遅々たり。犬聲和し、鷄聲和し、草刈る村童の、俚歌、高く謠ひ、甲唱え、乙應へ、天樂、耳に滿ち、歡聲洋々たり。乾坤の高潔なる、是れ、田舎の自然に非らずや。青鞋布鞆、寒山、雪を蹴つて、宇宙の大を睥睨し、柴門茅屋、秋夜、爐を圍みて、家庭の樂團を樂しむ。其性は、朴にして僞なく、其心は、眞にして、仁狹なる、南山の高さが如く、清流の潔さが如く、精神の剛雄なると、身軀の健全なると、是れ、實に、田舎の青年に非らずや。

田舎の風物の美なる、絶えて、塵世に汚れざるを見る。春夏の景も、秋冬の枯稿も、季に従ひて、青山、眉を書き、長郊、錦を織る。其自然の美は、見れども、盡さざるなり。樂しめども、飽かざるなり。詩人曰く、「都會は、人の造れる所、田舎は、神造に係

を讎して、觀者の間に、勝敗を争ふ。彼等、輕技的の術、何の功をかなすべき。男子生れながらにして、一口の匕首、能く、無數の輕技師を倒すものあり。俗子の鍛鍊は、九分を過ぐる能はず。他の一分は、英傑のみ達すべき地。

○獅子の一怒、聲、腹底より出づれば、馬、之れを聞きて倒る。彼我、相睨して、起つの瞬間、精神、直に徹入して、死活の機を奪ふ。闘はずして、我、既に勝てり。

○吾人、冷を覺ゆるもの多し。草間、蛇を履むも冷。象中○○生奮勵一番せよの言に至りては、冷汗、背に流れ、冷骨に徹す。

○市井に、俠客なるものなり。俠の爲に、身を、雲の如き敵中に棄て、悔いず。我神州男子、大に、この親方に似たるものあり。軀軀偉大、容貌猛猛の奴、手に精巧銳利の武器を提げて、威嚇し來りしに、之れに、腰をぬかすもの、一人もなし。彼に十倍の兵あり、五倍の軍艦、巨砲あるも、之れに恐るゝもの、神州男子、求めんとするもなし。

るとし宜なる哉。

嗚呼、嫺雅雄渾、明媚なる現象は、自ら、人をして、純潔宏壯の人たらしむ。其自然の美なるが如く、其人も、亦、美なるなり。崇高なる自然界に生育して、之れを師とし、之れを伴侶とす。安んぞ、高潔ならざるを得んや。剛膽ならざるを得んや。由來、天下の大業は、田舎男兒の手裡に落つ。象山、松陰等は實に、此の好模範なり。

粗野なりとて、笑ふ勿れ。朴訥なりとして、之れを鄙くる勿れ。才畧なしと云ふ勿れ。品格なしと云ふなかれ。田舎青年は、都會青年の如く、所謂、優美にあらざるなり。才畧あらざるなり。品格あらざるなり。然れども、優美と云ふは、これ、軟弱ならざるか、品格と云ふは、これ裝飾にあらざるか。才畧と云ふは、これ狡智にあらざるか。

都會青年の風貌は、美ならざるはあらざるも、彼等の心骨は、何の艱難に堪ふるや。彼等は、才士と呼ばれ、若紳士と稱せらる。而かも、果して、爲す所有りや。田舎青年に至りては、其風貌は、固より、粗野なりと雖も、彼の赤手にて、能く、九鼎を扛くる

力あり。彼の心膽には、能く虎を搏し、龍を屠ふる氣慨あり。彼等に、天真の氣品あり。彼等に眞情の流露あり。若し、都會青年を以て、巧言令色鮮仁とせば、田舎青年は、剛毅質朴富仁者なるものか。夫れ、青年は、社會の花にて、又、一代の光明なり。彼等は、進歩の時代を有し、活動の乾坤を占む。抑も、青年は、花となりて、薫る可きか、將た、日となりて、輝く可きか。

今や、天下の青年は、薄志弱行、滔々、相延いて、未だ薫らざるに落ち、未だ輝かざるに曇らんとす。思ふに、田舎青年の翼を揮はんが爲めに、都會の地に在るもの、幾萬なるを知らず。而して、日に月に多からんとす。天下の大業は、もとより、其氣、其軀、軟弱なる都會青年の能くする所にあらず。然れども、一代の風雲見たる田舎青年の墮落するに至りては、豈に、邦家の爲めに、深く憂へざるを得んや。柴門茅屋の裡に、生活し居る田舎の青年よ、此大任は、正に、卿等の頭上にあるべし。

夫れ、都會は、學者淵藪の地にして、田舎青年が、争うて、安心立命の地を求むる、亦怪しむべきにあ

的ありて、公共的なこと、即、舊日本の思想は、一日も、早く放逐すべきなり。誰が、この睡民を警醒して、文明的鼓吹者たる者ぞ。自治の法は布かれたれど、近時、浮薄なる風俗は、田舎を害し、旅妓なるもの、一たび、この樂園に入りては、大に、其民心を濁亂したり。都門淫靡の風は、絶えず、田舎に波及し、今や、良俗を毀損せむとす。正に、熱血あり。眞情あるの田舎青年が、愛國の熱涙を揮つて運動すべき時機なり。

兄等よ、宜しく、勢力を揮つて、元氣を充實し、一郷の志士となり、風俗矯正の任に當り、殖産興業の榮を盡れよ。是、自己の天職を了して、其眞値を表はすものにあらずや。若、兄等地方の鼓吹者となり、更に、進んで、其名利を、天下に振はんと欲せば、往いて、其壯圖を、試みよ。

今や、我國多望の時に際し、今の青年は、此幸福の時に生る。宗谷の北端、南洋の諸島は、邦の要衝にして、青年が、進んで、事に當る所なり。蝦夷の地、臺灣の地は、剛健なる田舎兒の起來を待てるなり。豈、都會青年の軟弱なる徒を入れむや。若し、地方

らず。然れども、彼等が、都會の地に奔走するや、一定の目的なく、本願なくして、東奔西馳し、終に其堅骨をして軟弱ならしめ、紅塵熱沛の地に俗了し終るもの、頗る多し。

男子、生を、此世に享くるや。英名を擧げ、利達を欲するは、何人も、皆望む所なり。誰か、因循として、地方區々の事業に、其身を終はるを欲せむ。されど、地方、豈、事業なしとせんや。名利は、都會にあらざれば求むる能はざるか。抑、名とは何なるか、利とは何なるか。虚名利慾を、一代に恣にするも、朝に紅顔となり、夕に、白骨と化する人生に在りて、幾何の價値がある。蓋、大丈夫、天賦の能あり。固有の天職あり。其賦に従ひ、能を完うせば、名利は、求めずして得らる。故に、名と、利と、豈、都會に限らむや。

見よ、吉田松陰は、松下の田舎兒なり。而かも、徳澤、天下を薫化し、儀範を、後世に垂れしに非ずや。田舎兒よ、兄等には、各自の天職あるなり。余は、絶對的田舎青年の美を誇るに非らず。彼等と雖も、一つの、没體なきにしもあらず。或情の地方

の指導者とならざらんば、一飛冲天、北溟、南海の闊拓經營者たれ。此壯圖、此重事は、是田舎青年が、活歩の好舞臺ならずや。且、それ、東亞の風雲は、干戈相交へ、滿洲の平野、將に、我掌中に落ちなむとす。而して、南門、北關、一日も忽にすべからず。嗚呼、進んで、此壯圖を盡さんか。重事を試みむかな。

夏日雜感

和田 愛 劍

奮起せよ四年生
奮起せよ四年生、諸子は、鐵面皮の分子か、或は、破廉恥漢の集合か、教回の諫告を、水泡に歸せしめ、控所勉強、猶、益々猖獗を極め、運動場裡、また寂漠たり。咄、何たる恨事ぞや。來れ、之を慷慨するの士、共に、劍を磨き、再び、彼等に突貫せん。因循姑息は、策の得たるものに、あらざるなり。

近時の我が校

近來、菽中學の士氣銷沈し、奢侈華美の風、之を襲ひて、當世紳士を氣取り、或は、軟化柔弱に流れ、

色に耽けり、又、往年、素野の風、豪強の意氣、將に消えんとすと、余は、寸時も早く、此の現象、其跡をたしむことを望む。豈、火なきところに、烟の騰る理あらんや。對岸の火災視すべからず、待つこと切なり、改革の大鐵槌。

第一學期試驗

第一學期試驗、將に至らんとす。平素の勉學を試むるは、今ぞや、榮辱之れに依て決せん、平日學ばざるの士は、俄に、顔色青たり、紅たらん。平素學ぶの士は、顔色平然たるべし。嗚呼、優等の席を得る士、夫れ誰なるか。

讀書雜感の一節

夏の一夕、襲ひ來る蚊軍を、團扇にて打ち退け月光に依て、赤穂復讐の傳記を読み、偶、天野屋利兵衛が、節を守り、義を重んじ、種々慘酷なる拷問苛責も、利兵衛が、稜々の氣骨を挫く能はずして、終始、其の志を變ぜざるの段に及び、覺えず、感激の涙我が眼を濕せり。

夫れ、管に、罪は、其の身一人のみならず、妻に及び、子に及び、一家を擧げて、之を犠牲とし、以て

八里、渡船のせまくて、おそくて、動搖の烈しきには、閉口なれど、それとて汽船もなければ、汽車もなし。愚痴をこぼせば歸られず。詮方なくて、やとひいれしは、僅か三問ばかりのものなりき。

銅盤の如き太陽の、海中に没すると共に、滿帆、風を孕みて、船の走ると、射るが如く、心地よかりしが、夜色海面を包むとともに、やがて、船足にふり、愴然たる闇の裡は、物としては、ただ、我が船一つなれば、櫓の音、遠くひびきわたるなど、寂寞いはむかたなし。友も語らず、余も言はず。獨り入つて、甲板に横はれば、船底、聲あり。波浪激して、船を碎かむとするか。

耳もとにあはただしき友の聲、さては、うまいやしけむ。歸りたるかと飛びたてば、さにはあらで、月景、凡ならざるを報ずるにてありき。

舷に臨めば、左手の方、烟の如く、霞の如く、水天の際に、淡く、闇を彩るものあり。やがて、見る見る、淡黄、又淡白、忽にして、海は月を洗ひ出し、一條の金線、闇を破つて海上を射ると等しく、滿眸月光を浴びて、波は金となり、銀と碎け、清景渺渺

平日の恩に答へ、一言の知己に報ず、君子にあらずして、何ぞ。刀槍、前にあり、鼎鑊、後にあり、水火、身に迫り、鞭臺、交々下る、然れども、其志や奪ふべからず、其の節や、折るべからず、義人にあらずして、何ぞや。此鐵腸石心の好丈夫、後世義侠の模範となり、「天河屋利兵衛は男でござんす」の一氣焰、三歳の小兒も、能く、之を知る、豈、何ぞ愉快ならずや。現時の社會は、唯に金力のみ横行す。此の悲憤切齒すべき秋に至り、此の烈丈夫利兵衛の事歴を、腐敗男子に見しむるも、亦快ならずとせんや。

詞藻

歸帆の一節

昨日は、宇津觀音の洞窟に遊び、今日は、吉祥寺の暮鐘に送られて、見島を、後に殘せり。日本海上十

ただ、一點の塵なし。

あな、雄大壯麗の眺めかな。月波、相粘し、天水、相合するの所、月は、海中より浮ぶか。天空より湧くか。波が結んで、月となりしにやあらむ。月が溶けて、波となりしにやあらむ。長へにつきぬ金殿宮裡を迎るが如く、舷をうつ浪の、琴の調べと聞ゆるにも、海の神は、そのあたりに立ちますかとつかし。今しも、月は、水を離れむとして、はなれず。船は、月に至るが如くにして、至らず。いつか、我が心は、この海と拓け、かの月と澄み、悲哀なく、慾望なく、榮華なく、苦痛なく、我が身も、遂に、あるが如く、なきが如し。友も、船も、余も、揖取も、いかにして、かかる所に來りけむ。何ぞその幸福なる。海頭一刻直千金、否、千金の富を以てするも、遂に、よく購ひ得むや。友と、相顧みて、快と叫べば、月影答へて、波間をおどるが如し。ああ、海と月、何ぞ壯麗なる。何ぞ廣大なる。いかで、陸上に於て、よく見ることを得むや。余は、もとより、かかる景色に接したるは、はじめてなり。海といへば、須磨、明石のあたり、月といへば、石

山、姨捨に勝るものなしと思ひゐたりし我が心、やがて、何くにか、うち消されて、茲に、大なる驚きと、無窮の賛辭となきを得ざらしめたり。嗚呼、この美妙壯大、天水涯なきところ、眞に、我が一生を送らむ園か。死して、骨を埋めむ墳墓か。

袂の露

岡藤汀舟

學期試験につかれし腦を洗はじやと、出て立ちし十日ばかりの旅行をおへて、かへりしは、七月の未なりしが、思ひきや、姉上は、病床の客となり給ひしとは、かへりしを告ぐれど、口をひらかる力もなく、たゞ、我が顔を見つめつゝ、打ちうなづかれしそのさま、今も目の前にあり。その時、枕のほとりに、『折にふれて』と題して、

立ちのぼる香のけむりと弱る身の

いづれか先に消えむとすらむ。

と、手もふるひながら、書きすてたる歌あるを見たり。あまりの不吉さに、讀まぬふりして、とりかくしつゝ、これを、未來の占形となりしこそかなし

も、いくたびぞ。

うれひのうちに、八月もすぎぬ、九月も、半になりぬ。もはや、今宵か、明朝かと、醫師にあやぶまるる事も、しばしなりき。何の因果に、彼は、此の世には生れしごと、父上、母上の嘆き給ひて、ひそかに、燈火に、目うちぬぐはせらるるを、四歳なる弟の、お母ちゃん泣いてゐるのと、愛らしき面、さしいだすを、罪なき子どもと、抱き上げたりし夜半は、數へもつくすべからず。

はじめは、新聞とりたる手も、やう／＼に働きを失ひぬ。きのふまで、魚鳥の肉のとほりし喉も、一日と、食慾を失ひぬ。柳に、風のふきたる如く、薄に、雨のかゝるが如く、いつとなく、身つかれ、手足よりはりて、見る／＼、おとろへゆくこそあさましけれ。朝夕に、何ともいはで、瘦せたる顔に、涙を、玉かとはかり、ほろ／＼とこぼし給ふは、いかなる感のうかびしならむ。あはれ、いますこし仲よくせむと思へど、詮なく、今更に、立ちかへりおもひやられて、あはれなり。十九日の夜より、何となく、あしきやうなりしが、

八月にいたりては、ますます、あしく、玉木醫師の診断にては、不治の症と名ざゝる、不幸をさへ見るにいたりぬ。されど、よき時、あしき時、たゞ、一やうにはあらず。ある時は、枕もとに、膝栗毛を讀ませ、共に笑ひ興じたる夕もありき。又は、新聞の來るごとに、相馬事件は、いかになりしと、待ちかまへて、たづぬる朝もありき。もとこれ、腸の病なれば、身のよはると共に、心は、いよ／＼するどくなりて、わが物しらぶるかたはらより、それは、太閤記の何の巻なり。これは、盛衰記の何の冊なりなど、助言することも、しばしなりしは、今も、耳にひびきて、思ひいづる毎に、むかしの心地もせず。庭の池に、金魚あまたぞだてなば、面白からむと、寐ながらも、つぶやき給ひき。されども、その志は遂げずして、やみぬ。死ぬまでには、西海の馬溪に行きて見たしと、すこやかなる時より、常にいはれき。されども、その望は果さずして、やみぬ。我等には、ゆく未知れたる病を、姉上には、今によくならむとのみ慰め告ぐる心のうち、はりさけむとせしこと

夜のあけゆくまゝに、いよ／＼けしきはれり。附添の看護婦は、醫師をよべといふ、使に應じて、醫師は、直に來れり。此の時は、はや、眼くぼみ、腫ひらき、手足、やゝ冷え入りぬ。

されど、醫師に、目禮したるまでは、なほ、人心や失せざりけむ。あつまり居たる人々、涙がちにて、まもりをるに、看護婦は、病人の見ひらきたる目を、左右の手にて、おしふさぎ、唇を、上下二つに、合はさするを見れば、はやことされたるなるべし。脈をにぎれば、氷の如く、呼吸のひゞきは聞くべくもあらず。聲より、言葉より、まづ出づるものは、涙なり。せきあぐる胸を、何にかたとへむ。きえかへる心を、何にかくらべん。

涙さへこぼす力もなきまでに

なりにし母を見るぞかなしき

もはや、あきらむる外なしと、醫師のいへば、

あきらめといはれて涙しきるなり

さても／＼

いとけなき子はあやしげに見つ

まだしらぬあすの心やいかならむ

姉なきやどの秋の夕ぐれ

この時は、物もおぼえず。父君は、いそぎ使を、親類どもにやられつれば、やがて、皆々あつまれり。われは、たゞ、茫然として、その日もくれぬ。亡き人は、紫の紋付に着かへて、北枕しつゝ、ありつるまゝに臥したり。顔をおほへる白布の下には、昨日まで、我を呼び給ひし唇も、横はれりと思へどかひなし。此の紋付は、いにし年、しきりに好ましくて、請ひまひらせ、作りし品と聞くと、涙のたねなりけり。枕もとには、守刀をおきて、香をたき、金紙にて作りし花は、いけられぬ。見るがうちに、かはり行く儀式も、物すごさに、亡き人は、知らず顔にぞ、うち眠る。あまり寐すぎては、あしからずや。薬の時刻よ、牛乳の時刻よと、いはむとしては、心づくこと、たび／＼なり。今宵は、通夜とて、人々入りこみ、亡き骸を取りかこみつゝ、まだ居すれど、又、物語りいでん勇氣もなし。

明日よりは筆記てつどふ人もなし
人まぢがほに筆はこるべり

りのけ、拜せよと、いはるゝもかなし。拜しをはりて、人のうしろにかくれつゝ、泣くもあり。見るにぞたへて、人めもしのばず、聲たつるもあり。顔と、胸とをのこして、亡き人は、茶をもちたる袋の下にかくされぬ。あなあはれ。今、一たびと、いふもかひなし。柩の上には、白綸子をおほひて、注連繩をひき、前には、大榊、生花など、處もせましと、装ひたつれば、いよ／＼、神さびわたりて、柩のあたりは、晝もくらし。入り来る人ごとに、哀をのぶ。述べらるるたびごとに、父上をはじめとし、皆、涙をこぼすことかぎりなし。夜にあれば、通夜とて、人々のつどふこと、昨日のごとし。四つになる弟の、姉なきことをや、あやしむらむ。家のすみ／＼、本箱のうしろなど、母の手をひきては尋ねあるく、之を見て泣く人おほし。二十二日は、葬送の日とて、朝早くより、人々あつまるに、あやにく、雨ふりいでたれば、わびしさ、いはむかたなし。出棺は、午後四時にて、花に、柩に、持ちつゝ、け出て行くを見れば、心は、身にそは

あな、さびしの身とはなりぬ。忘れもせぬ七つの昔、われ、いまだ、小學校に通ふ頃の、とある冬、雪むら／＼と降り積りて、遂に、われは、鼻緒を切り、寒はつよく、手も、足も、殆んど凍えて、泣き初めぬ。姉上は、とある地藏堂につれゆき給ひて、わが足を懐に入れさせ温められしことさへありき、されど、今ははや。ともし火の影また／＼とところ、香の煙の冷やかにのぼるところ、あはれ、亡き魂も出て去りかねてや、音に泣くらむ。罪なき幼弟は、たゞ、あやしげに、枕のほとりを、あちこちと、ながめつゝ行く。二十一日、晝少し前に柩は運ばれて、座敷にいりぬ、その内側には、青き、眞菰を張り、底には、灰を入れ、雨紙を敷きて、蒲團を展べたり。遅かれ早かれ、誰も、之に入るべきものとは知れど、先づ、目の前に、先だつ人を悲しむこそ、人情なるに、ましてや、年月、心へだてぬ姉なるをや。此蓋、ひとたび閉ぢなば、永き世の眠はさめて、泣けどもとゞかず。叫ぶも聞えじ。正午もすぎて、亡き人をこの中に、うつし入れぬ。今ぞ、水と世のなごりとして、白布を取

ず。今ぞ、柩は、玄關を離れ、みる／＼門をも過ぎかりぬ。あとには、泣聲も、ほのかにひびく、先には送りの車、かげ失せたり、立ちても居られず。居ても居られず。雨、ます／＼くらく、涙いよ／＼もろし。柩を墓地の齋場にすゑて、齋主は、のりとを開きつゝ、高らかに『露子の命』と讀む。今までは、わが呼びなれたる名の、神前に呼ばれたるを聞くも、夢のやうなり。一人の弟は、唯、父上のいはるゝやうになりて、目頃のいたづらも忘れたるが如し。いざ土をとへば、手づかち鍬をとりて三たび四たび、柩にかくれば、柩よりも、まづ、打たるゝは、我胸なり。埋みはて、しるしの石を立て、人々より贈りし花を、垣根にゆひめぐらしたり。この土の下に、のこさるゝ今宵の心や、いかならむ。紫のきぬ、白き袂、今は、身を温かにたもたしむる用には立たず。かくてもあらねば、墓地をふりかへり、ふりかへり、歸路をたどりぬ。これよりは、弟は目さめて泣き、われは寢ずして泣く、父なる人の讀みて、靈前に置き給へるを見れ

ば、

年月をあとにかへしてありし世の

わが子のゑまひ見るよしもがな

さもあるべしとて、また、袖をしぼる。

二十七日、何すともなく夜にいりぬ。

ものたらぬ心地のみして今日もまた

暮るればむかふともし火のかけ

今日は、空よく、晴れ渡りたり。庭の山茶花、二三

輪さきそめたれば、茶の花に取りまぜて、瓶にさし

つゝ、神前におく、

もろともに植ゑつる花を君にまづ

手向けむものと思ひかけさや

日かづかさなりて、十月も暮れ、十一月も十日とな

りぬ。四つなる弟を、墓まうてにつれゆけば、もの

いはぬしるしの石を、姉上なりと知りて、頭さぐる

も、あはれふかし。家にかへれば、五寸ばかりの靈

主をさして、少さき姉さんに、おじぎせんなどいふ。

十二日、親族より来りし幼子の寒し寒しとなくを、

省いとほしがりて、炬燵を開くそばより、四歳なる

弟の、「おこたつなかれ」と歌ひつるに、人々腹をか

かへて笑ふ。是は『おこたつなかれ』といふ唱歌を、

おこたつの事と心得うたへるなるべし。亡き人は、か

かることをば、人よりもをかしがりしよと思ふに、

うきこともおかしきことも語るべき

人なき宿に冬は来にけり

十九日、はや別れたる日にもなりぬ。墓を訪へば、

忘れぬ名の文字は、筆ぶとに、しるされて、我を待

ち、よろこぶやうなり。水たむけ、榊の枯葉をとり

などするも、おもはぬことゝて、いとかなし。

二十日、思ひいづること、常よりも多し。夜にいり

てかくはしるしぬ。こを讀まぬ人々、このころの余

が心中、察し給へよかし。

冬がれの木かげの落葉かざぐに

かきあつめつゝ昔をぞ思ふ

清少納言

岡藤汀舟

捲き上げたる御前の小簾には、もろこしの知らぬ山

さへ見る心地やせむ。許さじと云ひし逢坂の關には、

難のそら音や耻かしかりけむ。年頃おもひ立ちてし

なる身軀に宿ると、亦、健康は富なりと、健康こそ

は、人間活動の原動力なれば、身柄御大切こそ專一

なれと、こはこれ、余等如き、遊び好きには、好適

の金言か、實に、座右の銘ともなすべき玉寶なり。

折しもよけれ、日頃、親しく交はりにし一知己の、

余が室の戸を叩き、暫く、英を、海濱に養はんと、

余即ち快諾し、洗ひながしの浴衣ひっかけ、澁團扇

片手に、腰には手巾ヒラツカセ 海風波浪を巻いて、

轟きたる荒磯邊、清麗奇しく、愛すべき、自然の山

水！此所菊が濱の汀に來りぬ。

鶴江さして歸るは、天の釣舟にや、二艘、三艘、四

艘、五艘と、勇ましく、碧瑠璃を破つて、急きつゝ、

あり。

數町も、長く彎曲せる白砂、濱の上には、御城山よ

り永く連る阿武の松島の綠濃かに打ちそろひ、折々、

吹く海風の、間に聞ゆる美妙の音は、天女の、琴を

奏つるか如く、磯打つ浪と。相和して、濱千鳥の三

々五々、岩の上、又、波の上に、面白げに遊ぶ景色

の、げに、得も言はれぬ風趣なり。且は、洗蕩漫波

の眺も、いと、豊なりければ、指月公園と共に、并

初瀬詣、いかに心ゆきけむ。元輔が後と云はれぬ身

ならばと答へまつりし折、いかに面たゞしかりけ

む。時鳥たづぬる路の卯の花垣、いかに面白かりけ

む。花にまがひて散りかふ雪、げに、春來ぬと思ひ

しならむ。さるは、また、花や、蝶やと、急ぐ日も

と頼ませ給ひ、入相の鐘の聲ごとにと慕はせ給ひし

折、いかにかたじけなかりけむ。實にこの皇后の御

爲には、火にも水にもと思ひかしづきしならむ。さ

てこそ、皇后の宮の御覺もめでたかりしならめ、さ

るを、中關白殿失せたまひ、皇后かくれさせ給ふな

ど。世の中あらぬさまにのみなりゆけど、他し君に

も仕へずて、終始、その操を正しくせし人を誰とか

する。

これは、これ、一條天皇の御代、定子皇后に仕へ奉

りし女官に、清少納言といふがそれなりけり。

菊が濱の一夕

田原琴崖

今はや、入浴も了へぬ。夕食も済みぬ。此の時の勉

強は、健康に大害、諺にも、健全なる精神は、健全

びて、萩町人士の遊歩場となりぬるに、今日、一人も見えざるは、天候の爲なるか、果、如何。昨夜より、降りつ、止みぬる梅雨の、漸く、今日正午過にふりやみて、名残の薄霧は、笠山よりかけて此方への、屏風の如き山嶺さ、又、越ヶ濱、鶴江、濱峯よりして、足下の白砂、右手の御城山迄も、目の及ぶ限り、みなおしなべて、ツイ後方なる松原の緑さへも、薄ぼんやりとなりぬ。又、向うの縹渺、日本海に通ずる水平線上は、一際鼠色に、薄紫を加味したる様な色の、コッテリとした霧の上の方へ、次第に、淡く隈でられ居ぬ。尾島の陰より出て来るは、白帆か、それとも、白鷗か二つ三つ。真向の方を眺むれば、今はや橙の梢に沈まんとして、空中に漂ふ一輪の光牒、まさか、月には非るべく、日なるべきも、周囲の眩き光線は、既に、全く削り去りて、薄橙色の、真ん圓ななど、ぼんやりとせし工合は、さながら、照りもせず、曇りもあえぬ朧夜の、婆然として居て、えつも含窓に倚つて見る如き、眩さばかりの黄金色が、金糸銀糸を放射して、やがては、橙色と變じ、漸次に、淡紅色紅、遂に真珠の

如き真紅と變じ、波間にひたす夕榮の雲、黄金の柱など云ふ、華麗な景色はなけれども、その静肅な、ぼんやりとせし光景こそは、亦これ、幾多の神秘を有するかの如くにて、捨て過ぎ難き事ともなり。時しも、漁夫等の、網引の聲は、いと節面白く、「ビシヨッシー」と聞えぬれば、いつしか、足も浮かれだし、早々、友とかい連ねて、西の方さして、歩を運ぶ程に、こんもりと茂り、巍然と聳ゆる支都岐山！嗚呼、余は、その森羅萬象に對すれば……、嗚呼、余は、その寂莫たる光景に對すれば……、實に、得も云はれぬ崇高の氣に打たれ、恰も、それ、ナイル河畔に徘徊する愁の子が、一天紅なる中、突兀として、夕ぐれの大氣を衝く、ピラミットを見たらん時にも似たらずや。懐古すれば、三歳の昔、余が、此の校の考試を受けん爲、來りて、兄君に連れられ、此所、此の菊ヶ濱を逍遙するの時、兄君は、懇々と、入學後を説諭され、余は、熱心の意とめて「男兒立志出鄉關。學若不成死不還」を答へぬ。且つ、思へらく、今後、いかにして、運命の寵兒となり、理想の驕兒に打ち果

り、希望の殿堂に飛翔せんとの學びの窓の奥庭に、柱の梢手折らばやと……嗟、この大々の抱負を以て、行手に突進せんとせし余が心よ、三年の星霜を重ねし後の今に至るも、その思ふ事の、萬分の一もならず、遙か、沖つ彼方に輝く希望の光の影を我追うて走りしも、そは、追ふに従うて逃れ、近づけば逸し、遂に捉ふべからぬ飄搖の影を追ひ行くに似て、いつ、そが暖き腕にすがり得へんや。我から、果敢なきを啣つのみ。かく思ひ來れば、萬感、交々、胸裡に迫り、恍として、幽冥の境を彷徨ふが如く、真に、斷腸の思ひにて、寧ろ、あゝ寧ろ、今西に沈まんとする日と共に、千尋の海の底、龍宮のほとり迄もと、胸中、苦悶に苦悶を重ねつゝ、歩を移す程に、いつしか、漁夫の傍に來りぬ。それ何ぞ、かれ等、漁夫の心の安々しさよ。老若男女を問はず、或は向う鉢巻、頬かむりなど、種々の風躰にて、手ん手に、網の綱に手をかけ、男の太い聲と、女の細くやさしく、しかも能く透る聲と、調子を合せて、打ち寄する浪の音、果は松か調ぶる琴の音にも和して、「ビシヨッシー」と引く様子の、せかず、あ

はてず、いともの、おちつたすましたる有様よ。浪風も、いと、荒ぶるなん、磯邊に於て、却て、浮世の荒浪、暴風は素らぬ顔、此の趣ある畫の如き別天地に、親子、兄弟、朋友、打ち連れて、面白る樂しく、世を送るとの羨ましさよ。彼れ漁夫等は、徒に、世の富貴を望むとなく、妄に、功名を貪るとなく、かの所謂、毀譽褒貶等、彼等に於て何かあらん。花咲き霞匂ふ晨、紅葉滿山、江面に、影を寫す夕、一舟に棹して、而も、清淨幽邃の妙境に、天職を勵むるとの、如何に、平和に、いかに、樂しかるべき。此の様を見て、此のはかなき、我が身の上に比ぶれば、その不憫の事よ。つれなき事よな。嗟、誤まれり。余が過去、三年間の行爲よ。徒に、名譽の奴隸となり、名を竹島に垂れんと希望し、塵の世の風波と戦ひし、馬鹿々々しさよ。思へば思へば、人の此の世に於ける、今し方、沈み果にし、夕陽のそれに、さも似て、温として、夕ぐれの西の空に立ち迷へる間の嚴かさよ、消えては、暗澹たる、夜の帷幕にかくれたるに非ずや。げに、人間界も、そが如く、かれ墳墓、いかに富貴功名を得ても、早晚、

茶毘一片と化し去り、草莽茫茫として、苦あつき卒塔婆の主となり終るに非ずや。人間、果敢なし。嗟、それ、余を以て、如何にかする。

かくも、悲の悲、愁の愁たる淵に沈み、あらぬ妄想に耽り居し頃、先刻より、頻に、歌、詩吟に快を鳴らしし友に、活一本喰はされぬ。彼れ、元來、快觀派の男なれば、遂に、余をして、容易に、此の悲愁の淵より救ひ上げ、漸くのことにて、此のうつともなき、幻ともなきより、生を得て、漸く、我と我が身に蘇生り。憂愁を忘れ、煩悶を忘れ、胸襟豁如として、純潔水の如きを覺えぬ。

折柄、綱引は、早や、岸に近きしと見え、「エンヤ〜」の聲急かしく、罫尋ぬる晚鴉の聲の、いと騒しうに、御城の山の黒き、そが中に入りぬ。沖つ方、尾島の島根に、夜の色、迷ふが如く見えしが、やがて、海や、磯や、森や、山や、巖や、松や、人家や、漁夫やみな、そが安慰の色に包まれたんぬ、眞の臘月とそは、東吐月峰より、二間程離れ、松の梢にかかり居て、いと、物凄く、道草に沿へる、銀珠のいと、麗しく、すだける蟲の音の淋しさよ。血に

鳴く、杜鵑の一聲は、山より、山に響き渡りて、かすめる月も冴えたる心地ぞせし。此の時も。漁夫は、なりはひの未だ終らざるにや、おぼろ黒き、そが中に、黒き、黒き、眞黒なる影が、五つ、六つ、乃至十、二十。尙も、面白ろ可笑しく、語りつ、笑ひつ。何ぞ、彼等の心の平和に、安けしさよ。水平線上に、チラ〜閃めくは、漁火か、鬼火か、はた亦、余をして、將來希望の海に導くべき北斗星なるか。嗚呼、それ、一夕の思をほしひまゝにせし菊ヶ濱よ。

別れ

松野貞漁

あゝ、そも、今日は如何なる日ぞや。恐らくは、余が一生中、心底に印して、忘れんと欲して得べからざる日ならむ。余が最愛にして、水魚も只ならぬ深交の君が遊學の爲め、此の鄙を、遠く天さかる都の空に出てまさんとする日なりかし。朝な夕なにうちつれて、共に通ひし君と我。螢も雪も諸共に、あつめ學びし竹馬の友人、あゝ君よ。もとより君が上京には、我が、この三陽村も、君が親しき父母も、我

も、人も、皆囑望する所なるぞかし。さは云へ、過去八星霜間の、君と余が、親交の様を顧れば、轉た、無限の温情にひかされ、その親しかりし、その末頼しく思ひし君と、今、此所にて、袂を別つとの、如何に悲しくつらきことよな。今よりは、如何にして、我獨り、山里に居残りて、幾春秋の花月を過ごさん哉と、盡させぬ名残にイみて、心のそこはかたれども、わが涙をば忍ぶることも得せて、亂れたる心に打ち見れば、月の光も、星影も、闇夜の如くに影くらく、すみわたりたる大空も、霞みがかりたる心地して、音するものはかすかに東天紅を報ずる鷄鳴のみ。げにや、月に雲、花に嵐は世の習ひ。さは云へ、月は曇れど、又晴れ、花は散れども、亦咲くよ。君と、今日の袂別は、未幾春秋を重ねてや、又遇ふとのなし得べき、離合集散は、浮世の常とは云へ、かくも、深き交りの君と、我か間を、天、許すに恵みを以てせず。水面に浮ぶうたかたの、且消え且生ずるが様なるは、あまりと云へば、無情ぞかし。一年半が間、こゝに教鞭をとりて、専心身を教育に委ね、學に慕はれ、徳になつかれし友は、まだうら

若き二十前、ゆく先、社會に出て、苦戦せざれば、人生の義務を果さぬと、悟りし時此の儘、この地に、骨を埋めたりとて、榮譽ある教育の職務に、終るなれば、名もなき埋れ木と自ら悔いもせぬが、心の底に潜む一流れの熱い汐のやり場なく、之をしも活氣とや云はむ。長上なり、友なりの諫めも、程よく辭していざらばと、別を告ぐる眞志の我には、よくも解し得たれば、岩をも透す桑の弓、ひきて歸らぬ。決心を、止むるも甲斐あらざれば、我は止めまじ、支へまじ。かどでの時も、來つる程に、君が慈父母を始め、隣人、朋友、親族や、君が平素薰陶せし數多の生徒等も、はなむけせんとて、つどひよりぬ。生徒等の、かなしき調べの歌に送られつゝも、いつかは澤江の里に來りぬ。濱の松の茂き所、惜しむ名残の盡きざればとて、漸く辭して、父母、兄弟、朋友、隣人等と、別れを告げぬ。殊更に、父母、兄弟達は、別れを惜まれ、互の目より落下する紅涙數條。……巖かむ浪の音も、琴奏つる松か風の聲も、共に、憐を催してか、互にふりかへる眞珠の眼には、あはれ、

深き愛情をや宿らせたり。殊に君が妹なる、秀子嬢が、子等の背より、楓の如き手を出して、「喃、兄さんよ、立派な簪と、手毬とをな、早く送つて下さいよ」と、云へば、諸人の悲みも、一層増すが如き心地とする。後は、我等二人のみにて、數町進みし程に、彼、雄々しくも、「君、モト澤山だ、歸つて呉れ給へ、ドレセ盡さない名残だもの、此の邊で別れるとしよう」と、彼とても、名残を惜まぬには非れども、これ、遠慮しての言の葉か。せめては波止場までと、共に行きつゝ過去、現在、未來の事ども、面白る樂しく、話し合ひつる程に、いつしか、仙崎の町はづれにかゝりぬ。汽船問屋を尋ねしに、今十分の間に、船來ちんと、余は、暫くの間なりとも、共に巖に腰打ち下し、咽びつゝ、話しつせし程に、はあ、船も入りければ、いつまでも、かくしてやあるべき、余は、涙の中より、漸く聲をしぼり上げ、行けよ君。雄々しく出て立て、如何に今日の別れはつらくとも、亦の逢瀬もあるものを、學びの窓にいそしめて、その奥庭の桂の小枝、手折りとり、葉なし遂げて、錦きて光りばある身と成りて、君に囑望せ

し村の爲に、親の爲に、はた、亦、余の爲に、天晴れ其の名を輝せよかしと、惜別の思ひはつぎとされど、乗船の時間も迫りぬれば、今は、はや、是迄なり、歳月重ぬる春秋に、互に雁を託することを怠るまじと約して、遂に袂を別ち去りぬ。汽船に移りても、尙名残の盡さざるにや、手巾、帽子を打ちふりつゝ、やがて、一聲の汽笛と共に、黒々としたる一條の煤烟を残して、西方さして消えさりぬ。浪間に見ゆる白き影は、白帆が、白鷗か、はた、又、友の打ち振る手巾か。折しも降り來る五月雨は、空に聞ゆる吐鵲の聲と共に、一しほの憐を増したり。濱邊に残りし我は、只一人、彼が残せし寫眞を眺め、友の身の上案じ煩ひつゝ、悄然たるとき、晚鴉の啼尋る聲に驚かされて、此の名残惜しき所を立ち去りぬ。さらば船よ、友よ、濱邊よ、海よさらば。

夏の夜

さすがに長き夏の日も、最早夕方となり、鳥は、ねぐらに歸へり行き、こがねの雲の夕映も、いつしか、

天の一方に消え去りて、小垣のあたりに咲き亂れし花に、夕の色は、せまり來て、早や、蚊遣火の烟に暮れ初めて、安息に勇む牛の聲、聞くも、いと淋し。空には、清き星影、四ツ五ツ、門田には、蛙、自然の音楽を奏す。我家を出て、河邊に散歩せば、さながら、ゑがけるが如く、淡く、葉櫻の梢にかゝりし月影は、いよいよ、涼しげに冴え渡り、あちこちとさまよふ螢火は、水面に映して、さながら、明星のあるが如し。又、子女の笹もて、「螢來ひ、玉虫來よ」と、呼び叫ぶ聲、面白く。おりしも、吹き來る風は、涼しげに、今は、日中の暑さも、忘れて、心は、此夜景の美麗なるにまどひ、もはや、家に歸へらんともせず。

初夏の一夜

折しも、時は、六月十日の事であつた。此日は、余程、熱かつたから、歸舎後は、全身疲勞を覺えて、讀書する勇氣も出なかつた。丁度、其の夜半のこと

た。いつもの、寝勝ちな吾輩も、さすが病には閉口して、思ふがまゝにも眠る事が出来なかつたから、起き出でて、窓打ち開き、四方の景色を眺れば、四隣、既に、物音なく、朧月は早や、中空に懸り、折節鳴く時鳥一聲は、さも聞く人なきかとかなしむが如き様で、時しも聞ゆる細長き鐘の音は、又、一層のあはれを添へた。向うの山に微に見ゆるは、確、南妙寺の佛に備へし燈火にやあらん。遠近の村里に、犬の吠聲するは、何を悲んで、叫ぶものか、或は、そが主に、急を報ぜんが爲か或は、朦朧たる月に訴へんが爲め。彼方の山の隅より、恰、墨を流した如き雲の出でたは、定めし我故郷の上にあらん。思ひ廻せば、そが下に住む、わが父母は、如何に、此の夜を過し給ふにや或は我と、等しく、病の爲に、床に臥しては居給はざるか。あ、此の如き寂寞たる夜の景色に對して、余は、種々なる感が、次第々々に、胸に浮び出て來て、過去を思ひ、未來を考へて、宛、夢路を辿る心地がした。

折しも、ふと、我耳を破つたは、何處の船かは知らねども、確に瀛笛であつたから、直に眼を廻せば、元より、朧月夜のことだから、船躰は、しかと分からざれ共、菊ヶ濱の松の間より、恰、漁火の浪間に漂ふが如くあつて、青赤の船燈見えて、神氣も俄に勇み立ち、我意はなほ歐米各國を漫遊するが如く、秣山蓋世の勇氣が起り来て、己が病の程も忘れて居たが、暫くして、寒さ、身にしみ渡りしに驚き、窓打ち閉ぢて、又もや、床の中にはいつた。

鬼 語

頓野指月

山骨瘦せて草凄々
たけ三尺の小松原
落葉のまざれ日は没りぬ

古渡水は落つ蘆葦の邊
二聲三聲こだまして
長く尾を曳き狐行く

道徳文章腐頭巾氣
玉しく門に履充ちて
利慾の前に仁義なし

羶血しためる瑠璃の盃
人を膏の蘭燈に
絃歌亂舞の夜は更けて

無明の酒の多ひごゝち
槌で庭掃く追従の
あちらを向いて舌を吐く

睹る目に迷ふ人ごゝろ
溪間におつる月影に
叫ぶ猿の狂ふまに

惡魔の胸に燃ゆる火を
戀とたのみて心から
灯に寄る蟲のあはれさよ

霜に聲あり笹の上
鮮血ぼた／＼鼻の
月を睥んで聲白し

誰が魄招く枯尾花
獨體一葢兀然と
吹くや本枯からりから

うつろの眼窩空を睨め
鑿齒憂々相觸れて
人もあら野に鬼語をなす

「靈光とゞかぬわたの底
眼なしの魚のすみかにて
理知のめしひの闇の世や

驚馬もよそへば騏驎にて
人を餌食の狼も
法衣かづけば佛なり

星をまつりの笹の葉に
ねがひの糸のくるしきは
たのみがたなの浮世なり

見よや世を蓋ふ英雄も
時に粟津のあら小田に
むかし語の蛙鳴く

花を欺く紅顔も
露に色をふ牽牛花の
日影まつ間をさかりにて

王侯の富、朱門の貴
珠といつはる露の身の
つひの行衛は苔の下

知覺の外の白骨に
かくる望もなきからに
とげぬ願もあらぬなり

苦おくつきの地の下
うつゝの夢もかよはねば
曉知らぬうま睡かな

あやしき聲はこゝに絶え
天を仰て長く嘯く
白氣濛々空を蔽ふ

黒闇々裡とことなく
をとこ女を打ちませて
老ぼれし聲わかき聲

『五濁悪世』『涙の世』
『泡沫夢幻』『まゝならぬ』
『浮世』『魔所』『あぢきなし』

疎鐘數杵霜にさえ
ありつる聲はとだえして
風は急なり雲走る

おしげにも吹く野邊のあき風
眼前口頭

馬もあり茨の花垣かぶき門
橘やさみだれ頃を人の死ぬ
芦の中捨て舟あり行々子
杜宇二の聲に月かたぶきぬ
蝙蝠や三日月かゝる湯殿先
によつさりと帆柱高し三日の月
かんと鳥鳴くや竹籬雜木原
雨止まず蟹泡を吹て暮にけり
舟あぶる烟に月の瘦せてけり
壁土のほろりと落ちてかたつむり

梅雨の窓

増野鴻村

やなぎさへさる氣になるや梅雨の窓
梅雨ばれや須磨の鐘きく舟の中
言の葉に花さく奥の田植かな

呵々大笑の聲ともに
鬼火一團ゆらゆらと
滅えて行きけり薄蔭

虫聲滿野夜は闌けぬ
横たてる山に残る月
影はちり／＼飛ばんとす

秋 宵

詩人ぎんぜよあきの宵
明星ひとつうかひ出て
歌人うたへよあきの宵
野寺の鐘もおぼろにて

鷺

あらし吹くツラルの山の岩かどに
少女子が折りてもちゆく萩の花を

國 弘 壽

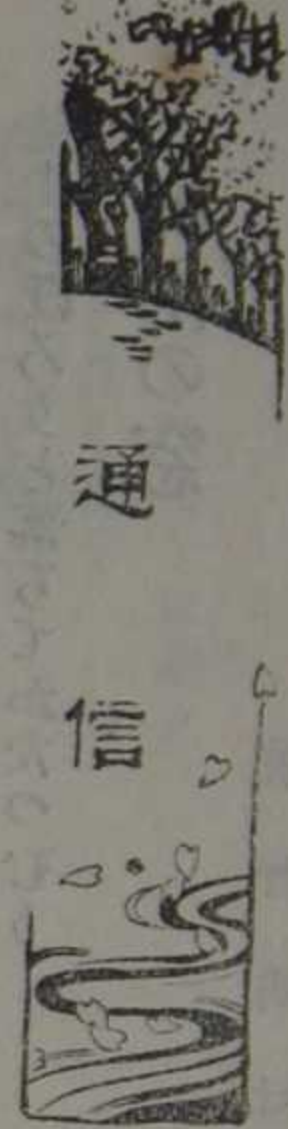
行く路

すげかさの下から妙に田植うた
目にすゞし耳にも涼し蓮の雨
水をうつ下知を椽から濺團扇
二階から舟よぶこえや夏の月
洗髪の欄干にすゞし夏の月
うち明けて涼し互の胸とむね
血をわけたものと思はず蚊のにくさ
押へたる蚤迹がしけり時鳥
廣瀬中佐
闇に啼く旅順の空やほととぎす
浦鹽艦隊

岡村峯太郎

行くみち螢の知らず闇夜かな
池の邊のやなぎにあそぶ蛙かな
初春や梅は咲きそむぬしいづこ
夕すゞみ橋のうへにて腕くらべ

見えそめぬ霞のまよりはな一つ
あさぼらけ静けさ空に雲雀鳴く
よく張りの鶯に打勝つ金鵒かな



『卒業後の小生は』

廣島 河野 厚造

頬鬚の荒くれ男が、長持ほどの辨當さげて、小畑から通ひ居りしは小生に候。器械體操に、靴を入れ、演説會には、あたまになりし變人は、小生に候、かく申せば、御忘れの方は、ハ、アあれかと思ひ起され、お目にかゝらぬ方も、御想像の事と存候。さて、小生儀、卒業後、徳佐が峰の山嵐寒き處に、金切聲を絞りて、人の子を教育致し居り、大分先生化致候折柄、ふと思ひ立ちて、東都に迷ひ込み候。その頃、岩田先生御在京中にて、色々御厄介に相なり、毎度御伺致し候處、いつも、杉山先生と参り合せ、時

の横田直藏君も同宿にて、快男子の集合に、流石、陰氣な小生も、大陽氣なお正月を致し申候。三君、今や、いつくにかある。征露の師、起りてより、三君の天下と相なり、得意の程、思ひやられ候。異域の月を浴び給ふ折節は、定めし、故國の校友を偲ばるゝ事と遙察致候。

右、在京中、校友に關する一二の状況を申上候處、幸、此度の校友會雜誌には、通信欄を御設の由に候へば、なつかしく、ゆかしき友垣の消息も、詳しく相分ること、嬉しく存居候。

さて、小生の東都生活は、卅五年四月より、本年三月まで、二ヶ年にて段落に相なり、去る四月の初より、廣島の私立明道中學に奉職致居候。愈、舞臺面の仕事にとりかかり候へども、役者は、例の變物にて、とかく、滑稽のみ演じ居申候。補習科より一年まで通じて、廿一時間の擔當、文學史、文法、一年の漢文等、何れ劣らぬ、難物、一目おき候。役目は、四年級第一班の級長にて、統御は、中々、骨の折れるものに御座候。併し、重大の責任は自覺致し、正直に黽勉罷りあり候間、其邊は御安心下され度候。

には六疊の間を笑ひ崩すことも、これあり候ひしが、何もかも、一場の夢と過ぎ去り申候。

校友とは、在校中のみの友にはこれなき様存候へども、卒業後は、互に、疎遠に相なるは、遺憾千萬に御座候。現に、在京の校友は、澤山と聞き及び候に、多くは、何の消息も相分り申さず、一度、梨羽次郎熊君と、校友の會合を企て、お流れに終りしこともこれあり、又一昨年十月頃のことかと覺え候、中學會とか申して、吳竹の四谷の里に催され候間、もしやと思ひ、馳せ参じ候處、一面識もなき方ばかりにて、馬鹿らしく感ぜし事もこれあり候。なまけなき次第には御座なく候や。

一昨年の冬休暇横須賀に参り候節、機關學校に、三浦徳一君を訪ひ、成績順の整列にて、後列の一番に居られ候を見て、何となく悦しき心地致し、事、これあり候。然るに、いたまじや、この時、十分間の面會は、即ち、幽明の追分にて、今春、歸郷の節、突然、君の計を聞き申候、痛恨極りなく候。噫。昨年の正月は、至極愉快に候ひき。士官學校の高橋由之、光藤健介の兩君、度々御出になり、商船學校

愈、書生氣、居候氣を、はなれて、一生の仕事にかかると思へば、何となく、おち氣つき候へども、案外、また、頼もしき勇氣も發作致す様に覺え、面白く存候。これは經驗なき方への申分に御座候。諸君、このニュー、チャーチャの態度は、如何様に、御想像なされ候や、序に伺置き候。尙、餘事ながら、小生が、教場にて、一番癪にさはるものを申せば、無遠慮なあくびと、國語の時間に幾何をやるものにて、その度毎に、學生時代を思ひ出して、穴にても入りたき心地致候。當地にては、未、日も淺く別に申上ぐる程の材料もこれなく遺憾に候。

人生、往事を回想する程、詩的のものは、これなき由、げにもと存候。今や、四年の昔を思ひ候ては、懐舊の情にたへず、所謂詩的の名文なくんばあらずと存候へども、オイソラと書ける、たちにもこれなく、且は、寸暇も得がたくて、小供も作る書牘文にて、卒業後の略筋御報知旁下らぬたは言、手引の糸の亂れ亂れに、書きつけ申候。なほ、筆末ながら、校友諸君の御健康を祝ひ上候。草々頓首。

長崎醫學專門學校 野村正一

前略、當校は、御承知の通り、専門の醫學校に候て、先づ、地方開業醫か、公立病院の醫員となるのが關の山に候間、多數の諸君には、狀況の報知も、不必要と存じ候へ共醫學の御志望有之候て、而も、家事の都合等にて、大學にも進まれず、専門學校に留めんとの諸君も有之べければ、茲に、大跡御報知申すこと、致候。

當校は、初め、第五高等學校の醫學部と稱せられたるものにて、先般、専門學校の名稱の下に、獨立致候。尤、全國中、千葉、仙臺、金澤、岡山に有之ものと、同資格に候て、文部省直轄の學校に有之候。先づ、學校の組織には、醫學部と、藥學部とに別たれ、修業年限は、醫科四ヶ年、藥科三ヶ年に有之候。醫科の卒業生が、所謂、醫學得業士にて、藥科の卒業が、藥學得業士に御座候。

學課は、醫科にては、醫學全科と、獨逸語に候て、一年二年は、先づ、醫學の基礎を樹つるため、理論の研究に有之、然れども、基礎に、必要なる實習は有之候、三年四年は、醫學各科の理論、並に、臨床

實習を、毎日半分半分位に課せられ候。尤、三年の實習は、校内學用病院にて有之、四年の實習は、長崎縣立病院にて有之候。藥科の方は、一二年が理論、三年が理論と、實習とに有之由に候。小生は、藥科には、相通じ不申候。

斯くして、醫科は四ヶ年、藥科は三ヶ年の修業年限を終りて、其後に卒業試問が高有之始めて、卒業する次第に御座候。卒業試問は、修業全年限間の課業に亘り、丁度、文部省の開業試験に當る所に御座候。學年は、九月十日に始まりて、翌年七月十日に終り候。入學者の資格は、中學校卒業生にて、大抵、募集人員の二倍位、志願者が有之候間、其中より撰抜する事と相成り候。入學試験の外國語は、英語と、獨逸語と、各自の好みにて受けられ候。

學校に入學すれば、一年級は、必ず、寄宿舎に入る規則に有之、二年生以上は、大抵、下宿の都合に候。乍然、當校二年級以上、各級共、四五名の陸軍々醫委託生が置かれ、其人々が三年まで寄宿舎に在る規則に候。

陸軍軍醫委託生と云ふのは、卒業後、二等軍醫に採用

らるべき人物にて、二年級以上は、學年の初めに、何人も志願する事を得、其中より撰抜して命せらる

、次第に御座候。尤、委託生は、毎年、相當の學資金を、陸軍省より供給せられ候間、軍醫を志望して、學資欠乏の生徒には、甚好都合に有之候。

學校の規則は、甚寛大に候て、大方、法律の範圍位に有之、生徒の處行に關しては、大抵、學校は關係致さず候。

從て、生徒の風儀も、幾分か亂る、傾がなきにも無之候へ共、世人が醫學生を評する程には無之、只、他の高等學校等に比較すれば、幾分か、社會的に御座候。生徒の運動に熱心なる事は、陸上海上言語に絶え候。

次に、大學と、當校との比較を申せば、大學に入るには、高等學校の三年が有之、大學入學前に獨逸語の實力は、原書を讀むに差支無之、從て、大學にては泰西の良書も座右に備へらるべく、洋人の講義等も聽かれ候、然るに、専門學校にては、獨逸語も、入學後、暫く研究を始むる次第にて、憐むべき次第に御座候。此點が最異なる點に有之候て、當校一年級に

て修むる解剖や、組織は、大學にても、尙、一年級にて修むる都合に候。

序に、山口縣出身者二十名有之、毎年人員の増すが如くに御座候。

先は、右、御参考の爲め、必要なる點だけ、相認め候。頓首。

東京商船學校 和田準介

(前略)私は、一昨年の四月、當商船學校に入りました。爾來、留る事二ヶ年、其の間には、種々のインプレッションにも接しましたが、これは、後報に譲りまして、此度は、只、當校の狀況を、ざつと御通知申上げますから、何かの御参考ともなりますれば、此上もなき光榮とする所でありませぬ。

當校は、隅田川口の越中島と稱する、實に、景色のよい海岸にありまして、固より、輪喚の美は盡してゐませんけれども、亦、好個の一校舎でございます。遙に、市街の雑踏を避けまして、朝夕、目にし耳にするものは、勇しき眞黒の漁夫が、舟帆を操つて、川口を出入するのと、遙に石川島の造船所や、房州通

ひの小蒸氣の吹く汽笛とばかりで、四面、皆、我等に、海事の思想を與ふるもののみで、知らず知らず、自己の頭腦は、海に同化する様に考へます。

科は、航海、機關の二科に分れ、航海科は、二ヶ年半、學校にあつて、席上學科を終め、實習生として、一ヶ年、學校練習船大成丸に乗組み、一ヶ年半、會社所屬のスチーマーに、アツブレレンチスとして、乗り組み、海上の勤務を終つて、横須賀海軍砲術練習所に入りて、砲術を學ぶ事、半ヶ年で歸校、卒業試験を了へて、始めて、卒業となるので、機關科は、席上學科二ヶ年、工場實習二ヶ年、汽船乗組一ヶ年で、卒業するので、共に、遞信省で、牀格の檢査を受けて、之に合格して、始めて、商船に、士官として、乗組むのです。

練習船大成丸に就て、少し申します。全船は、先年、神戸、川崎造船所に注文されて、昨年十月、進水しましたので、長さ二百七十呎、幅四十四呎、深さ二十六呎九吋、排水量四千三百噸、總噸數二千噸で、四櫓バーク形の太帆船でありまして、白帆堂々、天を衝くの觀は、實に、壯大であります。今や、海軍省御

ますから、なんでもない考へてやるのです。七時、朝食で、それから、喫煙所なり、雜誌室なりに入つて、學友と、楽しく、談笑するが常です。

七時四十五分整列、服裝點檢、八時十五分から、授業が始り、十二時に終るのです。晝食後、一時間休憩、一時の號鐘で、明治丸へ、實業練習に行くのです。機關科學生は、工場へ行きます。

私は、航海科ですから、自分の方丈けを御紹介致しました。實業といふのは、我等が、練習船に乗り込んで、海員必須のシニア・ハンドを養成する下稽古で、帆前操練として、帆の扱ひ方、圓材の扱ひ方等、上級學生の號令の下に、航海科全員、甲板上に、技術を練るのです。總員、熱心に、嚴正にやるので、實に、面白く、愉快でたまらん様なことがあります。其の代り、牀驅の運動は、ずいぶんひどいので、入學當初は、つらかつた様に考へますが、慣れて來れば、何でもありません。其他端艇練習、帆走練習、和船練習信號練習、又、雜業と稱へて、索の結び方帆の縫ひ方、ペンキの塗り方、諸具の修繕及び、金具の磨き方等、随分下等の仕事を課せられますが、

用船となつて學生、之に乗組み、或る任務の下に、初航海の途に上りました。何れ、戦争、其の局を結び、帝國の國威、海外に隆々たる時に於ては、歐米濠亞の諸港に、日章旗と、共に我が校旗を翻す時があるのでしょうか。

借、本校に入學しますと、同時に、海軍豫備員に編入せられ、嚴正なる規則の下に、生活するのです。此節では、起床五時半ですぐ、各室の掃除をなし、學生監督の點檢が、必ずあるのです。又毎水曜、土曜の二日は、大掃除をやるのです。それから、校内ドックに繋留してある練習船明治丸（シップ形帆船にして一千三十七噸二〇を有す）へ、當番分隊が毎朝、ウツシデッキに行くのです。甲板には、ハンドポンプが備へてあつて、生水を、これから運んで、上下甲板を、一面に洗滌するので、夏季は、氣持がよいのですが、嚴寒、氷を結ぶ季節となつて、暖かき寢臺を飛び下りて、すぐ、生水で、手足をやらるゝのは随分ひどいのです、然し、どんな時と雖も、決して、之を廢することはありません。我等も、亦、他日、北氷の怒濤を衝破らざるべからざる海員のことであり

これが、又、海員として、必須、欠ぐべからざるものであるのです。かくして、四時になると、實業が終り、六時半、入浴七時半まで、休憩で、此の間には、フットボール、テニス、擊劍等、勝手次第で此の三時間が、一日中で、最も愉快な時です。午後五時が夕食で、一日の活動は、我等をして、山海の珍味にも勝る感あらしむるのです。

六時半、又は、七時半より、自修開始、九時四十五分終りて、整列點檢後、寢室に退き、ボンクの上に、からだを投ずると、早や、監督の寢室體檢は、更に、覺えないと云ふ風です。かくして、一日の課業を終り、快く眠りに就くのです。

固より、我等は、日曜の外は、決して外出を許されないので、又、ひとしほ、日曜は、楽しく送るので、す。げに、人と異て窮屈であると、又之を償ふ愉快を得る事が出来るのです。

校内に、氣象觀測臺、天文臺等の設けがあつて、天文臺の方は教官の試験中でありまして、氣象機械は、斬新なるものを、多く集めてありまして、中央氣象臺と雖も及ばざるものを備へてあります。二級學生

が當番で、氣象の觀測をやり、レコードに記入して、一週の終りに、受持教官に差出すです。

以上が概況でありまして、取急いで、認めまして、何もかも、前後して、實にすみません。此段謝して置きます。

終りに、一寸、一口申上ます。本校では、銳意、擴張を計りて居りますから、これからの志願者は幸福で、將來、立派な海員が、澤山出るでありますようが、兎に角、本校に志願せらるゝ方は、何卒、他の學校とは、少し趣きが變つてゐまして、將來、海上に、一生を送る人物となるところですから、其學ぶところ、其行ふところ、大に、陸上の人々と異なる點多く、忍耐力を要すること、更に多大にして、身、自ら、一水夫にして、如何なる賤業、如何なる雜業と雖も、之を實行するに躊躇せざる決心を、豫め堅めて、始めて、其志を定められん事、希望に堪へざるところで、決して、ポツチャン的の學校ではありませぬから、御注意まで申添へて置きます。當校入學志願の方で、様子不明瞭等のことがありますれば、如何なる事でも、喜んで、勞をとりますから、

修業年限三ヶ年、各科共、毎週授業時数は、約三十分間。

○入學者は

中學卒業生、或は、是と同資格のもの、毎年、各科三十人づつを募集す。志願者數、募集のそれに超過するときは、撰抜試験を行ふ。その課目は、英語(本人の望により、佛語、或は、獨語にても、受けしむ)國語、漢文、地理、歴史、勿論、躰格試験あり。入學者は、願書に、寫眞、及び、金三圓を添へ送るべし。

○副科

本年迄では、副科として、一週間四時間づつ、所修學科以外に、他に、一外國語を撰ましめ、概略修めしめしも、規則改正にて、廢せられ、その四時間を本科に用ゐ、純然、一科専門に修めしむ。されど、別に、國際法、教育學、言語學、國語、漢文、經濟學(各一ヶ年にて修了す、べきもの)を、毎年、何れか、一つづつを撰ましめ、必修せしむ。

○學費等

授業料は、一ヶ年二十圓、二回に分納。校友會費二

御容赦なく、御問ひ合せを願ひます。

東京外國語學校 山田 藤助

親愛なる菽中學校生徒諸君、本欄に於て、諸君と、相見ゆることを得るは、小生の、最、光榮と致す所に御座候。今や、我帝國が、北歐の一強國と、干戈を交へてより、已に十旬、外には、海陸の貔貅は着々成効を博し、内には、國民一般、沈着、各自、業務を勵み居候は、實に、快心の至と存候。此際、諸君にも、素より、小生の言を俟たざるも、益、健康に、御注意相成り、眞面目に、學事御精勵の程、切に、希望仕候。 諸、茲に、小生在學中なる、東京外國語學校に就き、概略御報導申上候、御覽被下候は、幸甚。

○位置

東京市神田區錦町三丁目十四番地にありて、高等商業學校と、道路を距て、相對す。

○學科

英、佛、獨、露、伊、西、清、韓の八科、一人、一科を撰び修むるもの、各科間には、格別、聯絡なし。

圓。是等の金額、其他、被服、靴等の臨時費を除き、普通の下宿生活にて、一ヶ月十二圓より、十五圓あらば充分なり。

○躰育

生徒の望により、擊劍、柔道、テニス、ボート等を練習するを得。又、年一回、或は、二回、修學旅行をなす。

○講演會

所修語學實地練習の目的を以て、校友會の一部として、毎年四月下旬、各科より夫々、數名の撰手を出し、或は、演説、或は、小演劇を、其の國語にてなさしむ。貴賓の來客多し。但、本年は、時局に鑑み、その費用を以て、箱根地方より、伊豆修善寺へ、修學旅行を試みたり。

○卒業生は

英語科にては、目下の所、十中七八は、中等教育に従事し、他は、實業等。佛語科は、實業多く、獨は、實業、教育、相半ばし、露は、主として、實業。中には、領事館等に勤務するものあり。清は實業、稀に教育。西は實業。韓、亦、然り。伊は、教育、實

業、相半ばす。

○三十六年度入學志願者數

英	一九〇	伊	一四
佛	五〇	西	三五
獨	六〇	清	六二
露	五五	韓	二一

○本校に於ける山口縣出身者

目下。本科生總數五三九。中、山口縣出身者は一三人。山口縣語友會なるものを組織し、各學期、一回集會す。美禰郡出身の清語科本年卒業の一人は、去月、陸軍通譯として、戰地に赴けり。

○圖書館

校内に、圖書館あり。各科生徒、夫れ夫れ、好みに應じて、借覽するを得べし。

○別科

現に、社會にありて、職業に従事するもの、爲めに、日曜の外、毎日、午後六時より、八九時頃迄、英、佛、獨、露、伊、西、清、韓の中、一人に、一語を授く。修業年限二ヶ年。授業料は、一ヶ年十圓、三回に分納せしむ。目下、別科生徒數五六八。

○別科生徒職業區分表(三十五年度一覽に據る)

種別	生徒數	種別	生徒數
官廳員及公吏	九七	官立學校卒業生及學生	五八
陸海軍々人	三一	公立學校生徒	八四
各種學校教員	一八	陸地測量部委託生	七
辯護士	二	本校本科生徒	一四
醫師及藥劑師	三九	新聞記者及著作者	一二
神職僧侶宣教師	六	本校別科兼修生徒	五
銀行會社員	四九	中學校教員	一七
自家營業	二五	小學校教員	二九
		廣高師 玉木 正行	

昨日より降りつゞきたる雨、今、尙やまず、一週一度のこの日曜日、室内に蟄居の、つれづれなるまゝ、筆とりたる次第に候。

げにや、流るゝ月日に、關守なく、生等が、母校を去りしは、只、昨日今日と思ひの外、已に一年餘を經過仕り候、この一年の間、常に、生等の忘るゝ能はざりしは、波あらし日本海の濱、紫雲たなびく指

月山の麓は、巍然としてたてる我が萩中學校に御座候。あゝ、これ我等が熱心懇篤なる諸先生の指導を受けしところ、そが運動場は、親愛なる校友諸兄と、遊びたはむれし處、忘れむとするも、豈、得べしむやに候。

その忘は能はざる情況、校友諸兄の起居を知ることを得べきは、只、校友會雜誌あるのみ。實の處、小生等は、何故に、萩中の校友會雜誌は、出てざるか不思議にたへず候ひき。同室の人々などが、各自、出身學校の校友會雜誌を得意氣に繕きを見るときは、非常に、羨ましき感致し候。かく、待ちにまちたる校友會雜誌發行の由、承りたる生等の喜び如何ばかりに候ひしぞ。就ては、當校の状況知らせよとの事、入學志望者の手引にもと、ありまし、左に紹介仕り候。當校は一昨三十五年九月授業開始、昨年十月十八日開校式舉行致されたる位にて、創立日、尙淺く候。校舎は、廣島市大手町のはずれ、宇品街道にさしかゝる左側に、これあり候。敷地、大凡二萬坪、校舎は、未だ完成致し居らず候。既成建物は、寄宿寮四棟、及び附屬の賄所、食堂、浴場等

本校五棟、講堂、手工教室位に候。又いで建つべきは、寄宿寮二棟、圖書館全部、音樂教室、雨天躰操場、及び附屬中學全部、附屬小學全部に候。これ等、凡てが完成するは三十九年度に候。本校校長は、前第四高等學校長たりし北條時敬先生に候。教官は教授二十五名、外國人教師二名、講師三名、助教授五名、囑託四名に候。尙、外國留學中のもの、六名これあり候。

修業年限は四ヶ年、豫科と本科とにわかれ居り候。最初一ヶ年は豫科にて、志望學部の如何に關らず、全部收容して普通學を授け申し候。本科は、三ヶ年にて、國語漢文部、英語部、數物化學部、(物理化學を主とするもの、及び、數學物理を主とするもの)二部に分かる。地理歴史部、博物學部の五部にわかれ居り候。但し、當校には、現時は、本科二年までしか御座なく候。本科卒業の後、尙、一層、研鑽せむとするものゝために、研究科、一年、乃至、二年設置致さるゝ筈に候。萩中卒業生にて、當校にあるもの、物理化學科一年に山本政人君、及び、英語部一年の小生に候。この外、木村彌三君、動物學教室

にて、研究致され候。

本科、各學部は略し、入學志願の諸兄のため、豫科の學科、並に、毎週の時間數、左に記るし候。(委細の事は當校一覽を繙かるべく候。萩中學に、一部備へ付けあらむと存じ候。)

倫理(一)、國語(二)、漢文(三)、英語(十)、數字(四)、論理學(二)、音樂(三)、躰操(三)。師範出身のものには、音樂のかはりに、毎週四時間別科として英語を課せられ候。

現在生徒數は三百九、内、中學出身百八十四、師範出身百二十二、獨學三に候。生徒は、臺灣を除き、全國の凡ての府縣より來り居り候。山口縣人は十一名、(山中三名、豊中三名、萩中二名、師範二名、徳中一名)に候。

當校生徒募集の方法が、東高師のと異なるは、府縣の推舉生を入學せしむるのと、年齢を滿二十五歳以下と限られたることに候。また、各府縣の推舉を志願し得るものは、卒業成績の席次、首伍より四分の一以内のものとの制限有之候。この制限は、一寸見れば、可笑しく感ぜられ候。席次よきもの、必ず

コーンテニス部、遠足部、劍道部よりなり、何れも盛に候。就中テニス、劍道、最も盛にベースボール、これにつき、各每學期一回位づ、市内の各中學、師範、の選手をあつめて、聯合競技會を開き候。

當校の生徒は、凡て、寄宿寮に寄宿致し居り候。十四坪の室に、八人宛に候。起床は六時午後七時半より九時半まで自修、十時就寢に候。外出は、平日は午後七時半まで、休業日の前日は九時半までに候。小生、寄宿舎生活は、當校に入りて、始めてに候ひしが、はじめの中は、どうやら可笑な氣持ちも致し候ひしかど、なれて見れば、何ともなく、誘惑多き下宿屋の二階にころがつて居るよりは、遙にましに候。殊に愉快なるは、土曜日の晩に候。明日は日曜日なれば學科の下しらべする必要もなく、辭書と首ひきするにも及ばず、何でも、自分の好きなものが讀まれ、外出しやうと思へば九時半までは勝手。時には、この晩を幸に、同室のもの一同、茶話會を開くことあり候。あらゆる地方より集まりたる人々なれば、各地の風俗、言語傳説などの珍談、奇話湧く

しもえらからず、席次悪しきもの、必ずしも劣らず否、席次よきもの、内には、機械的に、教科書を暗記し、試験勉強にて、うまう誤魔化したるもの無しとも限られず候。されど、當校の方針としてなるべく生徒を、全國の各地方より集めむがため、餘義なく、かゝる方法をとるに至りたるものに候。

府縣推舉生の資格を、單に、中學、師範の卒業生とすれば、或縣の志願者、募集人員に滿たざる時は、非常に學業不出來のものも、僥倖にて、推舉生とならずとも限られず候。さすれば、入學生の學力に、不平均を來たす故、やむなく前述の如き制限を置かれたるものならむと推察致し居り候。

校友會は「職員生徒、一致融和して、家族的團體となり、徳性を涵養し、學藝を講究し、身躰を錬磨し本校の校風を發揚して、教育の資助となす。」の目的を以て、組織せられ、左の三部よりなり候。

講談部、講話、演説、討論を行ふ。

學藝部、圖書、雜誌の購讀、及び雜誌の發刊をなす。(雜誌は、現時、第二號編輯中。)

運動部、は、ベースボール部、フットボール部、

が如く、中には、浮世ばなしに、通を氣通り玉ふ御方あり、武骨なる薩摩訛、ニヤケたる京言葉、聞きとりがたき仙臺辯に、一座の興をそゆるもあり。笑ひさゞめく聲、いかにも愉快に候。また戀しき友や、故郷へ、音信した、むるも、多くは、この晩に候。人ありて、寮内を廻り見れば、卷紙のべて、筆とりて故郷こひしく、友なつかしき顔したる、多くの人を見出すならむ。兎に角、土曜日の晩は、何となく心が安らかに、氣がゆつたりとして、楽しく候。

從來、高等師範といへば、阿爺の集まれる學校と思はれ候ひしが、東京は知らず、少なくとも、當校には、年少の者の方、多く候。これ、一は、年齢に制限あるのと、一は、中學出身者多きがためならむと存じ候。

日露海戰以來、當廣島市の雜沓一方ならず、市内の民家は、悉く兵舎と成り、至る處として、帽影劍光の見えざるはなく、當校の運動場も屢練兵場と相成りたる次第に候。また、宇品灣内には、數十の運送船、常に、黒烟をふき、萬歳の聲は、毎日埠頭に響き申し候。さらぬだに、筆とることにつたなき身の

心づきたること、かれこれとなく書き続け候ひぬれば、さぞかし読み悪くからむと存じ候。御推讀の程願上候。早々。(六月十二日認)

海軍機關學校 田坂信一

(前略)海軍機關學校は、相模國横須賀に在り、横須賀鎮守府、及び、横須賀海軍工廠を離ること、約三四丁、海岸に住する新築校舎にして、東京灣の波濤を、日夜、生徒と相呼應して居る。其校舎は、大別して、本館、生徒館の二となす。本館の方は、主として、各種の教場にして、生徒館の方は、生徒の温習室、寢室等である。

海軍機關學校は、海軍機關官となすべき生徒を教育するのが目的であるから、従て其教授する學科も、機關官として、必要なるものを教授するのであるが其學科を擧ぐれば、機關術、水雷術、及び、普通學である。學校の教程は、三年と四ヶ月で、第一學年に教授する學科は、數學、化學、外國語、機關學、圖學、及び、工業。第二學年では、數學、理化學、外國語、機關學、圖學、及び、工業。第三學年とな

如何に、我海軍が行動しつゝあるか。如何に、苦心慘憺、其重大なる任務を遂行しつゝあるか。如何に、我海軍が、我帝國をして、名譽の地位に進めつゝあるか。如何に、我海軍が、其伎倆を發揚しつゝあるか。如何に、世人が、我海軍に、大なる名譽と、大なる尊敬とを拂ひつゝあるか。又、如何に、世界の視線が、我海軍の上に注ぎつゝあるかを。これを思ふて、こゝに至れば、我骨あり、血ある海國男子、誰か、拍手、以て快と呼びざる。誰か海軍々人たるを望まざる。

惟ふに、我海軍の前途は、これより、益多事、益多望を加ふ。然して、其任務や、益々遠大なり。されば、余の最も親愛なる菽中學校生徒諸君、宜しく勉勵し、身軀を健全にして、この前途、頗る多望なる我海軍に、身を投ぜられ、兵學校に、機關學校に、進んで入學し、將來、國家の干城を以て、自ら任じ、世界の海軍は、これ日本帝國の海軍たるの實を擧げられんことを、余の切望して止まざる所なり。

東京郵便電信學校 飯尾強介

と、數學、應用化學、理化學、外國語、水雷、機關學、送船學、圖學、及び、工業である。以上の學科は、本科となつて居るが、又、この外に別科として、端艇、水泳、柔道、擊劍、武科、及び躰操と、其外に海軍に關する法律、海軍衛生學等を教授するのである。素より、軍人の學校であるから、何も、自分勝手にやることは出来ない、規律の下に動作してやる時には、一齊にやり、止めるときには、一齊に止める殊に、時間は、ごく嚴重に守らねばならん。定時の點檢の整列に遅れるとか、或は、目曜などに、外出して時間に遅れて、歸校するとか云ふ様なことは、最も宜しく無いのである。入校試験は、毎年十一月にある例となつて居る。其生徒募集の告示は、大抵、其年の四月中に、官報に出る。本年の生徒募集は四十名で、四月廿二日、海軍省告示第十七號を以て、募集せられてある。生徒志願者心得は、菽中學校へ寄贈し置きたるを以て志望者は、就て見らるべし。割目して、遼東近海を見よ、平和一度破れてより、紫雲巖く帝都の西南隅、古木鬱蒼、畫、欄、晴き芝公園、東照宮の靈地として有名なる増上寺を後にし前面、遙に、品川沖を睥睨しつゝ、嚴然として立てるは、これ、東京郵便電信學校舎にして、全校舎は、總二階造にて、上階は、これを分ちて、校長室、幹事室、第一、第二、第三、教官室、圖學教室、技術科一二年教室、通信科教室、行政科一二年教室、及び、清語、韓語教室とし、下階は、これを分ちて、庶務室、技術音響自修室、通信實踐室、第二外國語教室、教務掛室、學生扣所、物理化學教室、及び電氣實驗室暗室とす。校舎の南部、寄宿舎との間には、遞信省の建設に係かる圖書館ありて、本校教官、學生、其他、遞信部内、在官の士の研究に備ふ。校舎より、廊下を以て、直に、寄宿舎に通ず。其間に、銃器室、運動器具室、無線電信實踐室、電話實踐室あり。在校の學生を分ちて、技術科、行政科の二となし、技術科には、主として、電信電話を授けて、行政科には、主として、郵便諸規則を學ばしむ。何れも、修業年限二ヶ年にして、卒業後、五ヶ年間、遞信部

内在官の義務あり、此の外、通信科生なるものあり、我國電信各局より、通信技術に熟達せるものを撰出し、本校に於て、一ケ年間、更に其の技を練磨せしむるものなり。

本校の運動部には、擊劍、柔道、フットボール、ベイスボール、大弓、ロンテニス等あれども、就中、最も盛なるをロンテニスとし、屢マツチを催せり。授業時間は、一週、三十三時間あり。又、春秋の候には、運動會、修學旅行、各、一回、催さるゝが例なるも、彼の日露戰爭は、端なく其の影響を及ぼして、本年は、經費節減の名義の下に、運動會は、これを行はざることなし、剩さへ、一年級募集取消となりたるため、頗る寥寞を覺えぬ。本校、及び寄宿舎には、巡視なるもの數名を置きて、校舎の保護、並に、學生の監督に備ふ。

日露戰爭の結果、我海軍は、無線電信の功果の大なるを示し、世人漸く、これに注目するに際し、目下我校には、寄宿舎との間に、百二十尺のポール（電柱）を建て、遞信省との間に、盛に、通信技術を練習せり。

政科、鼻下を撫てつゝ、後に、法律刑法を以て攻むれば、技術科は、直に腕を按じて、電氣工學、電話學、線路建築學、電信學、別しては、唯一の武器たる無線電信を以て、應戰す。合戰數回、口角、泡を飛ばして、激論し、各自が意氣、益、揚々たるも勇まし。されど、戰終ふるや、酔より覺めたるが如く大笑一番、互に、握手して、共に、遞信部内に、一身を貢獻せんことを誓ふも面白し。

島尾平七

（前略）却説、私事は、昨年六月、思はぬ病氣に犯され、病床にあること、五旬の長きに亘り、専門學校へ入學の時期を失ひ申候。病氣全快後は、區々、日を送り申候處、何分、徵兵適齡中にて、色々、將來の方針に就き、苦心致し候も、遂に、猶豫願の手續さひまどり、時期を外るゝに至り申候間、苦心の末、遂に一先、一年志願兵に服役し、其の上にて、將來の方針に取りつく事に相決し、先般、一年志願致し候ひしが、時局多端、戰爭も、非常に激烈にて幾多の軍人、雄壯の戰死を遂げ、國內、亦、上下一

我が寄宿舎は、本校の南部にありて、廊下によりて相通ず。全舎は、これを南寮、中寮、北寮の三部に分ち、各寮は十三個の學生室を有し、各學生室は、寢室、自修室に分たれ、自修室には、六人を收容し十六燭光燈二箇を備ふ。寮には、部長、副部长、各一名を置き、學生室には、室長あり。部長の上には寮務掛あり。其の上に、舎監あり。其の他校醫室あり、校醫を出張せしめて、學生の病を治療せしめ、學生集合所には、新聞雜誌數種を備へて、學生の觀覽に供し、面會所を以て、學生の面會人に供へ、娛樂室には、風琴などの樂器を備へて、學生の娛樂に供し、攝生室を以て、病生の收容所となし、其の他湯飲喫煙室、小便室洗面室、浴場、食堂あり、此の外、炊事委員を設けて、賄を監督せしめ、運動器具、樂器新聞雜誌等は、各、委員を置きて、これを整理せしむ。

外出時間は、平日は、午後八時迄とし、土曜日、日曜は、午後九時迄とす。消燈時間は、午後十時なり。舎内にありても、行政科、技術科の軋轢は、免れざる所にして、會々、談話の機にも、互に罵詈雑言、行

致、報國の勇を鼓し候時なれば、此の上は、一死、以て、君恩の萬一に報ずる覺悟に御座候。然る處、今般、御校、校友會雜誌第三號、編纂のことにて、卒業生迄も、寄稿の御案内に預り申し候。元來、私事は文學的事業は好み居候故、前二回の雜誌編纂の時にも、何か一つ、投書致す考に候處、區々たる拙文、當撰は思ひもよらねば、強いて、此の度、寄稿せずとも、又も、機會は有るべくと考へ、末頼もしく存居申候處、其後校友會が、財政困難とかとて、編纂の噂もなく、乍蔭、校友會衰微し、運動の一方にのみ偏し候をかこつ之餘り、幾度か、委員等に訴へしも、更に効なく、只管、後悔致し居候。然る處今般、飛雁一封、かゝる御通知に接し、喜躍やるかたなく候。無常の世の、殊に、戰時、候へば、何時露と消えんとも知らぬ身なれば、此度ならては、宿望を遂ぐる機會はなしとて、早速、夜も、ろくろくに寝ず、二三文ものし候へども、何れも、思はしく出來申さす候。されど、日限も、近く相成り候故、不取敢、別封の一文、投書することに決し申候。物數ならぬ拙文の、まして、文章家多き中なれば、う

ちつけ、望なしとは考へ候へ共、先生の御添削を忝うしたる上、萬一、雑誌の一ページをだに、汚し得ばとて、一縷の望をつなぎ居申候。没書ともならば今、一文、必死の覺悟にて、作る考に御座候。投書用紙も、如何か知らず候故、御手数の段、恐れ入り候へ共、師弟のゆかりを以て、何卒御様子御知らせ被下度、御依頼申上候。

右は、某先生に宛て、投書と共に、申越されたる書簡にて風流刺史薩摩守平忠度の昔覺えて、いと悲しければ、請ひ得て、此に掲載する事となしぬ。

委員附記

土屋小七郎

前略小生事、其後無事、碌々消光仕り、本年三月、東京郵便電信學校技術科を卒業致し、目今、遞信省電機試験所に於て、無線電信の研究に従事致し居候間、乍他事、御放念被下度候。御承知の如く、我國に於ては、毎に、先輩諸氏、刻苦多年、大に、學理を推究し、本邦獨特の無線電信装置を創製せられし以來、吾人は、日々、の號外に於て、阿々よりの無線

を得たる者にて、支那人にて、本邦に、十有餘年間、諸學校の教鞭を執り、日本語にも、精通致し居り、好都合に有之候。尙、別紙、規則書は、只、御參考迄に、別途、御送付申候間、御覽被下度候。一般當地方は、師弟の關係、稍、薄き様に聞き及び、中學校にても、全様の感あるとの事に有之候。先は、右、御報申上候。勿々。

勝野清

拜啓、私儀、これ迄、東京商船學校に在學罷在候處昨年十一月當地に派遣を命せられ、來年六月上旬迄は、當地、海軍工廠に、通勤致し居り申候間、右様、御承知なし下され度候。

山口縣出身海軍兵學校在學者一同

現今、及び、將來、帝國國防の主腦は、陸海孰なるか、對ふるに、所謂、東洋の英國と云ふ二句を以てし、敢て、又、贅言を要せざるべし。然り然らば、由來、國家は、帝國の防衛、延ては、盛衰を、海軍將士に俟つこと、頗る大なりと云ふも、決して、誣言にあ

電信によれば云々の句あるを見る毎に、皇軍の連勝を祝賀致すと、同時に、斯業の、我等に裨益すること多大なるを知り、不思、斯學の萬歳を唱ふる者に御座候。然りと雖ども、斯學の歴史に於て、漸く、其の光明を見るに至りしは、過去十年以來の事に候へば、未だ、完成に至らずと云はんよりは、寧ろ、幼稚の時代に有ると云ふの適當なるを覺え候。されば、此千載一遇の秋に當り、大に、斯の業の爲めに貢獻して、益、皇軍を裨益せん事、一は、以て、國恩の萬分の一に酬い奉り、一は、以て、會長閣下の、平素の御教訓を遵奉するに近からんと存じ候。(下略)

大阪高等商業學校 岡村喜與

(前略)當校は、御存じの通り、本年三月より、専門學校令に依る様に相成り候次第にて、私共も、日、未だ淺く候故、校内の状況も、逐一申兼候も、追々、御通知可申上候。尙、當校も、漸々刷進、有望に相成る様に候。教師も、普通には有之候。學科中にては、第二外國語たる支那語の教師などは、最も、當

らざるを信ず。而して、防長二州の青年諸君にして、此名譽あり、責任ある海軍の主腦たるべき將校たらんことを志願するもの寥々たるは、吾人の、最も怪訝に堪へざる所なり。或は云ふ身軀検査の嚴なるがためなりと、ざれども、本縣青年の躰格が、他府縣青年より劣るてふ事實も、理由も、共に發見すること能はず。然らば、何によるか。余等、竊かに思ふ、父兄の「板子一枚下は、地獄なり」てふ、古諺に欺かれて、諸君の志願を阻むに非ざるなきか。(勿論、諸君中には、斯る弱音を吹くものなきを、固く信ず)これ、大なる謬見なりとは、一度、海洋に雄飛する鱗鱗に接せば、疑惑氷解、思ひ半ばに過くるものあるは、余等の斷言して、憚らざる所なり。故に、諸君の熱誠は、終に、父兄の同意を得んこと易々たるべし。生も命なり、死も命なり。屍を、馬革に包まん概を以て、魂を、千尋の海底に安んぜしむるは、實に、島帝國健男子の本領に非ずや。矧んや、君國のために、死するに於てをや。茲に、逸話あり、一紳士、英國海軍の將校に問ひて曰く、尊兄の御祖父御父は何處にて逝き玉ひたるや、將校、徐に對へて

曰く、共に、海上にて、紳士曰く、さるに、尊兄、何んが故に、かゝる危険なる海上に生活せらるゝやと、將校、破顔一番、然らば、借問す、尊兄の御祖父御父は、何處にて、紳士曰く、勿論、靜寧なる臥床中にて、將校、笑ひ曰く、尊兄、毎夜、何んぞ、斯る危険多き臥床に入るやと、英人の意氣、寔に感ずべし。嗚呼、彼の、常に、太陽、其領土に没せずてふ大英國ある所以のもの、蓋偶然に非ざるなり。吾人、焉んぞ、英人に劣らんや。苟も、身軀強壯、數理、語學に嗜好を有するもの、何んぞ、日本の大ナルソン、大ブレイキたるを冀はざるや。其楷梯として、江田の風光を賞するを冀はざるや。國家は、斯る諸君を待つこと切なりと信ず。聊か、蕪辭を述べ。言、囁嚅として、意、明かならざらん。唯、諸君の注意を惹起し得ば、幸甚。

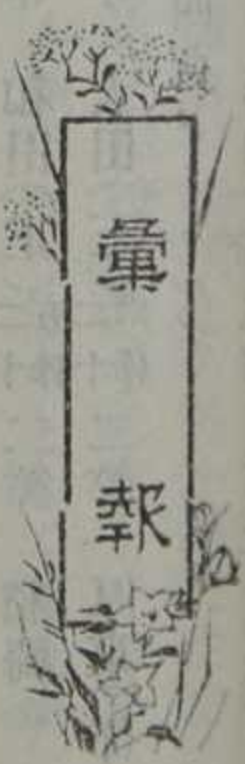
寫眞は、明治三十五年四月十七日、我校全盛時代の紀念として、(第二期海軍擴張の結果として、明治三十二三四、三ヶ年間、年々、二百名の生徒を採用したり。依つて、當時は、在校生徒六百人、海軍部内にては、呼んで、當校全盛時代と云ふ) 當校中、最

大の建物なる生徒館(楷下溫習所、楷土寢室に充つ)前に、生徒總員を整列せしめて、撮影したるもの、背後に聳ゆるは古鷹山、海拔、千二百呎、江田の入江と、相俟つて、風景、最も佳、敢て云ふ、血あり、骨あり、涙ありてふ幾百の健兒等は、絶えず、佳景の「インスピレーション」を受けつゝありと、此寫眞、諸君の一覽を得て、永く、御校に存するを得ば、多謝々々。

入學試験、其他一切の質問あらんことを希望す。余等は、多大の歡を以て、諸君の望に副はんことを期す。左に、便宜あらんを思ひて、現時に於ける山口縣出身在校者の人名を録す。二年前には、五十餘名なりしも、今や、減じて、僅々、三十四名、亦、遺憾ならずや。噫乎。

壹號生徒

- | | |
|------|-------|
| 前原謙治 | 鳥野團一 |
| 三戸基介 | 御堀傳造 |
| 岡本勇 | 大野太熊 |
| 伊藤三藏 | 阿武信一 |
| 神村孟 | 友貞俊太郎 |



時局に對する學生の覺悟

滿洲問題は端なくも、日露の開戦となり、今や、遼東に、黄海に、我が精兵の向ふところ、着々、好果を奏し、旅順遼陽の陥落、亦、近きにあらんとす、これ、豈千秋の快事ならずとせむや。然りとはいへども、試に思へ、露國は、面積に於て、人口に於て、儘に我に數陪し、世人、之を稱して、狡猾なり、野蠻なりとするも、なほ、世界の最大強國にして、之を、我が國に比するに、實に、月籠の差ありといひつべし。されば、この戦争たる、我が國未曾有の至難事業にして、僅に、數回の勝利を以て、徒に、この前途を下し、平素の態度を失するが如きは、吾人の、最慎戒すべきものにして、常に、曩に、久保田文相の發せる訓示、「要するに、陸海軍人が、死を決して、戦ひ、難苦缺乏を忍びて、國家に報ずるの精神を轉

- | | |
|-------|--------|
| 井上極征 | 末岡久雄 |
| 山本吉徳 | 細川安助 |
| 野口厚 | 三浦誠輔 |
| 阿武清 | 坪井丈左工門 |
| 村中又一 | 小野彌一 |
| 羽仁六郎 | 伊藤萬喜太 |
| 有地十五郎 | 羽仁潔 |
| 熊谷秀夫 | 山本松四 |
| 佐古良一 | 和田專三 |
| 山縣小介 | 信田新一 |
| 野原伸治 | 白根貞介 |
| 高木忠治 | 山中順一 |

じて、以て、教育に従事するもの、及び、教育を受くるもの、精神と爲さんことは、本大臣の、切に望むところなり」の語を脳頭に刻し、熱心、誠意、その志すところに勵み、須らく、他日、國家の柱石たることに覺悟せずんばあるべからず。徒に、新紙を、これ友として、教科書を顧ざるが如きは、我等の則るべき道ならざるなり。

春季陸上運動會

九十の韶光、夢の間に過ぎて、新緑影漸く深からんとする五月の中旬、我が校は、例年の如く、陸上大運動會を催しぬ。校の正門には、四學年生徒の堪精もて造られしアーチ厳しく立ち、國旗は、之に交又せられいと、心地よげなり。運動場には、周圍二百メートルばかりなるサークル、其の中央に二重に結び繞らされ、赤白黄青の色旗は、幾旒となく翻り、殊に、一旒の大旗は、場の一方に樹てられ、墨くろくろと書かれたる陸上大運動會の文字も、いと、しるべく見えたり。さすがに、廣き運動場も、四方より集れる觀覽者にて、今は立踞の餘地だになかりき。

かくて、午前八時三十分、一發の銃聲と共に、運動は開始せられ。競技は幾回となく演ぜられ、勝者は、其の都度、賞を得ぬ。競技中、殊に、觀客を抱腹絶倒せしめしは、囊競技にて、競技者は、身軀の自由ならざる爲め、倒れ、飛び、匍ひ、躓き、轉ひ、あらゆる奇態を演せぬ。其の間、烟火は絶えず打上げられて興を添へぬ。様々の競技ありて正午の休憩も過ぎし頃には、觀客の數、益、加はり、山の如く、潮の如く、時々、とどめきて、埒をも、打破らんとする勢なりき。かくて、午後六時となりて競技も果て、四百の健兒の唱へし兩陛下萬歳の聲は、彼方の指月山に響き渡り、こゝに、この日の運動會も終りを告げぬ。

此の日特に面白かりし競技に勝を占めし人々の氏名を取り出せば、次の如し。

- 早駆(二百メートル)
 - 一等 和田(正)五十二等 羽崎 三等 工藤
 - 一等 大田(三)六十二等 厚東(洋)三等 山縣
- 早駆(四百メートル)
 - 一等 杉山一三二等 村上 三等 中村(樹)

- 一等 大谷(卓)五十二等 厚東(洋)三等 藤井
- 早駆(六百メートル)
 - 一等 末永一七四二等 横田 三等 奥田、赤川(省)、
 - 二人三脚(二百メートル)
 - 一等 村上 三十二等 末永 三等 村田
 - 一等 大谷(卓)一三十二等 寺田 三等 藤津
 - 囊競技(百メートル)
 - 一等 石光三十二等 能美(留)三等 和田(正)

計算競技

- 一等 榮、六分三二秒 増野 三等 藤津

障害物競技(二百メートル)

- 一等 伊藤(八)二十秒二分 小池 三等 百井
- 一等 横田一八秒二分 末岡 三等 村上

特別障害物競技(四百メートル)

- 一等 島尾十七分二二秒 笹原(孝)三等 室谷

各級選手競走(八百メートル)

- 一等 補習科田坂三十分二分 四學年 末永
- 二等 五學年 横田 四等 三學年 杉山
- 三等 一學年 中西 六等 二學年 磯部
- 職員競走(二百メートル)
 - 一等 青木先生 二等 佐藤助手 三等 龜山先生

篠田大尉の南清視察談

明治三十六年六月十五日、頃日南清の視察を了へて歸朝せし篠田陸軍大尉は、我が校を參觀せられ、校長の求めによりて、余等の爲めに、一場の談話を試みられたり。大尉は、我が萩江向の人年齒、正に三十一、堂々たる壯夫なり。氏は我が校の前身たる萩

學校の出身なりといふ。誠に、斯の如き先輩が、屢來校せられて、其の經歷、視察等の談話をなすは、只に、吾人の智識を廣むるに益あるのみならず、吾等後進をして、奮起せしむるに、最功あるべし。大尉の談話は、約一時間、語の軍人的にして、其の口調、極めて質直、音吐朗々、最壯なり。話中、最地理上参考となすべきものあり。また、最憤慨すべきものあり。

大尉は、地圖につき、大略、其の旅行せる地方の地理と歴史とを述べて後、云ふ様、楊子江下流は、地平廣、河流溝渠、四通八達し、一般の旅行者、及び貨物は、盡く、舟に依りて、運搬せらるると、橋梁舟筏の構造、堤防の堅牢、灌漑の方法、通路等の奇を一々圖解せられ、且曰はく、南清の地たる、最我が國人の事業をなすに適せり、然るに、我が國人の、彼の地に至れるもの、甚少きは、最遺憾とする所なりと。大に吾人を啓發する所ありたり。大尉は、尙談を進めて、彼の地にある邦人の状態を述べ、予、蘇州府に至り、彼の有名なる姑蘇城外の寒山寺に詣ぐ。境内石碑あり。之れ、有名なる文徵明の書する

に至るまで、終始、一日の如くなりき。先生、その己を持するや嚴、人に接するや溫、又極めて、意を攝養に用ゐられ、二年間、一日の欠席だになかりしなり。而して、一朝、この悲報に接するに至りたるは、そも何も何ぞや。嗟乎たるその聲、溫乎たるその容猶、耳に存し、眼に淫ぶが如きものあるも、その人已になきを如何にせむ。吾等は、先生の計に接し、悲傷哀悼、暗涙の、臉に交るを禁ずる能はざりき。英靈は、呼べども返らず、微衷は、通ずるに道なし我等は、只、成業の日を待ちて、地下に安眠せる先生の靈を慰むるの一事あるのみ。

萩同窓會

一昨三十五年八月十九日、其第一回を舉行せし萩同窓會は、昨年八月九日、志都岐神社々務所に於て、第二回を開會せられたり。當日、會する者三十八名來賓には、藤富郡長出席せられたり。午前十一時開會、兩谷氏、委員を代表して、開會の辭を述べ第一回の會計、及び、規則を報告せられ。次に、藤富郡長は同窓會に對する希望を、品川正三氏は、臺灣の事情

ものにして、支那人は、其の何たるを知らざりしが返りて、異邦の我が國人、之れを發見し、今や、其の地の一名所となれり。然るに、碑面の文字、磨滅毀損、殆ど讀下すべからず。之を問へば、日本人來て、之れを碎き持ち歸りしが爲めなりと。予、之を聞きて、憤慨に堪へず。我が國人の公德心に乏しきを恥ぢ、且、嘆じたりと。吾人、之れを聞きて、將、何とか云はむ、唯、茫然自失せしのみ。

ガスタフソン先生の遠逝

何人も、能く、竟に、死の蔭の蔽ふところとなるを逃る、能はざるは、已に、宇宙の原則なれども、未來に、希望の光明を有せる壯者の、一朝にして、翳没すること、こよなく悲しき至なりけれ。わがガスタフソン先生は、未、落木蕭條の齡にあらず、正に爲すあるの春秋を以てして、一千九百〇三年六月十七日を以て、早くも、館を捐て給ひぬ。先生は、去三十四年五月二十六日、來りて、教鞭を、本校に執られてより、一に、忠實熱心を以て、我等を薰陶せられ、三十六年三月三十一日、辭して歸國せらる、

一昨を演説せられ、吉田潤一氏は、懸河の辯を以て社會主義に就きて、一は、社會的方面より、一は、哲學的方面より、考察して、社會主義を實行すべき考案を演説せられ、松原俊造氏は、南京三江師範學堂に赴任せられし折の旅行談を試みられ、岩田博藏氏は、同じく、社會主義に就きて、一場の雄辯を揮ひ、大に、滿場の睡氣を覺醒せしめ、教育修養によりて、利己心を全滅し、利他心の勝利を得しむべき自己の信念を披瀝せられたり。午後四時、散會しぬ。此日會する者、昨年に比し、少數なりしも、珍客もあり、四方より歸郷せる學生も多く、有益なる演説もありて、中々盛會なりき。

秋季陸上大運動會

十月の中旬、我が校には陸上大運動會を催せり。こは、我が中學校の、初めて呱呱の、聲を上げしより、滿四年に當りたる故、之を祝すると、一つには、秋天、漸く高く、指月山下に事あれかしと待ちに、待ちたる四百の健兒の銳氣の大に蓄積し來りたる故之を散ずるが爲めに、催されたるなり。此度の運動會

は防長教育會の音樂隊を招くとの事故、一同大に勇みたるに、俄に、寄宿舎生徒に、傳染病に罹りたる者ありしたため、運動會は延期となり、従ひて音樂隊招致の事も、全然、畫餅に終りたるなり。偕て、當日の景況を記さんに、日延となりしにも係らず、大に、活氣の充滿せしは喜ばしき現象なりき。先づ場内の様子を見るに、正面には來賓席有り、其の左方には、小學兒童席設けられ、又、中央のデールには、數多の賞品、山の如く積重ねられ、委員は、腕或は、帽子に徽章を懸て熱心に其の間を奔走して、夫れ夫れ、盡力せられたり。かくて、十時四十分、競技を始め、午後六時十分、無事に競技を終りたり。例に依り、優勝者の姓名を記せば左の如し。

- 早駆(二百メートル)
 一等 大谷(卓)四秒二十 二等 太田(三)三等 弘中
 一等 和田(正)五秒二十 二等 杉山(仁)三等 小倉
 早駆(四百メートル)
 一等 和田(正)八秒五十 二等 大谷(卓)三等 中村(樹)
 早駆(六百メートル)
 一等 末永(一)三秒四 二等 横田 三等 寺田

五等 一年級末開

生徒父兄保證人談話會

本校に於て、學校と、生徒父兄保證人の家庭との、聯絡を圖る目的を以て、會合を開きしは、明治三十三年一月十四日を以て、初とす。爾來、毎年、二回乃至三回。會合するを常例とせしが、三十六年十一月一日午後一時、其第九回を、寄宿舎談話室に開かれ、兩谷校長より、本校教育の方針、體育の必要、及び、其現況、生徒出席の督勵、學校衛生に關する設備の狀況、試験用紙一定の主意、本會の目的等に關し詳細に演述せられ、井上教諭より、教務部の性質及び其事務に就きて述べ、教授上の便宜、書類整理の必要に應じ、生徒用物品、用紙等の形式を一定したる者ある事を説明せられ、右終りて、午後四時散會したり。會場には、學事諸統計表、地圖、繪畫、博物標本等を装置して、參觀に供せり。當日、出席せる者、凡百名、頗、盛會なりき。

第四回卒業式概況

彙報

本にては、三月三十日、午前十時より、第四回卒業式を舉げられ。式場には、生徒一同、職員並に、來賓縣知事代理林書記官、松本山口高等學校長を始め、朝野の貴紳、及、卒業生保證人等、百數十名の參列するや。校長は、舉式の挨拶を、簡單に述べ。卒業生總代、厚東武雄君に、卒業證書を授與せられ。次で、一學年間欠席なく、又、懲戒を受けたる事なく、學業、優秀、且、伍長となり、熱心、忠實に、其任務を竭くし、成績顯著なるもの、厚東武雄君以下二十名に。又、一學年間引續き伍長、又は室長となりて、其任務を竭くし、成績顯著なるもの、木津谷泰夫君以下三十八名に、熟れも、賞品、及び、褒狀を、又本學年間、精勤せし山田昌介君以下五十四名には、別に、賞狀を授與せられ。各、其、榮譽を彰表し。校長より、學事報告をなし、終りて、告辭を朗讀せられ。次で、林書記官も、深重に縣知事の告辭を代讀せられ。松本源太郎氏は、演壇に登り、演説して、祝辭に代へ。最後に、卒業生總代厚東武雄君は、答辭を朗讀せられ。校長式の終を告げ、一同退場す。時に、午前十一時過ぐる頃なりき。嗚呼盛

なる哉。諸君の前途は、遼遠なり。事務局は、多端なり。其證書の裏面には、偉大なる名譽あり。重大なる責任あり。願くは、諸君は、益、健全に、益、努力せられん事を。進んでは、大日本國の守成者となり、退いては、本校の名譽を落す事なかれ。分袂するに當り、聊か、所感を述べ。知事、及び、校長の告辭は、左の如し。

告辭

今や、我國は、洵に、振古未曾有の國難に遭遇し、未、俄に、其の底止する所を知るべからずと雖、遂、夫の強暴を挫ぎ、國威を、萬邦に輝かせん事、期して待つべきなり。此の時に當り、諸子は、本校々長、教員の懇切なる薰陶と、諸子、多年の研鑽とにより、茲に、榮譽ある卒業證書を受くるを得るに至りたるは、獨、諸子の光榮たるのみならず、又、本官の欣喜に堪へざる所なり。思ふに、諸子は、今より進んで、高等の教育を、修めんとするものもあらん。或は、出て、社會、各般の業務に、當らんとするものもあらん。其志す所を異にすと雖、諸子が、修得せる學識を以て、

國家の隆運に貢獻せんとするに至りては、必ずや、其の軌を一にせざるべからず。而して、國家の諸子に待つ所以のもの、亦、實に、茲に在り。諸子、宜しく、其の身軀を強健にし、奮勵、事に當り、熱誠、業務に服し。益、國威を發揚し、永く、陛下忠良の臣民たらん事を期すべし。以て、告辭となす。

明治三十七年三月三十日

山口縣知事從四位勳四等 渡邊 融

告辭

卒業生、諸子。余は、茲に、諸子が、本校卒業生たるの特權と、名譽とを得たることを告白す。余は、又、教員、諸氏と共に、諸子が、多年、刻苦勉勵の効、空しからず、今日、成效を收めたるにつぎ、熱心なる欣喜と、祝賀との意を表す。思ふに、中學の卒業は、諸子が、將來、活動進歩の一階梯のみ。一準備のみ。看よ、二十世紀の世界は諸子の開拓、貢獻を期待しつゝあるにあらずや。東洋の天地は、我帝國の盡力、經營を要求しつゝあるにあらずや。嗚呼。諸子の前途や、實に、遠

く。諸子の責任や、實に、重しと云ふべきなり。諸子、夫れ、興起奮發、忍耐剛毅、益、其品性を陶冶し、其智能を涵養し、以て、其責任を全うし、其本分を竭くし、一は、國恩の萬一に答へ奉り、一は、防長人士たる名譽と、本校卒業生たる面目とを辱むることなかれ。これを、告辭となす。

明治三十七年三月三十日

山口縣立萩中學校長正七位 雨谷羔太郎

卒業生徒氏名

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 厚東 武雄 | 香積 見弼 | 佐田 健一 |
| 佐々木義彦 | 兒王馨四郎 | 林 俊香 |
| 白根 政輔 | 中村 良弼 | 寺西啓太郎 |
| 山下盛太郎 | 宮原 藤吾 | 木津谷泰夫 |
| 松尾 英一 | 乃美 忠治 | 杉山 俊亮 |
| 安間 定次 | 福田 信彦 | 久保田庄作 |
| 三浦 九一 | 村田 發太 | 兒玉 武男 |
| 吉見 市郎 | 藤井 晴一 | 新庄 順一 |
| 伊藤 傳次 | 室谷 貞一 | 山本 公介 |
| 佐古芳次郎 | 植木 秀 | 能美 留壽 |
| 高橋熊太郎 | 浮里 俊道 | 青原 忠一 |

舊師を送り新師を迎ふ

來任以來、日、尙淺くして、英語科教師松原先生は、昨年四月、職を、岩國中學に轉せられ、之と共に、今年八月、岩田、林の兩先生新任ありて、英語數學の兩科を持たれ、我校多大の光輝をそへぬ。然るに、越えて、本年三月、郡司先生は、縣下豊浦中學に、門司先生は、福岡縣東筑中學にそれ、轉任せられ、龜山、山本の兩先生、亦、相つぎて本校を辭せらる。あ、集散離合、固より、人生の常事とは云へ、我、校良師を失ふこと、何ぞしかく類なる。先生等、教策を、本校に執られて以來、龜山先生は英語科に、郡司先生は國語漢文に、門司先生は躰操

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 今井 武方 | 吉見 傳一 | 横田 三介 |
| 井山 正作 | 原田 信藏 | 山田 俊治 |
| 中村 敏介 | 桂木 庄市 | 村橋 孫一 |
| 和田 正敏 | 木村 精男 | 小池 武彦 |
| 正木 孝介 | 根來 行藏 | 信國 武尙 |
| 井田 晋 | 西村 昌一 | 笹原 孝一 |
| 山田 昌介 | | |

科に、各々、生等を薰陶せられ、特に、山本先生の如き、本校創立の始めより、訓誡指導六有星霜、其間、一日の如く、淳々として倦み給はず、一校、翕然として、風を仰ぎ、殆んど、嚴父の威ありき。今や追慕の情に堪へず、生等不敏といへども、精勵黽勉懈らずば、他日薰陶の殊眷に報ずるを得むか、思うて、こゝに至るごとに、未だかつて瞿然たらずんばあらざるなり。

本會記事

三十六年度の野球

本校三十六年度の野球界は、將來に對する進歩の曙光を認むるを得たり。何となれば、野球部員は新に、縣下野球界の視察を了して奮然、猛省したる所あればなり。萩の北や、北海を控へ、三面、悉く峻坂、衆嶺迫まりて、僅に、阿武の平谷を見る。乃ち、交通不便、往く者、來る者、奔命に苦むを以て、外界

の刺激は、此の地に來る稀なり。故に、斯界發達の期運は著しく遅れたるなり。見よ、山口や、豊浦や、徳山や、其中學は、對校仕合を待つ事多々、衆目環視の裏其技を鍊り、其膽を養ひ名譽の月桂冠を得、懸軍長驅、敵を、天下に求めて、雌雄を決せんと、其壯烈全く男子の本領に背かざるものあり、抑、野球の技は快活なる廣野に行はれ、長棍一揮せば、熱球飛び、敵陣に突入し機に投じ、變に應じて、縦横の術策を試み、四壘を奪ひて、始めて、一點を贏ち得べし。投手魔球を弄し、敵をして、策應に暇あらざらしめ、捕手、果然、強球の衝に立ち、百發したるものは、百、これを、手中に收む高さもの低きもの空を切り鳴號するもの捕ひて、以て、我砲彈となし走れる敵將をして一壘を得るなくして、斃れしむ。内外の野手游撃手、各壘の守將、滿身の精氣と、百鍊の活躍とを以て、九回の勝敗を試む。天高く氣清き處、十八の健兒、半日の清興を得。運動界中、何にものか、敢て、斯術に及ぶものあらん。然れども我校の野球は未だ甚だしく、其技の精と、其勳の敏なるを以て稱られず彼の擊球を術の、縣下

午後三時に始まり全五時終了

審判者 佐藤虎介

三十六年五月十六日五年對四年仕合

五年紅組 四年白組

各中學を風靡せしむるの比にあらざ、未だ、恐らくは對校仕合の列に加はるを得ざる域にあるものにあらざるなきや。之れ、我部員が、將來を期して、最も熱心に、斯術の研磨鍛鍊をなさんと欲する所なり。然り、運動場は整理せられたり。新なる器具は、到着の途上にあり部員は、日に多きを加ふ之れを我部か大なる進歩をなさんとする第一歩となす。左に、三十六年の仕合表を示さん。

三十六年五月二日聯合仕合

紅組 白組

投手	横田 十三介	2	赤川 義助	0
捕手	太田 三郎	0	林 香	1
遊撃手	藤津 亮然	2	坪井 海來	1
第一壘守將	横見 莞爾	0	田中 義男	2
第二全	中村 誠一	1	品川 庸平	2
第三全	佐々木嘉春	2	山本 爲善	0
右野手	高橋 信一	1	笹原 武一	1
中野手	岡藤 甚三	1	村上 欣一	2
左野手	室谷 貞一	1	井山 謙介	2
		10		11

本會記事

投手	横田 三介	0	赤川 義助	5
捕手	杉山 俊亮	2	太田 三郎	3
遊撃手	室谷 貞一	0	坪井 海來	1
第一壘守將	笹原 孝一	2	田中 義男	2
第二全	中村 敏介	0	品川 庸平	2
第三全	佐田 健一	1	藤津 亮然	1
右野手	根來 行三	2	林 香	3
中野手	山田 昌介	1	佐々木嘉春	4
左野手	小池 武彦	1	横見 莞爾	4
合計得點數		9		25

午後三時に始まり全五時に終る

審判者 佐藤虎介

三十六年五月廿二日四年一組二組對仕合

(第二撰手)

一組 二組

投手	寺田 幸吉	3	山縣 恭輔	0
----	-------	---	-------	---

捕手	羽崎勝五郎	5	藤井	龜松	3
遊撃手	羽根 又助	1	厚東	洋	1
第一壘守將	口羽 素介	6	村田 仁介	2	1
第二全	末永 柳介	2	熊谷 芳介	3	2
第三全	柳田 恭輔	3	菊屋 宗輔	2	3
右野手	讚井 毅一	4	王藤 康生	0	2
中野手	奥田 又助	3	策 正範	2	0
左野手	下瀬 政三	4	三好 謙一	1	2
得點合計		31+X			14

午後二時四十分に始まり
午後四時四十分に終る

三十三十六年十一月二日四年對三年仕合
審判者 太田三郎

投手	赤川 義助	4	井山 謙介	2
捕手	太田 三郎	4	長井 寛治	2
遊撃手	坪井 海乘	4	中村 誠一	3
第一壘守將	田中 義男	3	岡藤 甚三	1
第二全	品川 庸平	3	村上 欣一	1
第三全	藤津 亮然	2	山本 爲善	1

右野手	大賀 幾太	2	山科 元二	0
中野手	横見 莞爾	3	福間 四郎	0
左野手	寺田 幸吉	3	伊藤 八郎	2
得點合計		28		12

二時十五分に始め四時四十分に終る
三十六年十一月十九日三年對五年仕合

投手	小池 武彦	3	井山 謙介	3
捕手	辻 定次	2	長井 寛治	5
遊撃手	室谷 貞一	1	中村 誠一	2
第一壘守將	横田 三介	4	岡藤 甚三	5
第二全	笹原 武一	1	村上 欣一	3
第三全	佐田 健一	1	山本 爲善	2
右野手	白根 政亮	2	福間 四郎	2
中野手	中村 敏介	1	小林 享介	1
左野手	植木 秀	1	伊藤 八郎	2
得點合計		16		25

審判者 横見莞爾
坪井海乘

三十三十六年十一月二十日全校聯合大仕合

投手	井上謙介	2	赤川義助	1	横田三介	1
捕手	林 香	1	辻 定次	1	大賀幾太	2
遊撃手	坪井海乘	1	藤津亮然	1	室谷貞一	0
第一壘守將	田中義男	0	横見莞爾	1	中村誠一	1
第二全	村上欣一	3	品川庸平	2	中村敏介	1
第三全	笹原武一	1	佐田健一	0	山本爲善	2
右野手	石津乙磨	3	菊屋貞造	0	村上欣一	1
中野手	寺田幸吉	4	小池武彦	2	岡藤甚三	1
左野手	鹿野政一	0	高橋信一	0	山科元二	0
得點合計		15		8		9

午後三時に始まり全六時十分に終る
審判者 太田三郎

右の表によれば、五月中に三回、十一月中に三回、合せて、六回の仕合を行ひしなり。然れども、こは其主要なるものを記したるものにして、本年度を通して、十四五の仕合は行はれしなり。しかも、其よく記するに足るものは、五月と十一月とに集りたるは、此地の氣候に於て之の兩月は、最も斯の運動に

適したるによるか、抑、亦、奇なりと云ふべし。各仕合に就きて、詳細なる批評を試むるは、最も興味ある事なれども、紙數限りある本誌に於ては、よく、之を許さず。よりにて、左に撰手中、特に目だちて、記者の視線を引きたるもののみを畧記せん。赤川義助君、井山謙介君、横田三介君、此の三者は常に、投手の任務を負はせられたるもの、如し。抑投手は、場の中央に立ち、全軍を一眸の中に收むべく、開戦の時に於ては、先づ敵將の最も老練敏活なるものと相對し、其一戰に於て、殆ど、相方の強弱優劣を卜すべく、從て、兩軍の精神界に大なる影響を與ふるものなり。特に、走者と、投手と相對して、之を、一壘の間に挟み、或は、之を、三壘の間に挟みたるときの如きは、其壯觀云はん方なし。之の間に於ける一舉一動、直ちに、勝敗を意味するものなり。横田氏は目を以て、打者に對し、其呼吸を計るに於ては、あまり成効の多きにあらざるに似たり。然れども、時に、弱き磨球を送り、時に快速なる直行の球を與へて、巧に、打者をして、應接に暇あらざらしむるは、毎回の仕合に於て、よく之を見るを得た

り。而して、機熟し、時來るの際には、一種云ふべからざる怪腕を振はるゝは、又、多とすべし。井山氏は、此の三投手中の年少なれども、強肩にして、最も、直行の球を利用す。然れども走者より、特に挑戦せざれば球を各壘に送らず全く、自重の態度を失はず、故に、失少しと雖も、亦、非常なる効を收むる能はず時の進むに従ひて、氏は、天來の勇氣を加へ、敵の落漠として敗勢を示したる時の如きは、盛に攻撃の猛勢を振ふに吝ならず其敗殘孤城を守るが如きの悲境に陥るや猛然として立ち、味方の全軍を卒めて、更に、一新氣焔を吐かじめ満場歡呼の聲を止むる能はざらしむるものあり。赤川氏に至りて、又優に一方の雄たらずんばあらず。氏は、其曖昧の姿勢を利用して、打手と走者とをして、氣を揉ましめ、時に二壘に球を呈し、轉じて、本壘の打手を驚かしめ捕手か三壘と連鎖となりて、走者を挟むの際に於て、速に、本壘を擁するの奇敏、頼むに足る打手の技倆を察し、緩急宜しきを計り、時には、疾呼大聲、味方の注意と元氣とを喚起し、捕手、若しくは内外の野手よく受取りたる球は、決して、之を連發

することなく、各、守將の應戰の準備整ふを待ちて始めて、打手に、向ふが如きは、特筆するに足るべきか。

太田三郎君、林香君、大賀幾太君、長井寛治君、辻定次君、此の四者は、何れも、捕手に適すべき性格を備へたるが、投手の三者と全しく、屢々、之の任務に就きたりしなり。捕手は、戦場の後部に立ち一目して、全局の勝敗をみるべく絶好の位置にありと雖も、投手の千變萬化する熱球魔球時を定めず數を論せず遽然して眼前に顯はるゝや、聊、非なりとも必ず之を受取らざるべからず。且、敵の打手は、三兄の間、恐るべき長棍を振ふ危険の迫まること、一再ならず、況んや、飛球の落下するときの如き遽かに、面を脱して、球の方向を求むるが如き、随分難儀の位置にあるものと云ふべし故に、其人となりや勇猛果敢、所謂、死を恐れざるの人、實に、之をよくすべく、又、快、最も多かるべし林氏球を胸に受けて、平然たる、長井氏の猛勢の直球に對して、敢然、挺身して、廻避する所なき、太田氏の各種の球が飛び來るに従ひて、之を、手中に弄し、投手の球

を受取りて、三壘の走者を擁護して、終に、之を擒にする、常に投手と相應して、全軍の大局を觀取し猛然たる進撃を促かし豪健なる守勢を取らしむる其躍如たる姿勢によりて、之を知るを得べし惜むらくは、打手たるの際、あまりに素直なる、球を呈して或は、飛球となり、或は遊撃の前に落ち、容易に、功を敵將に與ふる事なしとせず、大賀氏は、短身肥滿、一見敏捷なる運動を欠くもの、如し。然るに其場に上り其面を着くるや一變して、彼は、恐ろしき荒武者となるなり。伸び上り、走り出て、面を拂ひて、猿腎を伸べ、右に、左に、其重躰を動かして、如何なる球をも必ず、之を掌中に歸せしめんとする務めたりと云つべし。氏は、新進の捕手として、更に新らしき異彩を放ちつゝあるなり。特に沈毅の性、活劇の際に認むべく決して、作戦の方針を誤らざるなり。辻氏は、從容迫まらず、應戰、妙を盡し或は注文を投手に求め或二番定をアムバイアに促かし其權利を進張し、敵の虚勢を突き奇効を立つるに敏速なり。其果敢にして恐るゝ事なき、林氏と好一雙と稱すべきか。林氏は、よく、其度量を据ゑて

狙撃するところなし。勝敗何れの時にも、少しも其態度に異状を示さず、隠然たる古武士の偉あり臂力、特に勝れざれば、よく練習を積まば、二壘に球を呈して、一壘の走者を生捕にするは、正に、之の人に求むべきならん。

記者は、中村誠一君、坪井海乘君、室谷貞一君、田中義男君、寺田幸吉君、藤津亮然君、山科元二君、山本爲善君、村上欣一君、其他數名の顯著なる撰士と寄宿に於ける一團の撰手三十六年度二年生中の俊秀者、及び、未だ顯はれざる一年の新進に向つて、各論評を加へて、其功を稱し、其大成を祈らんと欲するものなり。然れども、今は、茲に擱筆すべきの運命に際せり。次號に於ては、一層の紙面を要求し諸氏の進歩と其成績とを掲げんことを欲して止まざるなり。

本部長は、熱心に、本會員、及び野球部に希望する所あり。請ふ、其要領を述べん。

本校の野球は、既に盛なるべきの時を有したりき今や退きて、進歩の第一歩を擧げんとす。

百餘の部員、各、其位置を保ちて、日日練習を務

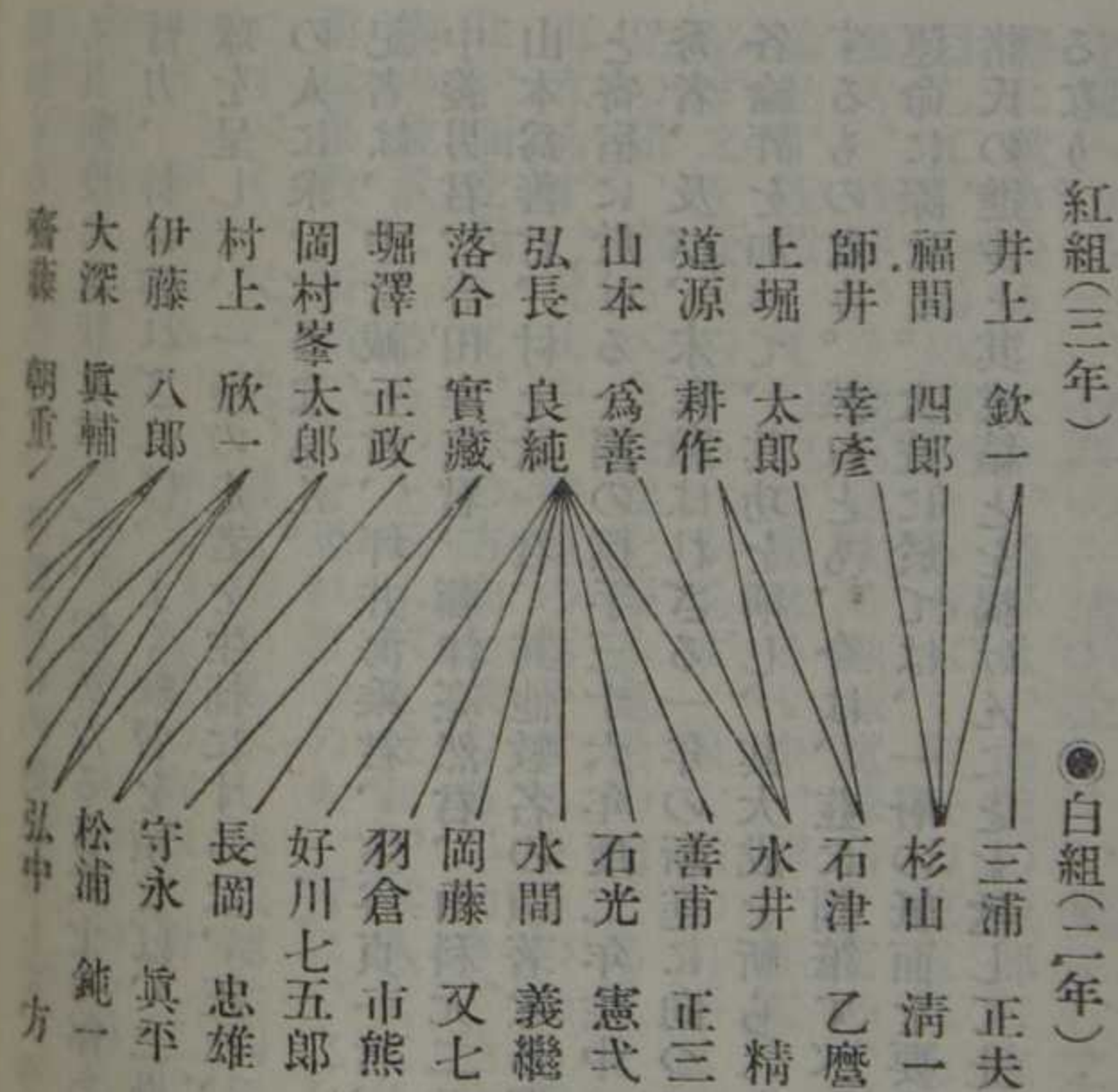
むべし。器具は、盛に、之を使用すべし。遺憾なく之を利用すべし。我青年は、一日に、二時間、快活なる原頭に立ちて、勇壯なる野球を弄するは、身神發育上、極めて有益なり。只、現今の學制に従へば、學校放課の後ち二時間以上、三時間の勇猛なる激動を重ずるときは恐らくは、學科に故障をなす事あらん。三十七年度に於ては著しき發達をなし、進歩の第二期を劃せんことを欲す。仕合を行ふに當りては、部員、及び、全校の生徒愉快なる興味と、沈重なる同情とを以て、悉く運場動に立たれたし。各級撰手を撰定し、之を、第一、第二に區別し、以て、技術の進歩と練習の便宜を計るべし。級々相對し、組々相對し、若しくは、校々相對して、仕合を行ふの際、敵たり、味方たり、互に死命を制せんとするの術策を行ふと雖も、元これ、體育と徳育とを土臺として起れるもの、友誼を重じ禮讓を明にして、奮々たる和氣を含みて仕合の

終結を全うすべし。

擊劍柔道部記事

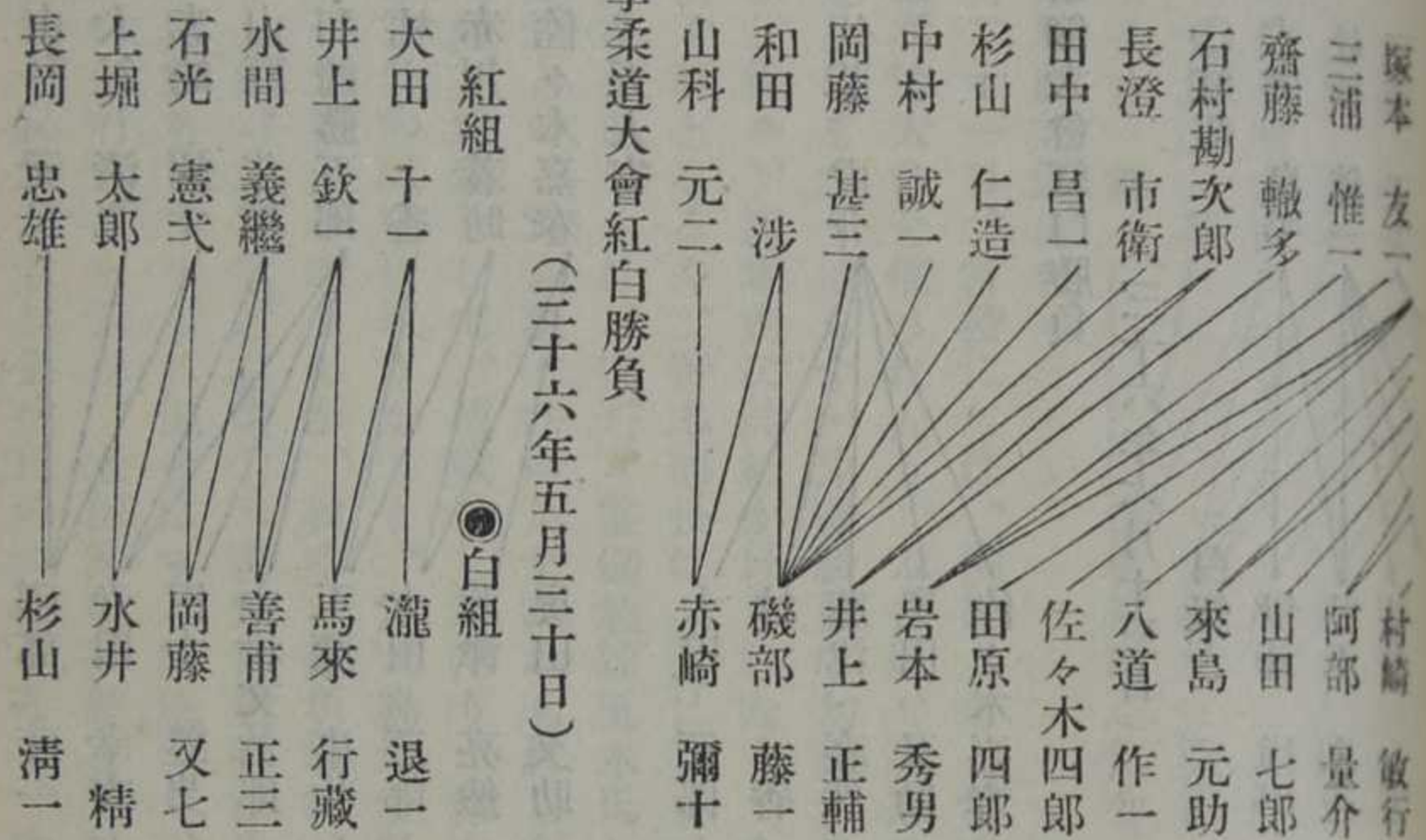
二年對三年柔道試合番組

(三十二年五月二十三日)

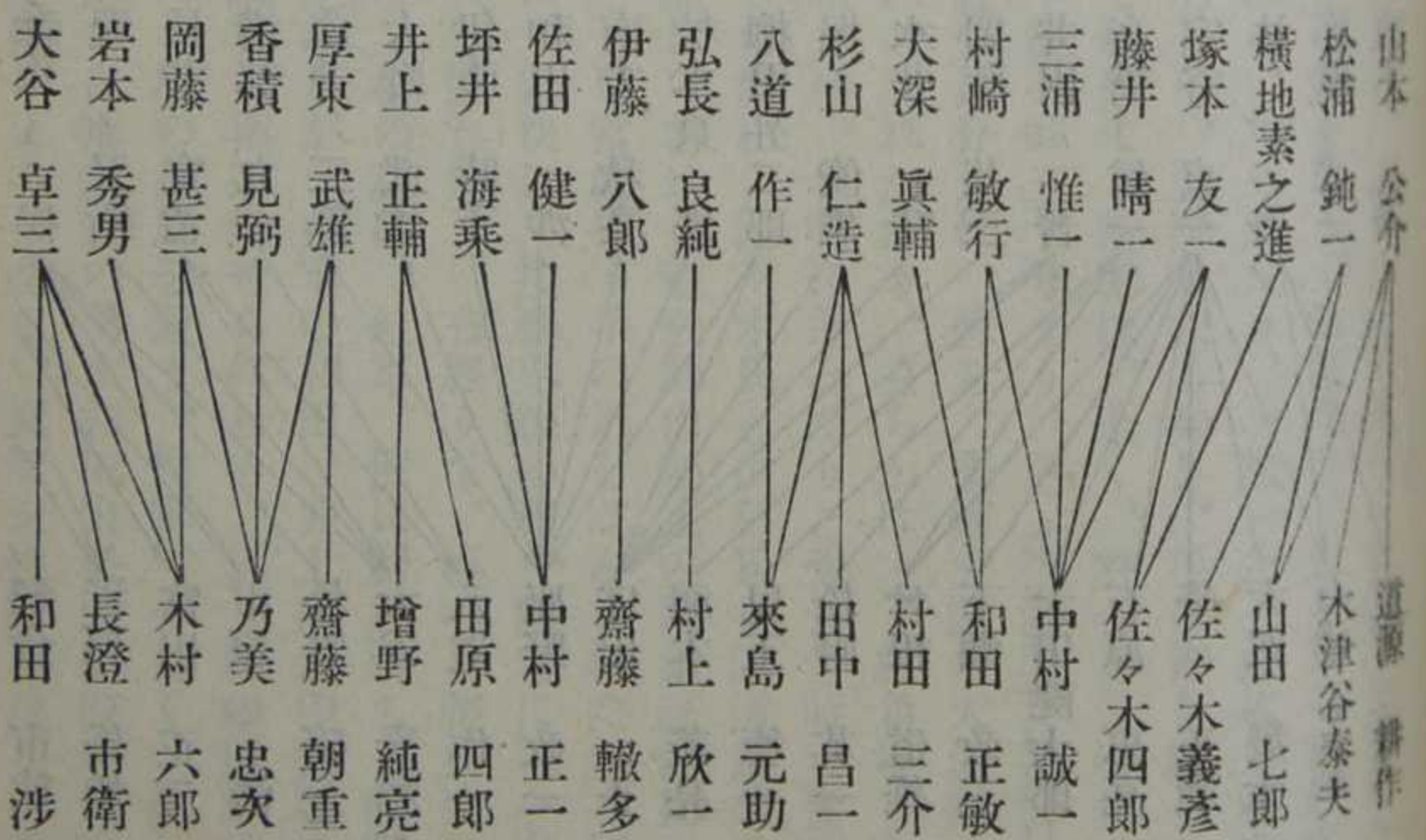


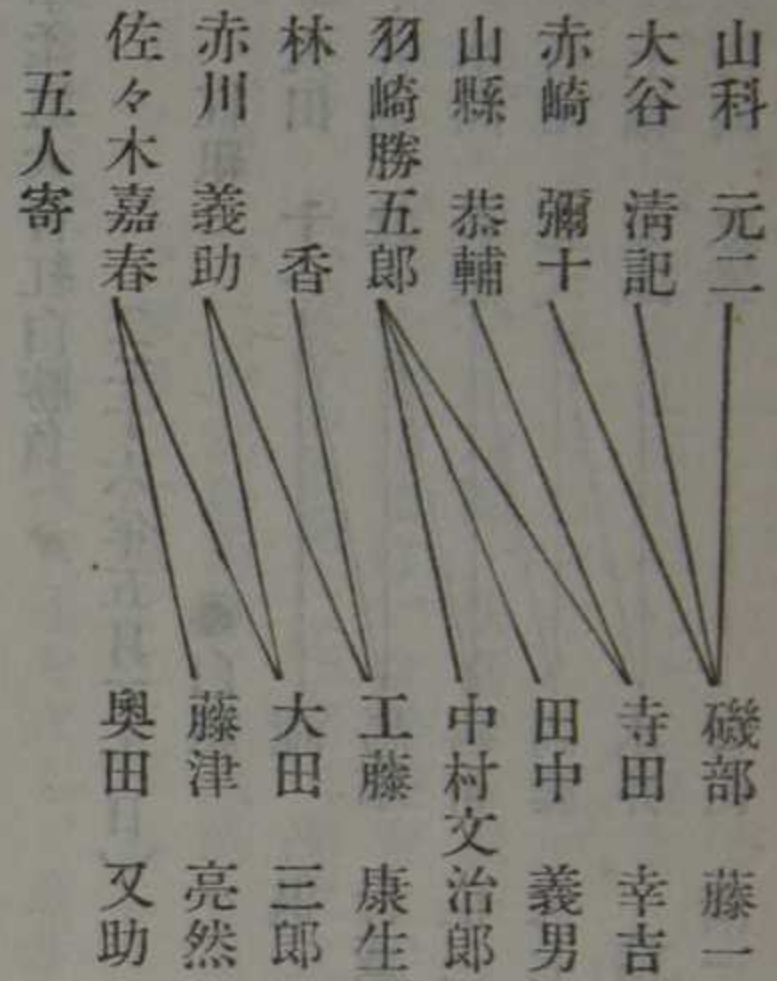
春季柔道大會紅白勝負

(三十二年五月三十日)



本會記事





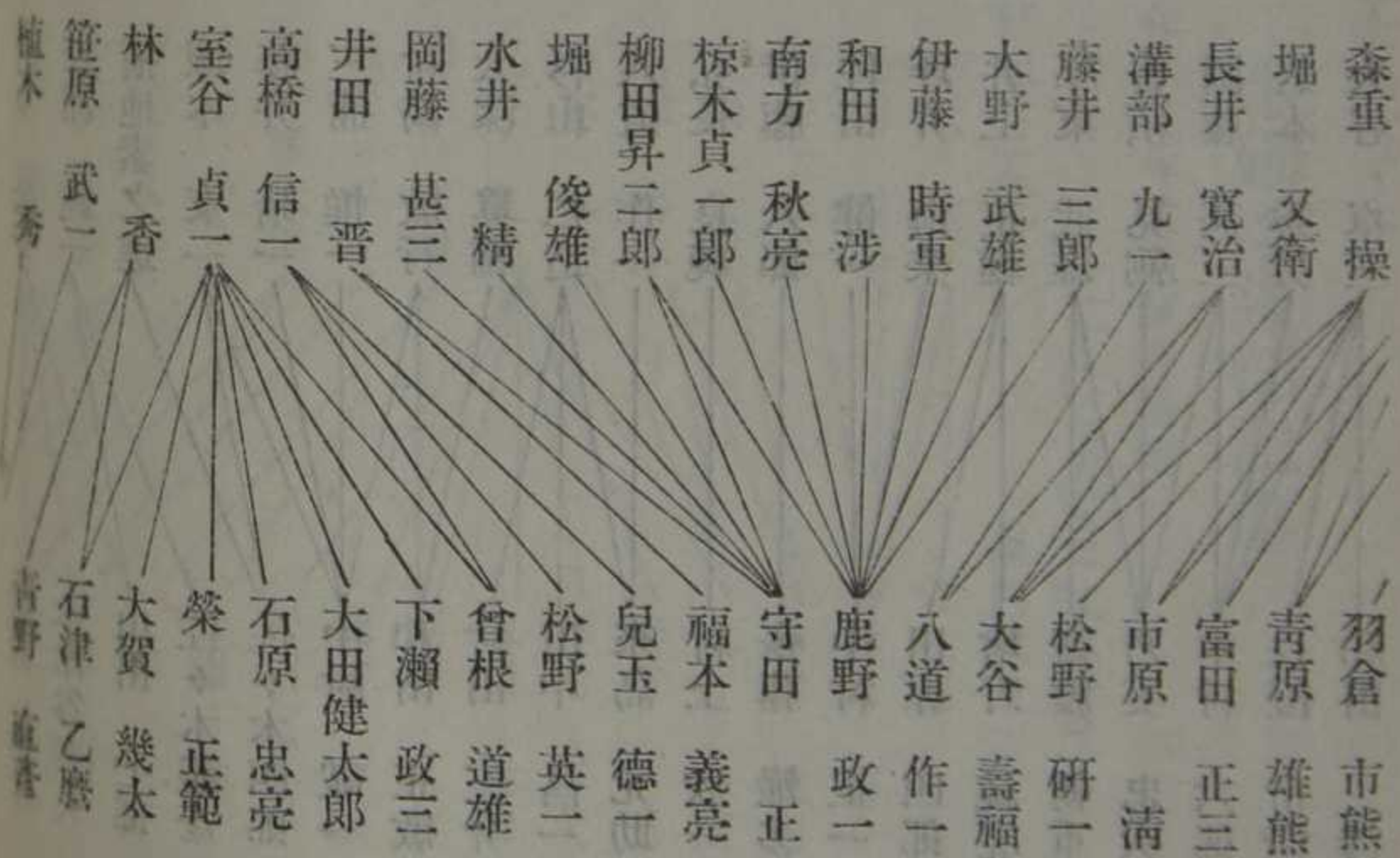
全擊劔大會紅白勝負

(三十六年六月十三日)



春季擊劔柔道大會

本年二月二十一日、當校にては、例により、第六回春季擊劔柔道大會を催されたり。本日は、夜來の大風雨なりしにもかゝらず、生徒職員は勿論、多數の來賓は、續々、道場内に詰めかけられたり。やがて、午前十時となるや、青木部長は、試合につき、種々の注意を述べられ、次で、擊劔教師玉木氏と、生徒末永氏との、眞影流七法の形を試みられしが、技術の巧妙、觀者をして、感歎せしめたり。終りて擊劔三本勝負の試合に取りかかり、震天動地の壯快なる試合、十五六合ありしが、就中、最勇敢に、最激烈なりしは、三浦氏對曾根氏と、青野氏對石津氏となりき。何れも、年少者に似合はず、威風堂々、其姿勢といひ、打ち方と云ひ、老練家の手腕とも見えたり。其後、萩警察置員對生徒の試合となり、中に



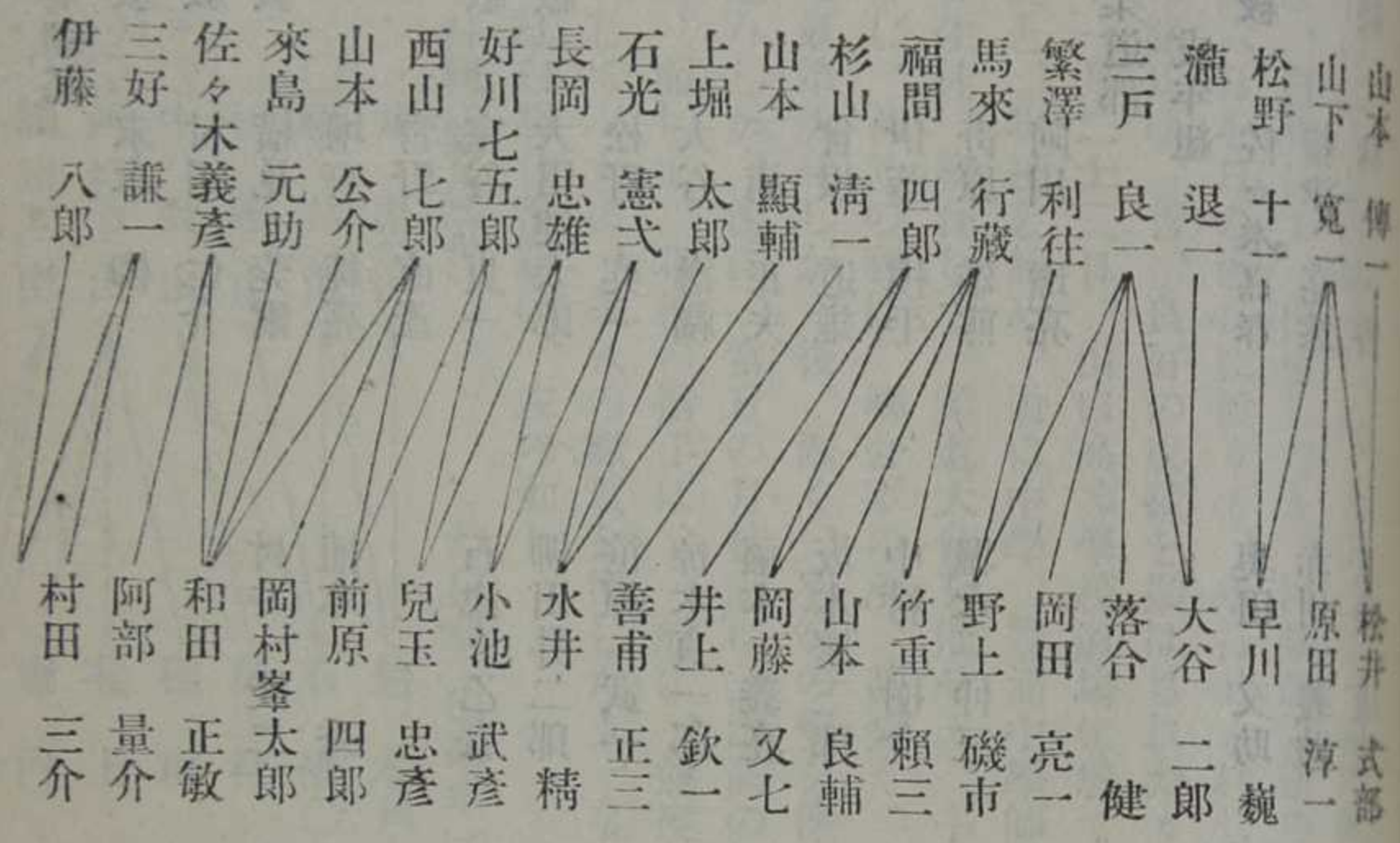
も、今田氏と、末永氏との試合の如き、今田氏の老練、萬全の策を取りて油断なき、末永氏の輕妙疾風の勢を以て、攻めかかり、一離一合、互に、電光石火を散らして、奮闘したる如き、手に汗を握らしめたり。これにて、擊劔は、全く、終りを告げ、晝食の後、午後一時三十分より、愈、柔道試合に遷れり。組は、紅白に分たれ、忽ち、襲撃虎闘の大活劇は開始せられ、入れかはり、立ちかはり、紅負け、白勝ち、紅組、殆、半頃に進みたりと覺しき時、暫時休憩し、その間に、佐々木氏と山科氏と講道館柔道投の形、並に、當地柔道教師山縣氏の門弟三浦氏と、矢田氏と、專當流捕り手の形を試みられたり。何れも活潑に、壯快に、技藝熟練の程、觀者に、一方ならぬ感賞を博したり。右終りて、再び、勝負に取りかかり。初の程は、紅軍、俄に勢を得て、優勢となりて進みしが、白軍の和田、井上兩氏の奮戦によりて、頽勢、稍回復せられしも、再、紅の田原氏の爲めに、一層の打撃を蒙り、白軍、少しく、憂色を呈せしが、白軍氣鋭の勇士和田山科兩氏の、天暗なる勇猛の働により。全く、衰勢を挽回したり。兩氏

が、平素の勤勉は、衆の及ばざる所なりしが、果して、其結果は、此に現はれ、和田氏の足拂、背負投、山科氏の腰業は、善く、其機を得て、強敵を、容易に打止むるを得しは、さすがの手際と、満場、暫し鳴りも止まざりけり。かくて、最終に至り、白の副將赤川氏、得意の足業を以て、紅の副將林氏を破り、大將佐々木氏に對し、輕妙なる足業を以て巧に戦ひ、大に、佐々木氏を惱し、殆、危地に陥れしが、遂に、袈裟固の爲めに敗れたるは、遺憾なりき。續いて、兩大將の勝負となりしが、此の時、満場、さながら、水を打てるが如く、肅として、何れも、片睡を飲んで、勝負如何と、うち守るに、兩將、互に、秘術を盡し、神變鬼化、一上一下、藤津氏、善く戦ひしが、佐々木氏の腕挫、遂に、奇効を奏し、組數三十七番の後、本日の月桂冠は、紅軍の頭上に落ちぬ。右終りて、兩谷會長より、本日大會に對する所感として、其技術の以前より、一段進歩せし事と、一種凜然たる氣象の發揮せられし事を賞せられ、尙、益、奮勵して一層修養鍛練せられん事を希望すと述べられ、午後五時頃散會したり。なほ、當日の番組

は左の如し。

擊劍試合番組

○青原 雄熊	○中村 樹介
○深井 直一	○坂本繁三郎
○森重 操	○福本 義亮
○大谷 壽福	○堀永 仲三
× 椋木貞一郎	○檀崎 豊樹
○伊藤 樞平	○阿川 璟亮
○曾根 道雄	○鹿野 政一
○三浦 正夫	○大田健太郎
× 柳田昇二郎	○榮 正範
○松野 英一	○大賀 幾太
○石原 忠亮	○青野 直彦
○室谷 貞一	○石津 乙麿
○横見 莞爾	○村井 俊二
○植木 秀	○中村 平次(警)
○増野 純亮	○末永 柳一
○石井 賤(警)	○今田小次郎(警)
柔道紅白勝負	



本會記事

擊劍柔道部進級

擊劍柔道部々員が、常に、熱心に、技術を練磨せし結果、本年二月二十三日、過去一年間の成績に徴し、左記の人々は、佳良なるを以て、夫々、肩書の通り、進級せられたり。吾人は、益、諸氏の奮勵勉を希望して止まざるなり。



擊劍部

- 二級 末永 柳一
- 三級 村田 仁介
- 四級 横見 莞爾
- 増野 純亮
- 青野 直彦
- 室谷 貞一
- 大田健太郎
- 松野 英一
- 大谷 壽福
- 三浦 正夫
- 曾根 道雄
- 伊藤 横平
- 青原 雄熊
- 阿川 璟亮

- 村井 俊二
- 植木 秀
- 石津 乙鷹
- 柳田昇二郎
- 菅原 武一
- 鈴木貞一郎
- 福本 義亮
- 坂本繁三郎
- 中村 樹介
- 堀永 仲三

柔道部

成年組

- 二級 佐々木嘉春
- 藤津 亮然
- 三級 林 香
- 奥田 又助
- 赤川 義助
- 工藤 康生

擊劍部

- 四級 大田 三郎
- 大谷 卓三
- 中村 正一
- 佐田 健一
- 和田 正敏
- 佐々木義彦
- 香積 見弼
- 幼年組
- 三級 和田 涉
- 岡藤 又七
- 馬來 行藏
- 兒玉 忠彦
- 野上 磯市
- 落合 健
- 松井 式部
- 大谷 二郎
- 山本 傳一

- 坪井 海乘
- 三好 謙一
- 阿部 量介
- 長岡 忠雄
- 繁澤 利往
- 大谷 二郎
- 山本 傳一

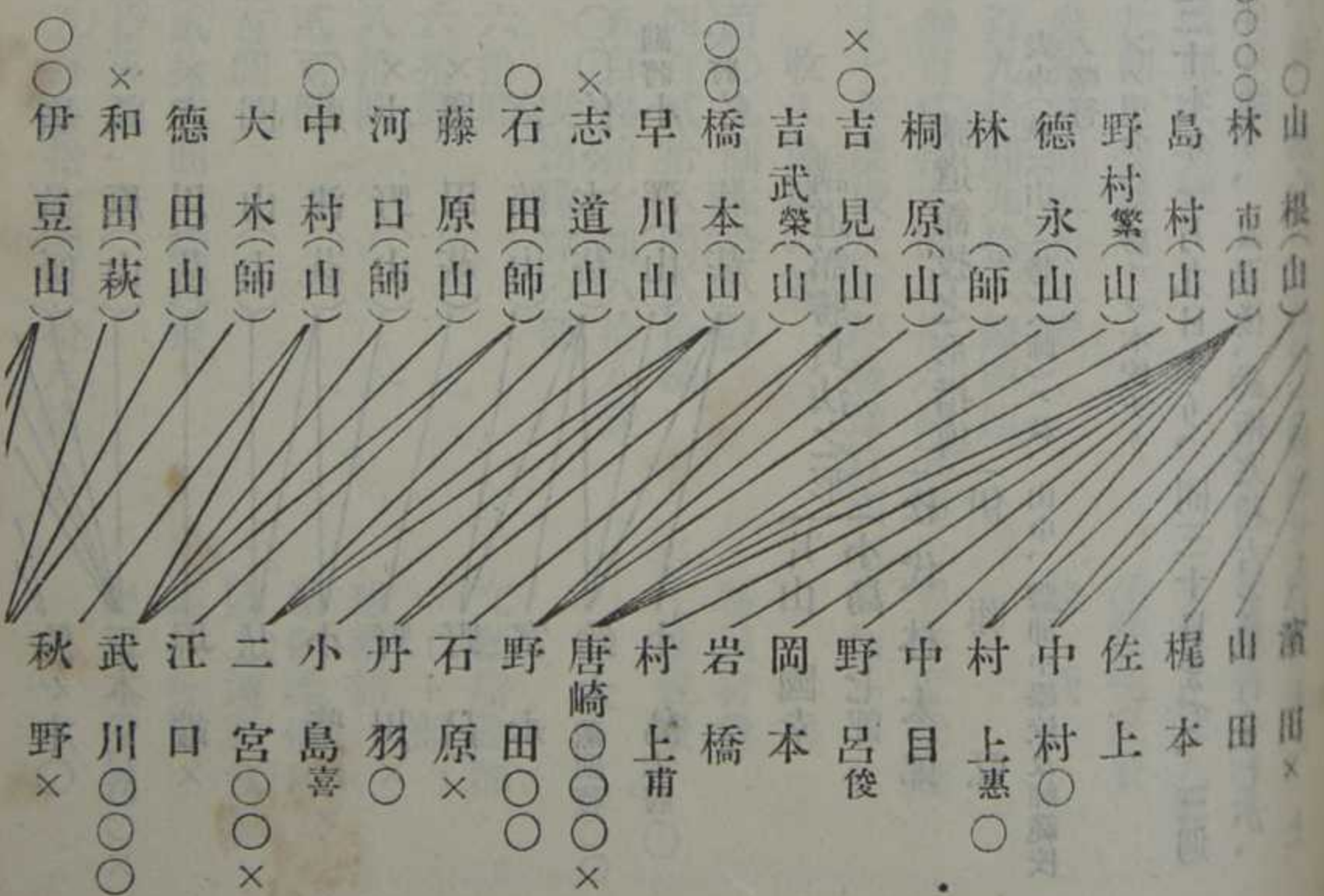
附記

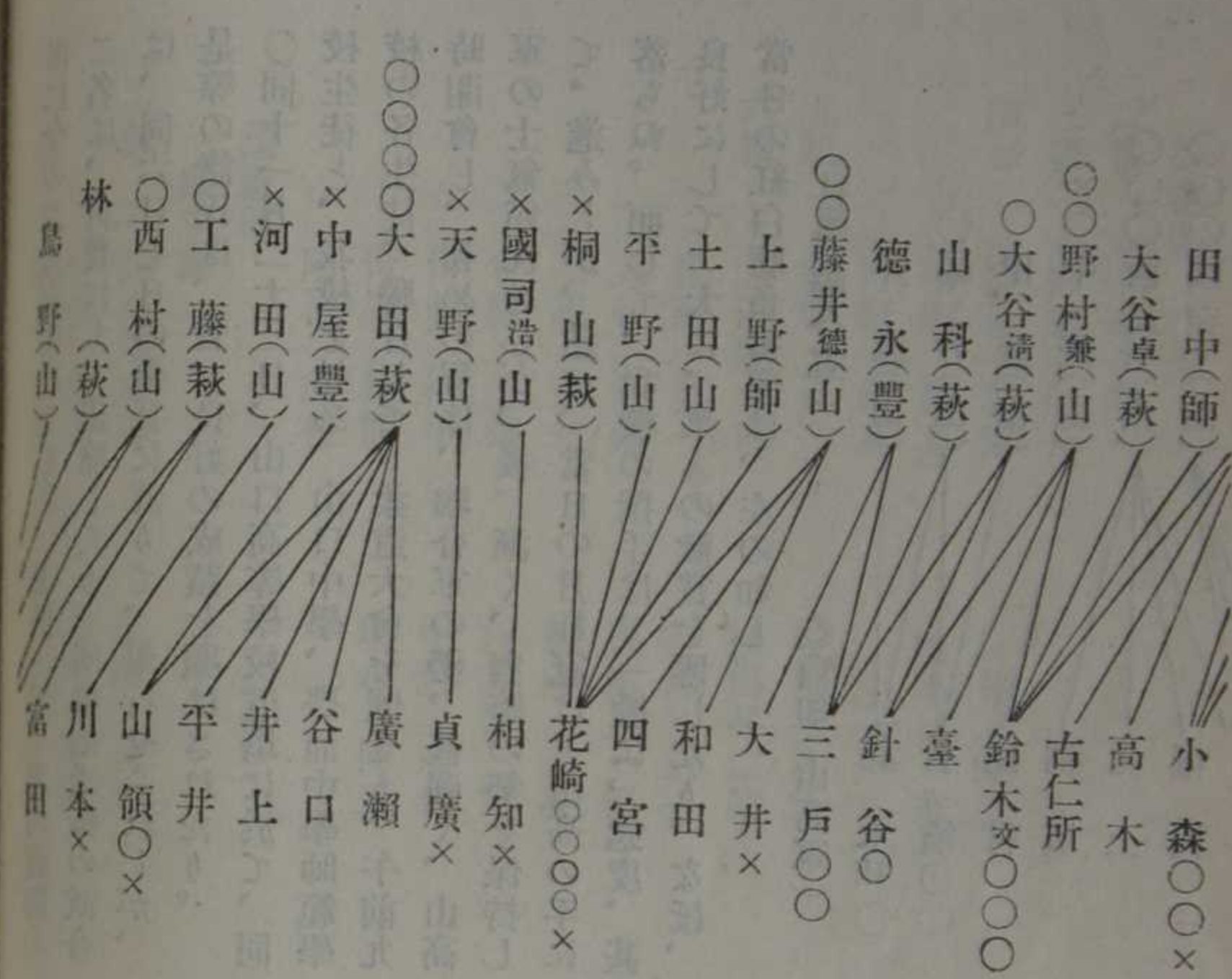
○明治三十六年八月一日より六日まで、京都に於て舉行せられたる第五回青年大演武會に出席の爲め、本會よりは、經費の一部を支給して、柔術に、佐々木嘉春、奥田又助の二名を、擊劍に、末永柳一、村

田仁介の二人を出席せしめ、大田三郎、赤川義助の二名は、自費にて、出席したり。同擊劍柔術の試合は、同六日七日の兩日に渡りて、舉行せられしが、是等の諸氏は、皆、良好の成績を顯はされたり。○同十一月二十三日、山口高等學校道場に於て、同校生徒と、我校を始め、山口中學、豊浦中學師範學校の各生徒、聯合して、柔道大會を催せり。午前九時開會し、初めの程は、聯合軍の勢、甚強く、山高軍の士氣銷沈せしが、後、漸く、對等の勢を保持して、進みしが、遂に、當日の月桂冠は、山高の手に落ちぬ。而して、我校の撰手は、一般に、態度、甚良好にして、大に、衆人の歎賞を博したり。なほ、當日の紅白勝負番組は、左の如し。

紅組(聯合軍)

白組(山高軍)





選せるもの、如し。殊に、皆勤者。甚多く、柔道に五十八名、擊劍に、二十八名の皆勤者を出せり。嗚呼、亦盛なる哉。是等の皆勤者には、夫々、賞牌を授與せられたり。

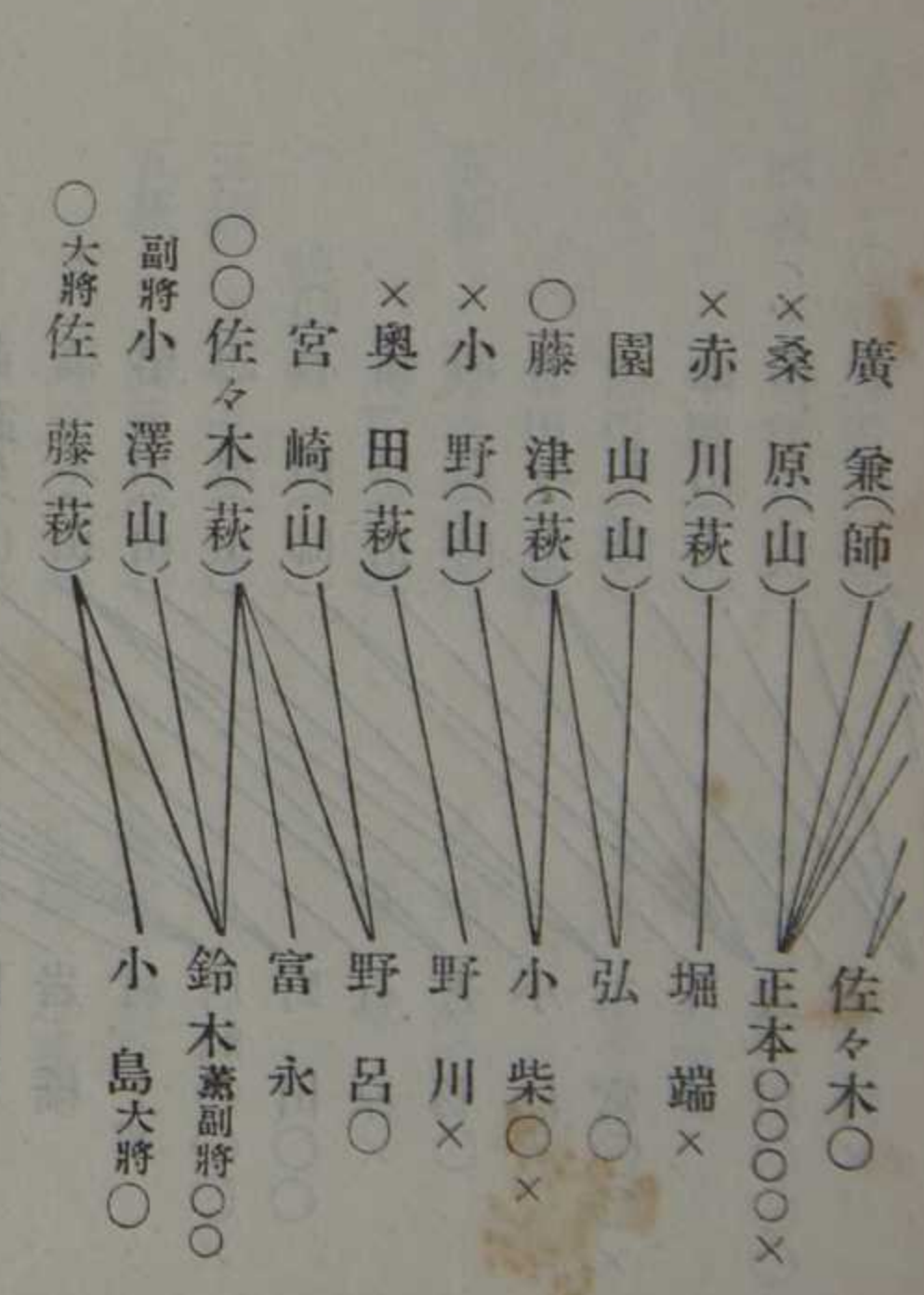
山口縣立萩中學校々友會明治三十六年度經費決算額及同三十七年度豫算額報告
明治三十六年度校友會經費決算額左の如し

受の部

- 一金貳百五拾五圓七拾九錢參厘 前年度繰越高
- 一金四百參拾貳圓貳拾錢 生徒會費
- 一金百貳拾壹圓五拾四錢五厘 職員會費
- 一金七拾五圓拾錢 運動會寄附金
- 一金拾四圓參拾貳錢 不用物品賣却代
- 一金拾八圓七拾九錢壹厘 銀行預金利息
- 一金壹百圓 肄育獎勵費(縣費補助)

拂の部

- 合計金壹千拾七圓七拾四錢九厘
- 一金貳百參拾四圓七拾壹錢八厘 擊劍柔道部
- 一金九拾貳圓八拾壹錢 球術部
- 一金貳拾壹圓五拾五錢 ボート部



講道館勝負法之形 片山 國幸
講道館投之形指導 松代林 太郎
伊藤 藤 弘

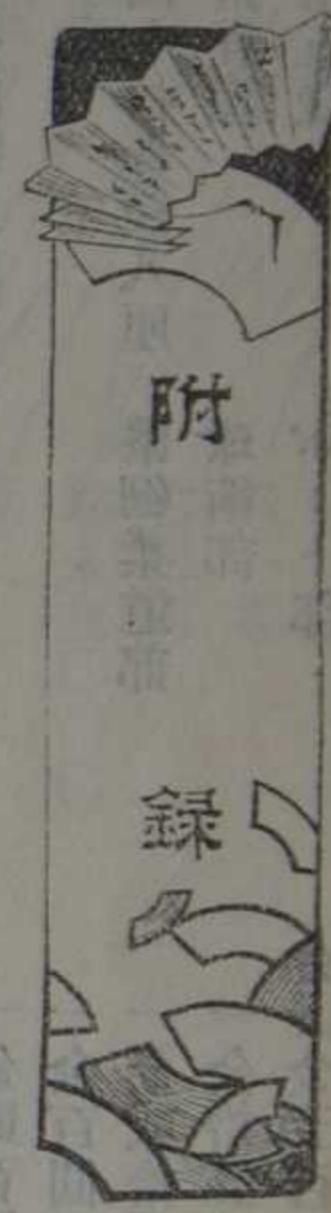
注意 表中(萩)(山)(豊)(師)ハ萩、山中、豊浦中學校及師範校ノ略符
×ハ引分○ハ勝ちシ本校ナリ

○明治三十七年一月九日より、同三十日まで、三週間、例年の通り、放課後、武術寮稽古を舉行せしが、部員は、皆、熱心に、其技を練磨せられたり、大に、上

- 一金貳百六拾六圓四拾錢六厘 運動會費
- 一金參拾圓 樂器購入基金
- 一金四圓貳拾錢 父兄保證人費
- 一金九圓七拾錢 生徒遠足費
- 一金參拾壹圓五拾八錢 雜費
- 合計六百九拾圓九拾六錢四厘
- 差引金參百貳拾六圓七拾八錢五厘 翌年度繰越
- 明治三十七年度校友會經費豫算額左の如し

收入豫算の部

- 一金百〇九圓六拾八錢 職員會費
- 一金四百貳拾八圓貳拾錢 生徒會費
- 合計金五百參拾七圓八拾八錢
- 支出豫算の部
- 一金六拾圓 文藝辯論部
- 一金八拾圓 ボート部
- 一金貳百圓 球術部
- 一金貳拾貳圓八拾八錢 擊劍柔道部
- 一金拾五圓 陸上運動會費
- 合計金五百參拾七圓八拾八錢 雜費
- 保證人會費



山口縣立萩中學校職員表

明治三十七年三月一日現在

受持學科	職名	氏名
修身學	校長	雨谷 羔太
物理學	兼舍監	塚本 又三郎
英語	諭	岩田 博藏
國語	諭	安藤 藤
修身	諭	藤井 百輔
國語	諭	宮澤 精一
國語	諭	濱中 半三郎
代數幾何三角	諭	藤原 甚吉
動物植物	諭	河野 春造
算術	諭	井上 要二

生徒郷貫別調査表

(明治三十六年九月一月現在)

會	會	庶	英	生	兵	地	兵	國	地	英	國	英	算	英	普
計務	主	主	式	式	式	式	式	式	式	式	式	式	式	式	式
計任	任	任	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理	理
學	書	書	書	囑	囑	助	助	教	教	教	教	教	教	教	助
校			託	託	諭	諭	諭	諭	諭	諭	諭	諭	諭	諭	諭
醫	記	記	記	員	員	得	得	得	得	得	得	得	得	得	得
有	金	伊	波	エム、モスサ、スマイザ	有	上	青	溝	中	中	龜	郡	坂	山	順
福	子	藤	多		福	野	木	部	山	村			田	本	野
直					直	富	恭		安	秀			庫	忠	多
三	精	義	政		三	五	太		之	次					
郎	一	光	義		郎	郎	郎	六	助	郎	昇	厚	吉	助	介

卒業生卒業後ノ狀況調

(明治三十七年六月廿日調)

學 校 名 等	第一回卒業	第二回卒業	第三回卒業	第四回卒業
高等學校入學ノモノ	四	六	二	一
高等師範學校入學ノモノ	一	三	一	一
士官候補生トナリシモノ	一	一	一	一
海軍兵學校入學ノモノ	三	三	一	一
海軍機關學校入學ノモノ	一	一	一	一
商船學校入學ノモノ	二	一	一	一
臨時教員養成所入學ノモノ	一	一	一	一
高等師範學校官費專修科入學ノモノ	一	一	一	一
高等商業學校入學ノモノ	一	一	一	一
高等工業學校入學ノモノ	一	一	一	一
外國語學校入學ノモノ	一	一	一	一
農科大學實科入學ノモノ	一	一	一	一
札幌農學校入學ノモノ	一	一	一	一
醫學專門學校入學ノモノ	一	一	一	一
郵便電信學校入學ノモノ	一	一	一	一
臺灣協會學校入學ノモノ	一	一	一	一

北米合衆國へ遊學ノモノ	一	一	一	一
官廳ニ奉職ノモノ	一	一	一	一
小學校教員奉職ノモノ	一	一	一	一
一年志願兵ニ採用セラレタルモノ	一	一	一	一
實業ニ従事ノモノ	一	一	一	一
死亡ノモノ	一	一	一	一
高等ノ學校入學ノモノ	六	五	二	四
現時ノ獨習中ノモノ	四	六	一	三
不詳ノモノ	三	二	一	一
計	三七	四二	五二	五三

備考 本表中第一回卒業生中高等學校入學者四名ノ内一名及海軍機關學校入學者一名ハ入學後死亡シタルモノナリ

自明治三十四年度(自第一回)至全三十六年度(至第三回)本校卒業生ニシテ高等ノ學校等へ入學ヲ許可セラレシモノ左ノ如シ (明治三十七年六月廿日調)

入學學校名等	本校卒業年月	卒業生氏名
廣島高等師範學校	明治三十四年三月	政人
市立大阪高等商業學校	全	喜與
岡山本村	全	喜與

乃美忠次
山縣恭輔
小池武彦
讀井毅一
河野光三
曾野博篤

曾野博篤



會告

本誌は、毎年發行の都合なりしも、財政困難のため、往昔今日に至りしは、生等の、甚遺憾とする所なり。然るに、會計も、漸く、整理せられたれば、明年度よりは、誓つて、五月を期し、必ず、發行すべければ、卒業生諸君には、毎年四月末日までには、是非、玉稿を寄せられたく、希望する所なり。且、本誌入用の方は、同日までに、金拾錢（二錢郵便切手五枚にても宜し送附せられたし。

明治三十七年七月

編輯員一同

明治三十七年七月十七日印刷
明治三十七年七月二十日發行

（非賣品）

發行兼編輯者

山口郡阿武郡萩町第五
百二十八番屋敷住士族

波多政義

印刷者

東京市京橋區西紺屋町
二十六七番地

佐久間衡治

印刷所

東京市京橋區西紺屋町
二十六七番地
株式會社 秀英 舍



校友會雜誌

第四號

明治三十八年七月發行

山口縣立萩中學校校友會